JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	武道修練を通じたウェルビーイング形成メカニズムの研究：世界誠道空手道連盟誠道塾の事例分析
Author(s)	金山，逸郎
Citation	
Issue Date	2023-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	ETD
URL	http://hdl.handle.net/10119/18412
Rights	
Description	Supervisor:白肌 邦生，先端科学技術研究科，博士

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

博士論文

武道修練を通じたウェルビーイング形成メカニズムの研究：

世界誠道空手道連盟誠道塾の事例分析

金山 逸郎

主指導教員　白肌 邦生

北陸先端科学技術大学院大学

先端科学技術研究科

令和 5 年 3 月

Abstract

Martial Arts (Budo) is a service system in which instructors and students co-create physical and mental values through training encounters in a physical servicescape—the dojo. In this paper, I analyzed how actors develop eudemonic well-being in this servicescape.

As a theoretical framework, I first selected the stage-based perception theory of servicescapes and supported the process of behavior change based on the interaction between participants and the environment. In addition, I constructed an analytical framework focusing on value co-creation, institutions, and the components of the service ecosystem, while utilizing the Service Dominant Logic (SDL), which views services as a value co-creation process among actors, and the Transformative Services Research (TSR), which explores uplifting change to improve the level of wellbeing.

Based on this analytical framework, primary data was collected from 19 members of the World Seido Karate Organization Seido Juku, which has been active worldwide for more than 40 years. 19 members were interviewed or surveyed by questionnaire. In addition, secondary data such as interviews in print and books were also used in the analysis. The results showed that (1) the participants integrated the value co-creation learned through the training at the servicescape as a model for daily life, (2) the servicescape created positive mental change in the participants and promoted their personal growth.

I found that the totality of the dojo, including philosophies, training systems, and acquired outcomes, through the interaction of the participants in the dojo, became an operant resource called eudaimonia, and as a servicescape, it was considered to be transformed into a mindset that transcended physical space. In other words, the dojo emerged as an omnipresent concept of servicescape, which may or may not be a physical place, as a place to exchange services. Specifically, it is a servicescape that has been elevated to a mindset.

It was found that what participants acquire through continued practice in the dojo is the ability to proactively create a eudemonic state by finding the dojo in their mental models. This supports sustainable personal growth, and the dojo is also perceived as a eudemonic servicescape, thus gaining sustainability. Based on these findings, this paper develops a theoretical model of the co-creation mechanism that enhances human eudaimonia in this service system.

Keywords: Martial Arts, Budo, Karate, Dojo, Wellbeing, Servicescape, Service Dominant Logic, Transformative Service Research, Value Co-Creation, Eudaimonia

目次

図目次 iv
表目次 v
用語の説明 vi
第一章　序論 1
1.1 研究の背景 1
1.2 研究の目的 2
1.3 リサーチクエスチョン 2
1.4 研究方法 3
1.5 本論文の構成 4
第二章　先行研究レヴュー 5
2.1 サービスシステム 5
2.1.1 サービス・ドミナント・ロジックの考え方 5
2.1.2 サービスエコシステムと制度的ロジック 6
2.1.3 サービスシステムとしての武道 7
2.2 ウェルビーイング 11
2.2.1 主観的ウェルビーイングとエウダイモニック・ウェルビーイング 11
2.2.2 フロネシスとエウダイモニア 12
2.2.3 武道におけるウェルビーイング 15
2.3 ウェルビーイング志向の価値共創 17
2.3.1 価値創造とウェルビーイング 17
2.3.2 トランスフォーマティブ・サービス・リサーチ 18
2.3.3 オーセンティック・リーダーシップの交換 19
2.3.4 サービススケープの機能 20
2.4 小括 22
第三章　研究１　誠道塾のフィロソフィーと修練システムの分析 22
3.1 方法 22
3.1.1 目的 22
3.1.2 調査内容 23
3.2 結果 24
3.2.1 誠道塾のフィロソフィー 24
3.2.2 誠道塾の修練システム 28
3.2.3 中村忠氏の信念・価値観 31
3.2.4 フロネシス/中庸 40
3.3 発見事項 43

3.4 小括 44
第四章　研究２ 道場でのサービス交換の分析 44
4.1 方法 44
4.1.1 背景 44
4.1.2 研究デザイン 44
4.1.3 対象と調査内容 45
4.1.4 分析方法 47
4.2 結果 48
4.2.1 入門のモチベーション 50
4.2.2 道場への認識 51
4.2.3 道場での相互作用 53
4.2.4 アウトカム 54
4.2.5 日常生活での行動 57
4.2.6 修練継続期間の違いによる意識・行動の変化 61
4.3 発見事項 63
4.4 小括 64
第五章　ウェルビーイング形成のメカニズムについて 64
5.1 サービススケープとしての道場 64
5.2 道場におけるサービス交換 67
5.3 武道修練を通じたウェルビーイング形成のメカニズム 68
5.3.1 誠道フロネシス 68
5.3.2 ウェルビーイング形成のメカニズム 71
5.4 小括 74
第六章　結論 74
6.1 結論とリサーチクエスチョンへの回答 74
6.2 理論的含意 77
6.3 実務的含意 78
6.4 将来研究への示唆 78
6.5 小括 80
引用文献 81
閲覧 URL 92
業績リスト 93
謝辞 94

図目次

図 2-1　サードプレイスの関係性モデル ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
図 3-1　誠道塾のフィロソフィー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
図 4-1　データの構造 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
図 4-2　道場でのウェルビーイング形成の流れ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
図 5-1　誠道塾道場のサービススケープの段階的認知変化 ・・・・・・・・・・・・・・・65
図 5-2　武道修練を通じたウェルビーイング形成のメカニズム ・・・・・・・・・・・・・72

表目次

表 2-1　武道の定義と理念（日本武道館）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
表 2-2　各武道団体における理念　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
表 2-3　性格的徳の一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
表 3-1　二次分析に使用した書籍及び URL　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
表 3-2　中村忠氏に対する半構造化インタビューの設問　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
表 3-3　誠道塾のフィロソフィーの要素・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
表 3-4　道場の意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
表 3-5　心　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
表 3-6　自分の道を歩む　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
表 3-7　自分自身の態度　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
表 3-8　他者との関係性を重んじる　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
表 3-9　フロネシス/中庸・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
表 4-1　修練者に対する質問　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
表 4-2　インタビュー対象者及び質問紙回答者　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
表 4-3　修練継続期間の違いによる意識，行動の変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
表 5-1　中村忠氏のオーセンティック・リーダーシップ　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68

用語の説明

■道場

仏法の修行の場，寺院を指すが，転じて武芸を伝授し修練する場所.（広辞苑 第七版,（2018），岩波書店）

■道（「どう」または「みち」）

１）人として守るべき条理. また, 宇宙の原理.　２）神仏の教え．仏教では特に，菩提・悟り，あるいはそのための実践のことを言う　３）専門の学問・技芸・運動などの世界，また，その修行過程 4）人が考えたり行ったりする事柄の条理．道理.（広辞苑 第七版,（2018）,岩波書店）

■塾

江戸時代に生まれた学問，武芸，その他いろいろの芸道に関する民間教育機関.
（コトバンク　https://kotobank.jp/word/%E5%A1%BE-170834）（2020 年 4 月 10 日閲覧）

■ウェルビーイング

健康や幸福を意味する言葉．世界保健機関憲章前文を参考.
“Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity. ”
「健康とは，病気ではないとか，弱っていないということではなく，肉体的にも，精神的にも，そして社会的にも，すべてが満たされた状態にあることをいいます.」
（日本 WHO 協会仮訳　https://japan-who.or.jp/about/who-what/charter/）（2022 年 11 月 4 日閲覧）

■アップリフティングチェンジ

道徳的，精神的，文化的なレベルなどを高めるように，人の気分や精神の向上を促すような形でポジティブになること（Cambridge Dictionary を参照し，著者が定義）
（Cambridge Dictionary　https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/uplifting）
（2022 年 12 月 22 日閲覧）

■誠

「誠」は儒教において,「仁，義，礼，智，信」の 5 つの徳を備えることで人生が豊かになることを説き，これらの教えを行動として表したもの．善を本質とした実践的精神であり，自己の行為を厳しく反省すると共に，天道（自然の摂理）を達観して，自己の生き方そのものとして，その真実であり，最善であると信ずる精神を，発揮すること．
（『大学・中庸』新釈漢文大系（1976），p177 p180，岩波書店）

■エウダイモニア

アリストテレスの定義「エウダイモニアとは何も欠けることがなく自足的な幸福であり徳に即して生じる魂の活動である」
（朴 一功訳,(2002),「ニコマコス倫理学」第 10 巻第六章,京都大学学術出版会）

第一章　序論

1.1 研究の背景

武道（Martial Arts）は，指導者と生徒らというアクターが，物理的サービススケープである道場の中で，稽古というエンカウンターを通じて肉体的・精神的価値を共創するサービスシステムである．現在，世界的に武道を学ぶ者は多い．公益財団法人日本武道館の統計（2016）によると，柔道など武道 9 種目に海外 5000 万人超の武道人口があるという．武道は伝統的に，「戦うことを学ぶ前に，人を扱うことを学ぶ」(Barczynski & Maciej Kalina, 2009)，「スピリチュアルな修行」(Dodd & Brown, 2016,p43)であると言われている．修行のプロセスにおいて，参加者は時に肉体的苦痛や挫折を経験するものの，何らかの心の強さとしての自立心を形成していくことが指摘されている(Kauka, 2018; Sasaki, 2006,p13)．武道というサービスシステムは参加者が，人生に意味や方向性を持っているという状態であるエウダイモニック・ウェルビーイング(Ryff, 1989)の形成を支援する独特の特徴があると考えられる．しかしながらサービスシステムを構成するサービススケープやアクターの行為や認識（規範意識などの制度を含む）がどのようにして武道修練者の価値につながっているのかについては十分に知られていない．

Bitner et al. (1992)は，サービスプロセスを取り巻く物理的・非物理的要素で構成される空間のことをサービススケープと定義した．参加者はサービスの場での相互作用経験を通じて，サービススケープに何らかの意味付け行為をしている(Ballantyne & Nilsson, 2017)．Rosenbaum(2006)は，この行為に着目し，サービス参加者がサービススケープに対して段階的に形成する知覚の理論を構築した．サービススケープは参加者が自分自身について考え，認識を深める場として機能し(Cuba & Hummon, 1993; Ekinci et al., 2013; Rosenbaum & Massiah, 2011; Wattanasuwan, 2005)，それにより，場の持つ意味を変え，資源統合のあり方をも変えていく(Elliott, 1997; Rosenbaum et al., 2017)ことが知られている．こうしたアクターの知覚のダイナミクスは，道場というサービススケープにおいても機能し，それが武道修練者の価値共創に影響している可能性があるものの，未だ十分に研究されていない．

サービス・ドミナント・ロジック（Service Dominant Logic）：SDL は，サービスをアクター間の価値共創プロセスとして捉える見方である．参加するアクターは，資源統合を通じて，交換可能な新たな資源を創出し(Vargo et al., 2004; Vargo & Lusch, 2011)，相互作用を通じて自らのウェルビーイング形成に貢献している(Anderson et al., 2013; Ekman et al., 2016; Koskela-Huotari & Vargo, 2016)．

トランスフォーマティブ・サービス・リサーチ（Transformative Service Research）：TSR とは，サービス主体と消費者間の相互作用によって，両者のウェルビーイング向上のためにアップリフティングチェンジや改善をもたらすことを探求するサービス研究(Anderson et al., 2013; Anderson & Ostrom, 2015)である．ここで，人間の positive な心理要素の醸成には人間の身体

運動が貢献するところも大きい(Gill et al., 2013; M. E. Seligman & Csikszentmihalyi, 2000; Vuillemin et al., 2005)．スポーツ研究の文脈では，一部の先駆的研究に，ウェルビーイングを向上させるという研究(Greco et al., 2019; Kouali et al., 2020; Lakes & Hoyt, 2004)があるが，武道におけるウェルビーイング形成の研究は十分になされていない(Macarie & Roberts, 2010)．また，それらの研究対象はプロフェッショナルの競技スポーツに関する諸課題(Oishi & Diener, 2001)が中心であり，必ずしも競技性，商業性を伴わない武道についての研究は，十分になされていない．

1.2 研究の目的

エウダイモニアとは，アリストテレスが幸福（Eudaimonia）を，よく生きるうえで追求する目的であるとした．そしてその目的たる幸福は自分だけではなく，国の全市民をも考慮に入れた究極的なもの（最高善）でなければならないと説いている(Kraut, 2015; 朴, 2002)．このような規範的ウェルビーイング観は程度の差こそあれ，自らの幸福の形成や他者の幸福への貢献を目指すものである．このエウダイモニアは様々な人生経験から形成されることが考えられるものの，武道の目指すヴィジョンにおいて，その修練プロセスがどのようにエウダイモニアの獲得に資するのかについては十分に研究されていない．

そこで本研究では，武道修練のプロセスを，稽古というエンカウンタープロセスを通じて，参加者同士が身体的能力向上と精神的自己成長を両立したエウダイモニアとしての幸福の価値を共創するサービスシステムとする．そして，そのサービスシステムにおいて獲得される可能性がある人間のエウダイモニアを高める共創メカニズムの理論モデルを構築することを目的とする．

1.3 リサーチクエスチョン

以上の主旨から，本論文の目的は，武道修練において，アクターに対してウェルビーイングがいかに形成されるのかを明らかにすることであり，それにより，武道修練を通じたウェルビーイング形成のメカニズムを構築するための，課題並びに必要な要素を明らかにすることである．そのために，本論文のリサーチクエスチョンを以下に定める．

MRQ：武道修練において参加者に対してウェルビーイングはいかに形成されるのか？

SRQ1：武道修練におけるサービス交換の基盤は何であり，それはいかに持続されている

のか？

SRQ2：道場では参加者は相互作用からどのようなアウトカムを得ているか？

SRQ3：武道修練においてどのようなサービス交換が行われているのか？

それぞれの RQ の関係性と流れは次のとおりである．
SRQ1 で，当該の道場で修練をする前提となるフィロソフィーや制度を整理することで，道場活動の基盤を見極める．次に，SRQ2 で，実際に修練を継続しているメンバーがどのようなアウトカムを獲得しているかを確認し，その上で，SRQ3 としてこの場においてどのようなサービス交換がなされているのかを考察する．これらの研究の流れによって，MRQ に掲げたウェルビーイングが実際にどのように形成されているのか，そのメカニズムがいかなるものになるのか検証をする．

1.4 研究方法

武道におけるサービス研究は新しい領域と考えられるため，本論文は探索的研究がふさわしいと考えられ，方法論として質的分析方法による事例研究を適用した．そこで，武道修練において，その参加者に対してどのようにウェルビーイングが形成されているのかを明らかにする目的で，半構造化インタビュー及び質問紙により収集されたデータを用いて，事例分析を行った．さらに，出版物や報道，ネット等で一般に公開されている情報でデータの補完をして研究を進めた．

調査対象は，世界誠道空手道連盟誠道塾（以下，誠道塾）である．誠道塾は 1976 年に日本人空手家の中村忠氏によって設立された空手道の流派である．本部はニューヨークにあり，道場を米国内に 45 拠点，世界 109 拠点に展開している．中村忠氏は，「正直な人間といっしょに，お互い協力し合いながら，学び合いながら，人間として人に恥じることのない誠の道を歩む」ことを参加者が修練の拠り所とする設立のフィロソフィーに仕立て，これに沿うかたちで，誰もが心身の成長可能なメディアとして空手を用いることができる修練システムを創造している(中村, 1988)．この流派を対象にした理由は，次の通りである．

誠道塾は勝敗に重点を置く空手界の風潮の中で，他流に見られるスポーツ化した武道とは一線を画し，競技性や選抜制を排し，だれもが修練でき，人生の『道』を辿る本来の武道を標榜して出発した組織である．文化も環境も異なる世界各地に拠点を展開し，人種もジェンダーもハンディキャップも越えて，半世紀もの長きにわたり，競技者ではなく，多くの空手家を輩出し

続けている．それを可能にしている要因が，指導者や生徒である参加者が，その修練の中でウェルビーイングを持続的に形成できているからではないかと考えたからである．

分析者は，誠道塾の東京支部で稽古をした経験を有する．組織関係者が組織分析をする際，利益相反の可能性や客観性の担保が課題になる．これらの点について，まずデータ収集対象の選別においては，筆者が，上級者，中級者，初級者をそのランク（段，級位）から任意に 1 ランクずつ 3 人を選び，半構造化インタビューからデータ収集した．これに加え，主宰者である中村忠氏に本研究の意図を伝えたうえで，地域や国が偏らないように，日本在住のメンバー5 名と海外在住のメンバー11 名を選別依頼し，インタビューと同じ質問内容の質問紙を送付した．国内の研究協力者に関しては分析者が当該組織において空手の修練をする中で面識のあった対象者が含まれ，２名は分析者と同じ場所で修練に臨んでいた．他方，海外の研究協力者については，分析者とは実際に空手を修練する場が異なるために，面識は十分にない．このように，インタビュー選定に於いて，分析者による対象者選定および組織主宰者を仲介した対象選定が行われていることが特徴である．利益相反の可能性はこの段階では十分に回避できているとは言えないものの，聞き取り調査に対する分析者への謝礼や，聞き取り調査内容を組織主宰者が閲覧したりすることは研究の過程において発生していない．また，得られたインタビュー結果の解釈については，本論文執筆の指導教員と度重なる議論をしたうえでコード化を洗練させ，分析者と指導教員双方で合意のできない解釈は排除しながら分析を進めていくことで，客観性が保たれるよう努めた．

1.5 本論文の構成

第 1 章では，研究の動機･背景を述べ，研究方法として質的研究として事例研究を採用した理由を説明し，リサーチクエスチョンを定義した．

第 2 章では，先行研究のレヴューを行う．リサーチクエスチョンへの回答を得ることをベースに，サービスシステム，ウェルビーイング，ウェルビーイング志向の価値共創の視点からレヴューした．

第 3 章では，研究 1 として，対象事例の創始者への半構造化インタビューによる聞き取りのデータを基に，二次情報である創始者の著書，雑誌記事などで補強し，組織のフィロソフィーと運用されているシステムの分析を行った．

第 4 章では，研究 2 として，対象事例の参加者（生徒）へのインタビューによる聞き取りと質問紙による回答からのデータを基に，組織で行われる実践によってもたらされたアウトカムの

分析を行った.

第 5 章では，研究１，研究２で得た結果を基に，対象事例においてウェルビーイングがいかに形成されているのかを検証した.

第 6 章では，前章までの研究から得られた結論と，リサーチクエスチョンへの回答，及び理論的含意，実務的含意の総括をし，整理した内容を記載した.

第二章　先行研究レヴュー

2.1 サービスシステム

2.1.1 サービス・ドミナント・ロジックの考え方

サービスマーケティングの領域で研究が進んでいるサービス・ドミナント・ロジック(Vargo & Lusch, 2004)は，サービスをアクター間の価値共創プロセスとして捉え，その中核であるアクターを，資源統合を通じて，交換可能な新たな資源を創出するという共通な役割を持つ存在として定義される(Vargo & Lusch, 2011)．このような役割を持つアクターはジェネリックアクターと呼ばれる(Kjellberg et al., 2018)．サービス・ドミナント・ロジックはロジックと呼ぶように，観点や考え方であり理論とは謳われていない．有形な生産物であるモノを対象にした，不連続な取り引きが中心の従来のマーケティングの考え方に対して，サービス・ドミナント・ロジックは，経済活動をサービスと捉え，そのサービスにおける無形な対象の取り引きプロセス，資源交換におけるアクター同士の関係性や，そこで生起される価値共創に視点を移した考え方，あるいは世界観と言える(Vargo & Lusch, 2004).

サービス・ドミナント・ロジックでは，生産者と消費者という二極的な見方をせず，消費者は共同生産者であり価値共創者と位置付けられる．このロジックでは，商品主体とサービス主体の考え方を区別するのに役立つオペラントリソースとオペランドリソースという言葉を用いている．この価値共創のプロセスで交換され，作用を起こし効果をもたらせてくれるもの，すなわちオペラントリソースは，知識や技術である．また，価値共創者としてのアクターもオペラントリソースと考えられる．一方でモノや価値共創をするメディアや道具はオペランドリソースであり，すなわちプロセスにおいて作用を受ける存在となる(Vargo & Lusch, 2004)．アクターはリソースとしてネットワークが可能であり，すべてのアクターはお互いの資源統合者であり価値共創者となり得る(Lusch & Nambisan, 2015)．こうして，サービス・ドミナント・ロジ

ックでは，他のアクターが利益を獲得するためにそれぞれの資源を利用するサービスに視点を置くことができるので，社会的な交換に効果をもたらすことができる(Chandler & Vargo, 2011; Vargo et al., 2004; Vargo & Lusch, 2008)．

サービス・ドミナント・ロジックでは，アクターにより共創される価値の中心的な概念が，それぞれが享受するウェルビーイングであると考え，アクターの相互作用が共創価値を達成する上で重要である(Anderson et al., 2013; Ekman et al., 2016; Koskela-Huotari & Vargo, 2016; Kuppelwieser & Finsterwalder, 2016)との考えの上で，サービス・ドミナント・ロジックは，社会的，非営利的，倫理的なマーケティングの根拠となることを指摘されている(Vargo & Lusch, 2008)．しかし，サービス・ドミナント・ロジックは，サービスの生産性や質の向上，あるいは生活の豊かさを目的としていて，意義深い人生の獲得はそのスコープに入っていない(岡部, 2019 p42)．本論文ではサービス・ドミナント・ロジックに沿った形で深い幸福感ともいえる意義深い人生をどう達成できるのかを探求する．

2.1.2 サービスエコシステムと制度的ロジック

サービスエコシステムは，アクター間で共有された制度的理論と，サービス交換による相互作用による価値創造によって資源統合をする自己完結した自己調整システムと定義される(Fujita et al., 2018; Vargo & Lusch, 2016)．言い換えれば，サービスエコシステムでは規範や制度を，アクターを結びつけるメカニズムとして捉え(Baron et al., 2018)，意図的に制度と実践を変化させていくことで，サービスエコシステムはデザインされると言える(Vink et al., 2021)．また，アクターが制度的状況に影響を与え変化させることで，資源の資源性そのものを変化させることができる(Koskela-Huotari & Vargo, 2016)．目の前に壺があったとして，その資源性から見れば，あるアクターにとっては水差しという価値があり，他のアクターにとっては楽器のひとつになるかもしれない．それぞれが持つ制度や文脈によって違いは起こるが，資源性とは資源としての価値が既に存在することではなく，価値共創のプロセスによって生み出される価値を持つことができるという意味であり，アクターが多様な制度をそれぞれが部分的に共有して，資源性の概念を統合し，調整を図ることで新たな価値が創造され得る(Koskela-Huotari & Vargo, 2016)．例えば，地域振興の場面では，地域キャラクターを，アクター間を結びつける共通の制度としての役割と位置づけ，その利用価値を向上させることで，価値共創が促進される(庄司, 2017)．また，食料の浪費と余剰を扱うシステム対して，アクターが直面する制度の見直しがその改善に寄与しているという報告がある(Baron et al., 2018)．さらに，サービスエコシステムにおいて，アクターの経験価値を高めていくことが長期的なロイヤリティに繋がるが，その経験価値は制度に影響される(Akaka & Vargo, 2015)とされるが．武道は伝統的な制度が組織の体制を創っているが，なぜ長きにわたって継続，伝承されてきたのかを探求した研究事例は極め

て少ない．本論文ではそのポイントにアプローチする．

2.1.3 サービスシステムとしての武道

背景

公益財団法人日本武道館（https://www.nipponbudokan.or.jp）では，武道の定義と理念を表 2-1 のように掲げている．内容的にはほぼ重なるが，武道とは，1．日本の伝統的文化であり，２．武技の修練を中心とし，３．心技体を一体として鍛え，４．道徳，礼節を重んじ，５．人間形成を図り，かかる定義をした上で，国家，社会の平和と繁栄に寄与するサービスシステムであると言い換えることができると考える．一方で，武道はスポーツ文化の中で展開されている中で，武道の定義には，競技性を謳う文言はない．

表 2-1　武道の定義と理念（日本武道館）

武道の定義	武道は，武士道の伝統に由来する日本で体系化された武技の修錬による心技一如の運動文化で，心技体を一体として鍛え，人格を磨き，道徳心を高め，礼節を尊重する態度を養う，人間形成の道であり，柔道，剣道，弓道，相撲，空手道，合気道，少林寺拳法，なぎなた，銃剣道の総称を言う． 平成二十六年二月一日制定 https://www.nipponbudokan.or.jp/shinkoujigyou/teigi
武道の理念	武道は，武士道の伝統に由来する我が国で体系化された武技の修錬による心技一如の運動文化で，柔道，剣道，弓道，相撲，空手道，合気道，少林寺拳法，なぎなた，銃剣道を修錬して心技体を一体として鍛え，人格を磨き，道徳心を高め，礼節を尊重する態度を養う，国家，社会の平和と繁栄に寄与する人間形成の道である． 平成二十年十月十日制定 https://www.nipponbudokan.or.jp/shinkoujigyou/rinen

武道の振興，普及のために 1972 年に設立された日本武道協議会に属する各武道団体におけるその理念（表 2-2）にあたるものを見てみると，いずれも修練によって人格形成を促す目的を持っていることがわかる．礼節を重んじ，切磋琢磨することはどの武道にも共通した姿勢であることがわかる．全日本合気道連盟のように初めから競技は行わないと謳っている団体もあれば，全日本剣道連盟競技のように競技は肯定しつつも，それが目的ではないと表明している．また，全日本空手道連盟のように競技において勝ち負けにはこだわらないと言っている組織もある．

表 2-2　各武道団体における理念

武道団体	理念またはそれに準じるもの
全日本剣道連盟	剣道は剣の理法の修錬による人間形成の道である．剣道は剣道具を着用し竹刀を用いて一対一で打突しあう運動競技種目とみられますが，稽古を続けることによって心身を鍛錬し人間形成を目指す「武道」です．
全日本柔道連盟	嘉納治五郎師範は，柔道修行の目的は，攻撃・防御の練習によって身体を鍛練して強健にし，精神の修養につとめて人格の完成をはかり，社会に貢献することであると示されています．（講道館ホームページより）
全日本弓道連盟	弓道の心：弓道は，人生そのものに喩えられます．誰しもが，最初は技術を磨き，上達することを目指します．しかし，上達するにつれて，技術を学ぶだけではなく，自己の人格を磨くことが必要だと気づくようになるのです．このような気づきは，弓道だけではなく，人生のあらゆる局面で起こることではないでしょうか．心と技を一体とし，内面の価値を高め，人生を深く豊かなものにするために，弓道は高い指標「真・善・美」を掲げています．
全日本合気道連盟	合気道は相手といたずらに強弱を競いません．入身と転換の体捌きと呼吸力から生まれる技によって，お互いに切磋琢磨し合って稽古を積み重ね，心身の錬成を図るのを目的としています．また，合気道は他人と優劣を競うことをしないため，試合や競技を行いません．
全日本空手道連盟 空手道憲章より	第一条（目的） 空手道は，日々の心身の練磨を通じて強靭な身体を鍛え，人格を陶冶し，心身ともに有為な人物を育成することを目的とする． 第二条（心構え） 空手道の修行を志す者は，空手道の品位と威厳を保つため，礼節，正義感，道徳心，克己，勇気からなる資質（倫理的規範）の涵養に努めなければならない． 第三条（稽古） 稽古に当たっては，「礼に始まり礼に終わる」の教えに従い，基本を重視し，技の習熟に応じた心技体の融和を求めて修練する． 第四条（競技） 競技や演武に臨んでは，平素練磨した心技体の成果を遺憾なく発揮する．組手競技においては安全に留意し，ルールを遵守し，勝敗にのみ固執することなく，常に節度有る態度を堅持する． 第五条（稽古場） 稽古場（道場，体育館等）は，心身の修養の場であることを忘れず，礼

	儀作法を守り，厳正な規律を維持するとともに，静粛・清潔・安全な環境の維持に努める． 第六条（指導・普及） 指導者は，常に高い倫理観をもって人格を磨くとともに，技術の研究・心身の練磨に励み，常に指導者に相応しい人格者で，社会から尊敬される人でなければならない．また，指導に当たっては，指導者と指導を受ける者が敬愛の情に溢れる節度ある師弟関係を構築するとともに，厳しい修行と安全管理の調和に努めなければならない．普及に当たっては，性別，年齢や障がいの有無にかかわらず，技術主体の普及に偏ることなく，自己責任やフェアプレーの精神を身につけ，他人に対する思いやりと優しさを持ち，常に社会のルール（規範）を遵守し，高い倫理観を身につけ，社会から尊敬される人材の育成に努める．

「術」から「道」へ

古来戦闘の技術として武術と呼ばれてきたものを「術」を「道」に変えて，武道と呼ぶようになったのは，一般的に見て嘉納治五郎が柔術を柔道と呼んだのが最初である．柔術は根本となる道を教えるもので，術はその応用であると言っている．嘉納治五郎は，講道館発行の『作興』という冊子に，昭和二年一月に連載が始まった「柔道家としての嘉納治五郎」というシリーズで，「柔術」から「柔道」へ，と題してこう述べている．

> *「よく考えてみると，**柔術とはいうものの，実際根本となる道があって，術はむしろその応用であるのだ．**故に，まず教うるに道をもってし，しこうして応用の術もあわせ教うるが適当であろう．・・中略・・そもそも自分が柔道を称え出したのは，ただ生花を花道といいなすがごとき類とは撰を異にして，広くかつ深い意味を有しているのである．故に，我が教うる柔道は，在来の柔術とくらべて一段と相違せるものを授けたのである．故にこの柔道を教授する教育所を講道館と命名した．そのわけは，決して単なる武術を教うる場所ではないということを明らかにするためである．もし単に武術の道場と言うならば，練武館，講武館，または尚武館などといったであろう．ことさらにこれを避けて講道館と言ったのは，**道は根本で術はその応用として授けることを明らかにするの意である**．**こ**の考えをもって，明治十五年五月に，講道館を下谷の北稲荷町永昌寺において創始したのである．」（大滝, 1972 p51,52）*

明治期には，知育・徳育・体育の三位一体の教育が謳われ，「術」から「道」になった武道は学

校教育や町の道場で普及していったが，第二次大戦後，武道は日本の国威向上，軍国主義を後押ししたものとして，連合軍の GHQ に禁止された．それを時の教育者たちが運動して取り戻した経緯がある．

ビジネス化する武道

武道は行政においてもスポーツの一端と数えられ，柔道は 1964 年の東京オリンピックから正式種目となり，空手もまた東京 2020 のオリンピックでは参加種目となった．しかし，オリンピックは 1974 年のロサンジェルス大会あたりから，商業主義化し，柔道も JUDO というスポーツへ変化し，ある意味，武道の精神が圧迫されていった．さらに，時間を同じくする 1970 年代頃から始まった格闘技ブームで，武道はスポーツの域を出て，ますますビジネス化，興行化してゆく．

「道」からはかけ離れていく武道に見えるが，一方で，ビジネス化，興行化は武道をマーケティングの領域に押し出したと言える． しかし，このビジネスモデルは，参加者は観戦者であり，実践者ではなく，武道は参加者の体験，実践を通じたサービス交換にはならなかった可能性がある．

スポーツビジネスと武道ツーリズム

近年，スポーツビジネスという言葉が聞かれるようになった．1993 年に発足した J リーグの展開は，地域密着型のモデルとしてその先駆けであった．日本において，「スポーツマネジメント」,「スポーツマーケティング」という分野は発展の初期にあると言えるが，国家や地域経済を活性化させる力を秘めていると考えられるスポーツ(永田, 2011)をサービスビジネスのコンテンツとしてどう扱っていくかは，これからの課題である．しかし，ここで考えられているコンテンツのほとんどは，スポーツをする選手と，それを観るあるいは支える観客との関係から生まれるものであり，顧客がスポーツを実践する参加型のモデルは少ない．

山口 (2017)は，日本の目に見えない資源は頭脳とストーリー，世界観，美意識であると言っている．日本にはアニメーション，マンガをはじめ，世界に広く普及し，いわゆるコンテンツビジネスとして成功している文化的なファクターが多く存在する．さらに，日本の伝統的な文化は世界的に注目を集めることは周知のことである． 武道も茶道，華道，書道などの伝統的な芸道といわれるものの中のひとつと数えられ，サービスビジネスとして，特にインバウンドの観光客に対して，その目的となるコンテンツとして取り上げられている．武道ツーリズムである．スポーツビジネスの中にもスポーツツーリズムという枠組みはあるが，この武道ツーリズムは，身体運動に日本の伝統文化という特徴が加わることで，他のスポーツビジネスとは一線

を画すと考えられる．

実際に，海外からの高い関心を背景に 2018 年 3 月にスポーツ庁は「武道ツーリズム」を取り組みのテーマに掲げた. インバウンドの観光客の目的を武道体験，聖地巡礼などに充てる観光サービスである．以来，先駆的に沖縄県が沖縄空手ツーリズムを推進し，年間に一万人もの参加者を集め，金沢版武道ツーリズム，宮城県武道ツーリズム，九州全域 SAMURAI ツーリズムなどが続いている(横田, 2021)．武道は観光というサービスのなかで新たな方向性を見出していると示唆される．

しかし，武術から人の「道」に変わった武道の本質そのものをサービスと考えて提供している組織の報告は少ない．武道はその定義より，体系化された武技の修錬によって人間形成という人間の成長の機会を提供するサービスであると言い換えることができるが，武道ツーリズムのようなビジネスとしてのサービスシステムではなく，道場の中で行われている参加者の実践に目を向けたサービスシステムとしての武道の考察は，既存研究では十分ではない．本研究はそのことについて探求できると考える．

2.2 ウェルビーイング

2.2.1 主観的ウェルビーイングとエウダイモニック・ウェルビーイング

サービスシステムのアクターらは，相互作用を通じて自らのウェルビーイング形成に貢献している(Anderson et al., 2013; Ekman et al., 2016; Koskela-Huotari & Vargo, 2016). ここで，ウェルビーイングとは the state of being happy, healthy, or prosperous（Merriam-Webster Dictionary）と定義される．

ウェルビーイングの研究には二つの異なる理論的アプローチがある．快楽，楽しみ，満足に関係する幸福実現時の感情で計るヘドニック・アプローチと，人間としての成長, 社会への影響への機能および潜在能力の実現に関係するエウダイモニック・アプローチである．前者は，主観的ウェルビーイングと呼ばれ，認知的側面である仕事，経済状態，人間関係，健康などの生活領域における満足度と共に，感情的側面であるポジティブな感情とネガティブな感情の多寡といった，いわゆる快楽的な感情の度合いの要素を含む．一方で，後者はエウダイモニック・ウェルビーイングであり，心理的ウェルビーイングとも呼ばれ，アリストテレスが行為によって達成されるあらゆる善きもののうちで最高のもので自足的・充足的なものであると定義した「幸福（eudaimonia)」(Irwin, 1999)，すなわち，「善く生きる人生」で最高である善を獲得す

る研究をそのルーツとして，個人のウェルビーイングという私的な領域と，能力，自由，機会という公的な問題との間に橋を架けている(Keyes, 2006; Huppert *et al.*, 2009,p303)．言い換えれば，潜在的な可能性の実現を図り，よく生きること，良い人生を送るために正しい目的を追求すること，そして真の自己を実現することに焦点を当てていて，それは個人の社会構造的文脈の中で形成されるのである(Ryff & Singer, 2008; Tikkanen, 2020)．これは，人間の生き方や生きがいを探求する人格成長の概念と言える(Deci & Ryan, 2008; Ryff & Singer, 1996, 2008)．

エウダイモニック・ウェルビーイングの評価項目として，Ryff(1989)は，このエウダイモニックな観点から，エウダイモニック・ウェルビーイングを次の 6 つの要素から構成した．すなわち，1）自己受容，2）環境支配，3）人生における目的の創造，４）良い人間関係，5）自己の成長が望めること，6）探究心/自律性があることである．Ryan と Deci (2000, 2001)は，日常生活における最適な体験と幸福に関して，有能感，自律性（環境を支配できることも含む），ポジティブな人間関係という 3 つの基本的な心理的欲求が決定的に重要であるという見解を支持している．人々が属する社会的文脈が基本的なこの心理的欲求に応えてくれるなら，積極的で同化的，かつ統合的な性質が上昇するための適切な発達の機会を提供することになる(Ryan and Deci, 2000 p76)とも報告されている．また Seligman(2002) は，幸福を快楽，関与，意味の組み合わせと定義付けている．こうした，いわゆる幸福の定義には論争があり，様々な指標も展開され未解決である．特に異文化間研究において問題が提起されてる(Ryan & Deci, 2001)．

主観的ウェルビーイングの豊かさは，良い社会と良い人生の必要条件であるが，十分条件にはならない(Diener, Oishi and Lucas, 2003 p405)．OECD は，『主観的ウェルビーイングの評価について（Guidelines on Measuring Subjective Well-being）』(OECD, 2013 p29)の中で，ウェルビーイングの評価は，主観的と言われてきた側面と心理的側面と言われてきた側面, すなわち，生活の評価，感情の評価，潜在能力の発揮の評価を同時に観察することを，改めて広義の主観的ウェルビーイングの評価として定義している．このように，主観的ウェルビーイングとエウダイモニック・ウェルビーイングは，何を対象に，またどのような観点から観るのかにより，必要となるファクターが違うことがあるが，それを越えたところに本来のエウダイモニアがあると考えて，本論文は進められる．

2.2.2 フロネシスとエウダイモニア

前項で，主観的ウェルビーイングとエウダイモニック・ウェルビーイングについてレヴューをしてきた．いずれもエウダイモニアを考えるうえで重要なファクターであった．それでは，実際にエウダイモニアとはどのような概念なのか，以下に述べる．

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』の冒頭で,「あらゆる技術，あらゆる研究，同様にあらゆる行為も，選択も，すべてみな何らかの善を目指していると思われる．それゆえ，善とはあらゆるものが目指すもの」と明言している（第一巻 人生の目的 第一章 目的の階層）(朴, 2002 p4). アリストテレスは，行為によって達成されるあらゆる善きものの中で最高のもので，自足的・充足的なものが,「良く生きること」であり「幸福であること」すなわち，最高善，エウダイモニアであるとした(Irwin, 1999; 朴, 2002)．アリストテレスはこのエウダイモニアに対して二つの定義をしている．一つは「エウダイモニアは人間の徳に基づく魂の活動」であり，もう一つは「思考に基づく観照活動」である(菅, 2007)．徳とは何か．それは「人々の様々な魂の状態のうち賞賛に値するものを徳と呼んでいる」(朴, 2002 p54)．そして,「性格における徳」は,善き人になるための行為の習慣によって獲得されるものである．魂の中で起こってることは3つあり，快苦を伴う感情である「情念」，それを受け入れる感受性としての「能力」，そして，様々な情念に対して我々が取り得る「状態」であり，徳とはこの情念でも能力でもなく，情念や行為に対して正しい仕方で対応し，人間を善きものにするために，その潜在能力を発揮させるための状態であるとされる．この状態は，対応する事柄との関係性において，過剰でも不足でもない「中庸（中間の概念)」であると(朴, 2002)語られている．ここでアリストテレスは徳を次のように説明している．

> *情念や行為には超過と不足，中間ということが認められている．たとえば恐れること，自信のあること，欲すること，怒ること，憐れむこと，一般に快楽を覚えたり，苦痛を感じたりすることは，多すぎることや少なすぎることが認められるのであって，どちらの場合も良くないのである．けれども，**しかるべき時に，しかるべきものについて，しかるべき人々に対して，しかるべきことのために，しかるべき仕方でこうした情念を感じることは，中間の最善の状態によるのであり，これこそまさに徳の固有のもの**なのである．同様にまた，行為に関しても超過と不足，中間が見られるのである．徳は情念と行為にかかわっており，情念と行為における超過と不足は誤っているけれども，中間は賞賛され，正しい在り方をしているのである．しかるに，賞賛と正しいあり方のどちらも徳にふさわしい事柄なのである．こうして，**徳とは，中間をねらうものである以上，ある種の「中庸」なのである**（第二巻 性格の徳と中庸説 第六章 徳の定義，および中庸の意味）(朴, 2002 p73).*

時と場合に応じて，情念や行為に「中庸」の状態で対応することが徳の性質なのである． アリストテレスは具体的な情念や行為のファクターを挙げて,「中庸」な状態が何かを示している（表 2-3）． 感情面で恐れや自信，快楽や苦痛といったことを感じる場面では勇気を持つこと．金銭授受の行為においては，金銭に固執しない．また名誉欲に対しては，高邁，自尊の態度．

人間関係においては誠実さ，機知，そして親愛や友愛の気持ちを持つこと．これらが「中庸」の状態であると語っている．

表 2-3　性格的徳の一覧

			超過	*中庸*	*不足*
1	*感情*	*恐れ/自信*	臆病/無謀	**勇気**	無謀/臆病
2		*快楽/苦痛*	放埒/無感覚	**勇気**	無感覚/放埒
3		*怒り*	癇癪	**温厚**	意気地のなさ
4		*恥*	内気	**慎み深さ**	破廉恥
5	*行為*	*金銭授与/受取*	浪費/偏狭（けち）	**寛厚（気前の良さ）**	偏狭（けち）/浪費
6		*大きな名誉欲*	虚栄	**高邁/自尊**	自己卑下
7		*小さな名誉欲*	野心	**高邁/自尊**	無気力
8	*人間関係*	*自己の真実を語る*	自慢	**誠実**	自己卑下
9		*娯楽的快を与える*	悪ふざけ	**機知**	粗野
10		*生活に快を与える*	卑屈	**親愛/友愛**	拗ねる

堀田(1975 p159)，朴(2002 p77)による表をベースに筆者が作表

一方で，アリストテレスは，知識を三つに分類した．すなわち，不変の真理であるエピステーメ（episteme），実践のための技術であるテクネ（techne），そしてこの二つのどちらでもなく善を獲得するための賢慮，すなわちフロネシス（phronesis)である (朴, 2002)．フロネシスは物事や状況に個別に具体的に熟慮し対応することで，道徳的な方向へ導く賢明な決定をする知識である(Eisner, 2002)．アリストテレスは，人間の機能はこの「思慮（フロネシス)」および「性格における徳」に基づいて果たされるとし，なぜならば，徳は目標を正しいものにし，フロネシスはその目標のためにものごとを正しいもものにする実践知であるからだとした．つまり，フロネシスは最高善であるエウダイモニアという目標を実現させるために最善の判断と行為ができる能力そのもののことである．そして，それを行使できる人を「思慮ある人（フロニモス)」と呼んでいる(朴, 2002)．

経営学の文脈においてもリーダーシップ論としてフロネシスの重要性が謳われ，組織において，自己充足的な価値である「善」の判断基準の軸を持って実践的知恵を駆使するフロニモス，すなわちフロネティック・リーダーの必要性が提案されてきた(野中, 2007)．その必要な要素は次のように提示されている．1）善悪の判断能力を持つ　2）場をタイムリーに創発させる能力　3）個別の本質を洞察する能力　4）本質を表現する能力　5）本質を共通善に向かって実現する政治力　6）賢慮を育成する能力である．これはトップマネジメントだけが持つべき資質

ではなく，企業のどの組織，どのレベルにおいても，そのメンバーがそれぞれの立場，状況で必要な資質であり，各職域，職位ですべてのメンバーが持つべき資質である(野中 et al., 2010)とされる．しかし，これは，事業活動を行う営利組織をベースにした考えであり，非営利組織での適用についての報告は少ない．

また，エウダイモニアは真の可能性の実現(Ryff, 1989)であり，どのように生きるかや，人間の生きがいを理解する上で重要である(Deci & Ryan, 2008)．それは，具体的なある活動に完全に従事し，「真の自己」を認識し，それに従って生きることを求める認知的な感情状態(Waterman, 1990)で，そのポテンシャリティの向上に必要なものは，個人の卓越性，すなわち明確な自己効力感，確固とした目標，自己主張の実践，ポジティブな評価等(Waterman, 1993)で，オーセンティック・リーダーシップ(Gardner et al., 2005; Ilies et al., 2005)の発生に寄与する要素に共通するものがある．また，人生の長期的な目標と短期的な日常目標を統合している人は，エウダイモニックな幸福度が高い(Bauer et al., 2008)と報告されている．武道の修練では，技を覚える，使えるようになることが短期的目標であり，一方で，継続修練で人格を陶冶してゆく長期的目標もある．これは自分の人生をどのようにデザインしていくかということでもある．本論文では，武道修練の場である道場が，サービス交換の結果として，エウダイモニアを発生させる場として機能する可能性について検証する．

2.2.3 武道におけるウェルビーイング

スティーブ・ジョブズが禅を実践していたことはよく知られている．世界的にブームになっている「マインドフルネス」は，意識的な注意と気づきが積極的に培われる禅などの伝統に根ざすもので，実際に禅の修行者の調査から修行によって培われることが示唆されていて，マインドフルネスのトレーニングとウェルビーイング形成との関連が多く議論されている(Brown & Ryan, 2003)．日和 (2018) は, マインドフルネスを「自らが意図した方向に注意が向けられ，それに伴う自らの体験に気づいている状態」と定義し，瞑想による注意制御や身体感覚の観察力の訓練が，心と身体双方を変容させ得るとして，神経科学の文脈からマインドフルネスをウェルビーイング促進の手段の一つとして取り上げている．

弓道を通じて禅を世界に紹介したヘリゲル(1979)は，弓道の昇段審査で，師から次のように言われたと言う．

> *その際肝心なのは，単にあなた方の技量をやってみせることではありません．むしろ射手の精神状態が，人目につかぬ程の挙動に至るまで，ずっと高く評価されることです．とにかく私はあなた方が，見物人の居ることに*

よって惑わされず，全く無頓着になって，従来通り全く吾々だけしかいないように礼法を行えるよう，特に期待します.（ヘリゲル, 1979 p157,158）

福島(1998)は，禅は無の宗教であり，悟りの宗教であると説いている．無になる体験とは，自他，善悪などの二元的対立から解放され二元を越えてひとつになる体験だとし，エゴを捨て無の自己になるとき真実の人となる，すなわち無心の悟りが起こると言っている．禅僧の沢庵宗彭（生1573-没1646）の『不動智神妙録』に見られる「剣禅一如」(池田, 1976)という言葉は，剣と禅の道の共通点である「無心」を捉えて「一如」と称している(笠井, 2010)．武士の本分を果たすにはいのちの根源を明らかにしなければならないため，生死を越えた世界に到達する必要があることから，剣道は剣の上の禅であると言われてきた(大森, 1974 p8).「有限の中にあって無限なるものと合一し，あらゆる瞬間に永遠であること」は，宗教を問わずその本質という点でほぼ一致していると考えられる．宗教の目的達成のために，方法論として祈祷型と禅定型があり，前者は個（修行者）の外部に全（神）があるものとし，後者は個即全という立場を取る．後者に属する禅とは，真実の自己に目覚め，真実の自己をしっかり掴むことであり，さらにその真実の自己を日常生活に十分に活かし，世の中全体を浄化しつつ，人間としての本当の生き方をしてゆく実践と言える．禅定型は，修行によって本来自分が全であることを体験，実証するもので，その実修に関する指導，解説，日常生活への規範の提示が必要となる(大森, 1975 p12-15).

武道は禅と親和性があり，一つの道を進みゆく，書道，茶道と同じく「道」という概念を持つ伝統文化であると共に，禅のマインドフルネスからウェルビーイングに通じるものを持っている．今日の武道では実際に稽古の際に座禅や黙想の時間を設けていることが一般的である．しかし，武道修練における座禅等の禅由来の稽古は修練の一部であり，それによってのみウェルビーイングが形成されるわけではない．また，禅そのものには，目標がなく無になることという形而上の目的はあるものの，考え方や座り方の指導所はあっても，修養者のだれもが修養を継続してゆく誘因となるシステムや仕組みは存在しない.

2022 年 3 月 25 日，文部科学省はスポーツ庁を通じて，第三期スポーツ基本計画（https://www.mext.go.jp/sports/content/000021299_20220316_3.pdf）を発表した．その内容は第二期の成果を総括すると共に，同期間内に開催された東京 2020 オリンピックのレガシーを継承し，さらに新たな視点を追加するものであった．前期の，人口減少・高齢化の進行，地域間格差の広がり，ＤＸなど急速な技術革新，ライフスタイルの変化，持続可能な社会や共生社会への移行等の社会の変化を通じて改めて確認された「楽しさ」「喜び」「自発性」に基づき行われる本質的な『スポーツそのものが有する価値』（Well-being）に基づいた施策の構築である．このスポーツ基本計画においてウェルビーイングという言葉が使われだしているが，具体的にどのような形で，ウェルビーイングが形成されていくのかは，計画がその緒に就いたばかりであり未知数である.

人間の positive な心理要素の醸成には人間の身体運動が貢献するところも大きい(Gill et al., 2013; M. E. Seligman & Csikszentmihalyi, 2000; Vuillemin et al., 2005)．身体運動を伴うスポーツ研究の文脈では，スポーツは自尊心や気分高揚を誘発し，身体的・精神的に有益(Gratton, 2004; Wheatley & Bickerton, 2017)とされ，そのポジティブな体験は適切なライフバランスや幸福感に影響することが示されている(Downward & Rasciute, 2011; Lundqvist, 2011; Wheatley & Bickerton, 2017)．一方で，身体活動を伴う武道の研究では，勝敗に対する心身の反応(Salvador, 2005) や，競技能力の向上(Bu et al., 2010)，青少年の発育，教育に与える影響(Fukuda et al., 2011)についての報告があるとされている．一部の先駆的研究に，教育現場での武道修練による心理社会的介入が青少年の自己調節能力を高め，ウェルビーイングを向上させるという研究(Greco et al., 2019; Lakes & Hoyt, 2004)があるが，武道という価値創造プロセスにおいて，どのようにアクターのウェルビーイングを形成しているのかについては十分に研究されていない(Macarie & Roberts, 2010)．本論文では，武道を通じたウェルビーイン形成について掘り下げてゆく．

2.3 ウェルビーイング志向の価値共創

2.3.1 価値創造とウェルビーイング

Rokeach(1973)によれば，価値観は機能的に統合された認知的体系をなし，目的や行動をいくつかの選択肢のなかで望ましいと考える信念と定義することができる．中心的な信念とその周りに機能的に形成されている信念，態度，価値がある．価値にはパーソナリティの一要素となる個人的価値と，社会規範，行動様式や制度として残る，社会的価値がある．こうした仮説を背景に，人間が求める望ましい究極のあり方を示す「最終価値（terminal value)」と，最終価値に到達するために必要な状態を示す「手段価値（instrumental value)」の２つが設定された．しかし，ロケーチの掲げた価値のファクターが，価値観の領域をどの程度包括的かつ代表的にカバーしているかはほとんど検証されていなかった(Braithwaite & Law, 1985)．それに対し，最終価値の獲得手段や関係性を考慮した Schwartz & Bilsky (1987)は，価値が個人の行動の目 標であると同時に，どのような状況においても 個人の行動の根底にある，一貫した概念であると考えた．

マインドフルネスが高い人ほど，内的経験に気づき，自分の行動に気を配っている傾向があるが，価値観に基づく行動は，マインドフルネスよりもウェルビーイングに対して強い予測因子であるとされる(Christie et al., 2017)．一時的に価値観を変えるような出来事があっても，通常の生活が長くなり，自分の価値観を顧みなくなると，元の価値観が知覚や行

動に影響を与えるように作用し続ける可能性がある．時間の経過とともに価値観がどのように変化するか，また，その背景にあるメカニズムについて，体系的な分析がほとんど行われていない(Bardi & Goodwin, 2011). 組織と価値観の文脈では，組織が宣言する価値観と，従業員の行動や態度の指針となる価値観が広く共有され，社会経済環境にプラスの貢献することが，組織のサステナビリティを達成するためには必要であり，その前提には，ポジティブな人間の潜在能力が求められるが，それを扱った研究は少ない(Farcane et al., 2019)．スポーツでの行動の決定における達成動機の役割はすでによく認知されているが，スポーツにおける道徳的態度に影響を及ぼす介在変数になっていると思われる価値観の役割についてはまだ十分ではない(Lee et al., 2008)．武道においては，その原理と哲学の内面化が，価値観の階層において道徳的価値観を基本的な位置に置くとされ，それには価値観の体系を教える指導者が重要な役割を持つ(Kostorz et al., 2017)と指摘されているが，それが機能して，継続されいる組織の事例の報告は少ない．

2.3.2 トランスフォーマティブ・サービス・リサーチ

トランスフォーマティブ・サービス・リサーチ(Transformative Service Research)：TSR とは，サービス主体と消費者間の相互作用によって，両者のウェルビーイング向上のためにアップリフティングチェンジや改善をもたらすことを探求するサービス研究(Anderson et al., 2013; Anderson & Ostrom, 2015)である．SDL では，マーケティングやマネジメントの文脈に対して経済活動をサービスとして見るという新たな視点を持ち込んで，価値共創のあらゆる可能性を視野に入れた(Vargo & Lusch, 2011)が，TSR では，個人や組織のより具体的なヘドニック的，あるいはエウダイモニック的なウェルビーイングのファクターに踏み込んでいる(Kuppelwieser & Finsterwalder, 2016)．TSR はサービスのアウトプットを，必要な人が必要なサービスを受けることができるためのアクセス性の向上，サービスの過程で消費者が何らか不利な状況に陥る可能性としての脆弱性の緩和，幸福や生活の質の向上，公平さの維持，格差の減少に定めている点が特徴である．

サービスは，活動主体の価値観や認識に新たな変化をもたらし，それが当人の活動意欲や潜在能力(Sen, 1999)を引き出す契機になる経験を含んでいる．サービスワークの研究からは，Nasr et al. (2014)および Nasr et al. (2015)は，顧客からの正のフィードバックを得た経験が，サービス従業員の仕事に対する自信や動機の向上に良い影響を与えることを示している．また Sharma et al. (2016)は，組織内サービスが，従業員に対して肉体的・心理的な側面だけでなく，感情的な側面において正の影響を与え，彼らのパフォーマンスを向上させてウェルビーイングを実現することを示した．これと関連して，企業のウェルネスプログラムの効果(Mirabito & Berry, 2015)についてもサービス研究として検討が行われている．

このように，TSR はサービスをその参加者に価値共創における相互作用を通じて前向きな変化をもたらす機会として捉えていることが特徴的である．しかしながら，TSR のそうしたレンズは，いわゆるサービスの商業的活動以外の価値共創の場面においては十分に応用されていない．本論文のテーマに関連するスポーツの文脈においては，スポーツが社会的アイデンティティ形成を育む可能性(Trussell, 2020)および，エウダイモニックなウェルビーイング形成の可能性(Kouali et al., 2020)があることが指摘されつつある．そのため，ウェルビーイングを高めるアスリート支援(Fleischman et al., 2021; Vinet & Zhedanov, 2010)や，関連サービスの提供(Dickson et al., 2016; Fleischman et al., 2021; Inoue et al., 2020)について注目度が高まっている．しかしながら，研究対象はプロフェッショナルの競技スポーツに関する諸課題(Oishi & Diener, 2001)が中心である．空手については，競技者は空手を人生の熱情と認識し，育成過程では多くの価値観と人格への良い影響を感じているが，その目標はより高いランクを目指したり権威ある大会で優勝したりすることに充てられていることが多い(Cynarski & Niewczas, 2019)と指摘されている．このように，必ずしも競技性を伴わないインクルーシブなスポーツのひとつである武道についての研究は，十分になされているとは言えない．

2.3.3 オーセンティック・リーダーシップの交換

リーダーシップは人間関係に埋め込まれた社会的資源の機能 (Day, 2000)と言われ，リーダーとフォロワーという観点ではなく，すべての役割が独自にダイナミックに貢献し，対人影響力を生み出す社会的なコミュニティ創造とその意味づけのプロセスとされる(Drath & Palus, 1994) . エウダイモニアは，正真の自分として完全に活動に従事するときに発生するが，組織におけるエウダイモニック・ウェルビーイングの形成には正真性，すなわちオーセンティシティを発揮するリーダーシップの形成が重要だと言われている(Gardner et al., 2005; Ilies et al., 2005)．正真の自分でいるため，すなわちオーセンティック・リーダーシップを発揮できる状態について 4 つファクターが提案されている． 1) 自己認識：ポジティブな自尊心を持って自己認識する 2) 偏りのない処理：自身に対する情報を過大評価も過小評価もしない偏りのない処理をする 3)真性行動：回りに惑わされず，打算でもなく，自分の信念に基づいた真正行動をする　4)真性な関係性志向： 誠実さに価値観を置き，他者とのオープンな真正な関係性を達成に向けて努力する(Ilies et al., 2005)，である．オーセンティック・リーダーシップの考え方では，リーダーとフォロワー，フォロワーと活動，フォロワー同士の関係性の質と中心性，信頼感は，組織の目標や哲学への忠誠心，エンゲージメントに影響を与え(Ahamed & Hassan, 2011; Macey & Schneider, 2008)，オーセンティック・リーダーシップと持続的なパフォーマンスの関係は，組織の文化や制度などに影響され，形成される可能性がある(Avolio & Gardner, 2005)とされる．オーセンティック・リーダーシップの有効性を評価するには，フォロワーのエウダイモニック・ウェルビーイング形成に対するリーダーの信頼性の効果の重要性が指摘される(Ilies et al.,

2005)．しかし，武道という文脈において師範（指導者）と弟子（生徒）というリーダーとフォロワー，関係性について，稽古（修練）をサービス交換の実践を通して見た場合，オーセンティック・リーダーシップの交換という観点から，そこでどのような価値が交換されているかについての議論は少なく，本論文ではそこに言及したい．

2.3.4 サービススケープの機能

米国の社会学者 R．オルデンバーグは，サードプレイスの存在を示しながら，物理的な場所が人々のウェルビーイング形成に貢献していることを示唆した．ファーストプレイスは家庭生活の場，セカンドプレイスは仕事の場，そしてサードプレイスは本来の自分を感じリラックスできる場である(Oldenburg, 1991)．サードプレイスは社会的に中立な場であり，訪れる人たちに社会的平等を与える場でもある．こうした精神的な安心を与える空間は，さながらよい家庭の雰囲気に究めて近いものだと示唆されている．

Bitner et al. (1992)は，サービスプロセスを取り巻く物理的・非物理的要素で構成される空間のことをサービススケープと定義した．物理的サービススケープ，社会的サービススケープが共創価値に影響し，顧客満足をもたらす(Al Halbusi et al., 2020)ことが報告されている． 物理的要素については，サービス空間における心地よい BGM が消費者や販売員の態度をポジティブにする(Chebat et al., 2001; Dubé & Morin, 2001)ことを始めとして，物理的環境は人間の感情や幸福感に影響する(Russell & Mehrabian, 1977)．また，手入れされた植栽，噴水，歩道などが備わったサービスの場所は個人と社会の幸福度を高め(Rosenbaum et al., 2018)，快適で魅力的な空間は消費者の購買意欲を高める(Baker et al., 1994; Bora et al., 2018; Rayburn & Voss, 2013)．一方，非物理的要素については，他の顧客の存在(Line et al., 2018)や顧客と従業員の社会的相互作用(Pizam & Tasci, 2019)がサービスの空間への肯定的な感情に影響することが知られている．

参加者はサービスの場での相互作用経験を通じて，サービススケープに何らかの意味付け行為をしている(Ballantyne & Nilsson, 2017)．Rosenbaum (2006)は，この行為に着目し，オルデンバーグのサードプレイスの考え方を基にして，サービス参加者がサービススケープに対して段階的に形成する知覚の理論を構築した（図 2-1）．アクター同士の継続的相互作用を通じて，サービス空間が（i）自らのニーズを満たす実用的な空間，（ii）仲間とのコミュニケーションニーズを満たす集いの空間，（iii）個人的・感情的支援ニーズを満たす家のような空間，と多面的に参加者に認識されていく．このモデルは場所の意味が，場所のロイヤルティに影響を与えること(Belk, 1992; Kleine & Baker, 2004)を提示していることが特徴的で，アクターにとってサービススケープに対して，段階的に，実用的な場の価値からの認知ロイヤルティ，コミュニケーションにより生じる社会性による集団ロイヤルティ，その場と自分が不可分となる究極のロイヤ

ルティと，ロイヤルティの変化をたどると示されている．

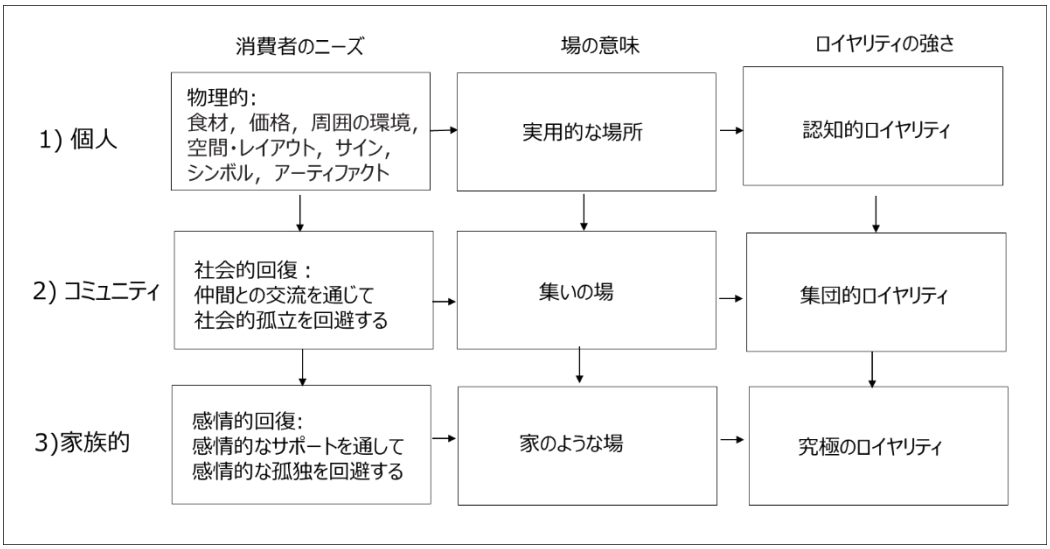

図 2-1 サードプレイスの関係性モデル(Rosenbaum, 2006)

言い換えれば，この意味付け行為は空間ではなく自らにも向けられていくと考えられるということである．なぜなら消費者は店舗の環境や人工物との相互作用を，自己の内面と結びつけてアイデンティティを形成するからである(Belk, 1992; Kleine & Baker, 2004; Milligan, 1998; Pelletier & Collier, 2018; Rosenbaum & Massiah, 2011; Williams, 2002; Woodruffe-Burton & Wakenshaw, 2011)．例えば，ボランティア活動の参加者は活動の場としてのサービススケープに自らの社会的役割を見出し，それが自分自身を表現する材料になる(Mitchell & Clark, 2021; Wymer & Samu, 2002)．つまり，サービススケープは参加者が自分自身について考え，認識を深める場として機能していると言える(Cuba & Hummon, 1993; Ekinci et al., 2013; Rosenbaum & Massiah, 2011; Wattanasuwan, 2005)．

サービススケープでのアクターの行為は，彼らが共有する社会的制度や規範の影響を受ける(Akaka & Vargo, 2015; Baron et al., 2018; Vargo & Lusch, 2016; Vink et al., 2021)と同時に，社会的相互作用によって，それらを変更もしている(Bratman, 1993; Cova, 1997; Kjellberg et al., 2018; Storbacka & Nenonen, 2011; Taillard et al., 2016; Vargo & Lusch, 2011)．例えば Ho & Shirahada (2021)は，日々の買い物に不自由する高齢者を対象にした買い物支援サービスの取組を長期参与観察し，当該サービスのサービススケープでの社会的交換が，契約的規範から利他的規範を形成し，かつ，各アクターの役割認識を変革するプロセスを見出した．サービススケープにおけるアクター間の継続的相互作用が，場の持つ意味と，資源統合のあり方を変えていくのである(Elliott, 1997; Rosenbaum et al., 2017)．このように，サービススケープ上でアクターが行う相互作用は，場所への意味付けと共に自分自身への認識を深め，更にそのサービススケープで共有されている制度を変化させる可能性を持っている．そうしたアクターのダイナ

ミクスは，価値共創プロセスの分析で重要な視点となり，道場というサービススケープで行われる価値創造のプロセスを分析，記述する上で有効であると考えられる．

2.4 小括

文献レヴューにおいて，本論文の内容と構成に関わる分野を大きく３つに分けて整理した．

１）サービスシステム

武道をサービスシステムとして捉える場合の基本的な考え方を抑え，これまでにあまり言及されてこなかった非営利組織の事例におけるサービス交換として研究を進める．

２）ウェルビーイング

ウェルビーイングにはいくつかの種類分け，ファクターの相違があるが，その中で，武道修練においていかにエウダイモニアが獲得されるのかを探求する意味において重要なレヴューとなる．

３）ウェルビーイング志向の価値共創

ウェルビーイング形成にテーマを持つ分野より，本研究の寄って立つ方向性を明らかにし，研究の示唆を受けるためのレヴューである．

第三章　研究１　誠道塾のフィロソフィーと修練システムの分析

3.1 方法

3.1.1 目的

研究１の目的は，誠道塾のフィロソフィーと修練システムの要素を探索し，SRQ1：武道修練におけるサービス交換の基盤は何であり，それはいかに持続されているのか？に対する回答を得ることである．この研究目的を達成するために，誠道塾が修練の基盤方針として標榜しているクレドとモットーについて，その持つ意味について分析する．そして，塾の基盤方針を実践する修練システムおよびそれによる期待効果について分析する．この分析を通じて，武道修練における参加者間のサービス交換の基盤を構成している要素を抽出する．そして，その持続の背景に何があるかを聞き取り調査により分析する．

3.1.2 調査内容

調査は二段階で実施した．第一段階は二次資料の分析である．誠道塾のクレドに集約されているフィロソフィー，それを実現する手段である修練システムについて，表 3-1 の書籍とインターネット記事を用いて内容を整理した．

表 3-1　二次分析に使用した書籍及び URL

書籍名/記事名/URL 名	著者/URL	発行年	出版社/配信者
人間空手	中村忠	1988	主婦の友社
誠道塾空手教本	中村忠	2000	主婦の友社
「人間空手」Hoyu Promenade 第 15 号 pp.6-19	中村忠	2002	駒場東邦中学校高等学校 同窓会 邦友会 広報部
One Day One Lifetime	中村忠	1992	World Seido Karate Organization
Seido Karate	https://seido.com/	—	World Seido Karate Organization

第二段階は誠道塾の創始者であり代表者である中村忠氏への聞き取り調査である．第一の分析からわかった誠道塾の価値，クレドの意味は，常に参加者である修練者に提示されている．知識として理解したその価値観を共有される場が道場の機能とすれば，それを自分のものとし，自分の振る舞いとして発動していくには道場での修練の実践が必要であると考えられる．それがどのようになされているのかを探索することで道場におけるサービス交換の要因を分析した．

本研究は文献による調査から収集されたデータと，インタビューにより収集したデータを併用して探索的に研究していくケース・スタディを用いた．当該の研究方法は，サービス分野においてほとんど手のついていない，修練で起こる事象が把握できていない武道を対象に，現実に起こっていることに焦点を当てて分析をしてゆく手法として，本研究に適していると考えた(イン & 近藤, 2022)．

中村忠氏への半構造化インタビューには表 3-2 に示す設問を用意した．回答をより深く掘り下げるためにプロービング・クエスチョンを用いながら，より深い考察を促し，会話の流れに沿って自由回答形式によって，データを収集した(Creswell & Poth, 2016)．それらをテープ起こしして，テキスト化し，オープンコーディングを行った．これに補完的に公開情報からのデータも含めた．先行研究からは，エウダイモニアを獲得する人間の態度としてフロネシス概念が挙げられている．誠道塾が掲げるクレドや価値観がフロネシスとどのように関連しているのかについて，インタビューデータを分析することで類似点を抽出した．

表 3-2　中村忠氏に対する半構造化インタビューの設問

1	空手の修練にはどのような姿勢が大切だと考えますか.
2	『空手ではなく空手道を教えている』(中村, 1988)という言葉の意味はどのようなものでしょうか.
3	生徒のみならず会長ご自身も成長されていると感じられることが，あればそれはどのようなことでしょうか.
4	ハンディキャップのある方々含めて様々な人たちと一緒に空手をやることで得られるものは何でしょうか.

3.2 結果

3.2.1 誠道塾のフィロソフィー

SRQ1 の武道修練におけるサービス交換の基盤は何であり，それはいかに持続されているのかの回答を得るために，まず，誠道塾の活動を下支えするフィロソフィーはどのようなものであるか考察する．創始者中村忠氏の著書によると，誠道塾で掲げられたフィロソフィーはその要素として次の 3 種類である．(i) 誠は天の道なり，それを誠にするは人の道なり，(ii) 力よりも技，技よりも心，(iii) 尊敬，愛，従順，である．表 3-3 はそれぞれのフィロソフィーの説明にあたると考えられる中村忠氏の記述を抽出したものである．

表 3-3　誠道塾のフィロソフィーの要素

フィロソフィー	出版物に見る中村自身の説明	出典
誠は天の道なり，それを誠にするは人の道なり	誠は天の道なり――誠者天之道也　誠之著人之道也――誠は天の道なり，これを誠にするは人の道なり．新しい道場を開くにあたり，私は大学時代から最も好きだった『中庸』の中のこの言葉から名称をとることにした．――天道の運行はひとつの誤りもない．それ故に「誠は天の道なり」といえる．しかし，人間は人それぞれに私心が働き，ついつい天道に背きがちになる．それ故に人はつねに努力して誠を己の身に具現しなければならない．それが人の道である．――空手を通して誠の道を見出し，把握できるようにと心に念じ，私は新しく開く道場を誠道塾と命名した．**人間として人に恥じることのない誠の道を歩んでいく，それが私のめざすところだった．そのためには，気持ちの通じる正直な人間といっしょに，お互い協力**	1

	し合いながら，学び合いながら，ともに正しい道を歩み続けられるような，そんな組織でなければならなかった．決して大きな組織をつくる必要はない．流派を名乗ることも会派である必要もなかった．そうではなく，寺小屋ではないけれども，小さな組織で本当に気持ちのいい正しい心をもった人たちといっしょに，ただ誠の道を歩むことだけをめざしたかったのだ．誠の道を歩む小さな塾．（中村, 1988 p181）	
力より技，技より心	もちろん武道である以上, 技とか力とかも大事だけれど，**本当に素晴らしい強い人間というのは，いかに心のバランスがとれた人**かということだと思うし，空手はそのための人生修行の手段なのだと思います．（中村, 2002 p7）	2
	ただ力と技があるだけでは空手家としてアンバランスのそしりを免れない．空手家にとって最も大切なもの，それは**「豊かな心」．**（中村, 1988 p213）	1
	空手を習う大半の人にとって大切なのは，空手道を通して，いかに自分の日々の生活をより豊かに，健全なものにしていけるかということである．**人生を豊かにするためのひとつの手段が空手道なのである．力より技，技より心を私が重視する最大の理由はこれである．**（中村, 1988 p218）	1
尊敬，愛，従順	母からの手紙・・中略・・一読した時に，私ははっとした．ひとつひとつの言葉が響き合って焦点を結び，明瞭な感動を伴って胸に追ってきたからだ． 尊敬，愛，従順 -- 私には，それが家庭生活を営む上でも，また仕事においても，社会生活においても，すべてに通じる大切な意味を含んでいるように感じられた．尊敬と愛があってこそ，人間には従順な心が生まれてくる．それは抱擁力といってもいいし，譲り合う心といってもいい．そのような**互いを思いやり，励まし合う心遣いが，尊敬と愛の中から生まれてくることを，この言葉は実に的確に表していた．**シンプルではあるが，その響きと順序が，かけがえのないもののように私には思えたのだ．（中村, 1988 pp225,226）	1
	教えてくれる先生，仲間，そして後輩たちの協力があって，はじめて強くなれたのであり，ほかの人への感謝を忘れては自分の本当の姿を見ることはできない．ハンディキャップを持つ人は，周りの人の手助けが必要かもしれない．しかし，健康な人でも，実は目に見えないところで，多くの人たちに助けられながら生きているのだ．そのことを，空手を通して理解してほしい．そうすれば，**自分より経験が浅い相手に「尊敬」の念をいだき，そこからあふれるやさしさが「愛」そのものになる．そして，自分を指導してくれるさまざまな人たち，両親や先生や先輩への愛は「従順」としてあらわれる．こ**	3

	の謙虚な姿勢が自分のエゴを打ち消すのだ．また，**尊敬，愛，従順の言葉が，他者だけではなく，自分自身に向けられたとき，それは単なるエゴを超越して，生きる希望や自信につながってくる．**（中村，2000 p18）	
	お互いに尊敬し合い，愛し合い，信じ合い，育み合ってひとつの輪を築いていこう．（中村, 1988 p233）	1

出典 1 : 人間空手, 2: Hoyu Promenade 第 15 号, 3: 誠道塾空手教本

最初に上げた，「誠は天の道なり，それを誠にするは人の道なり」は，中国の儒教の古典で四書の一つとして知られる『中庸（朱子章区第二十章，第四段，第一小段)』から引用されている．「中庸」とは字義通り，すなわち過大でも過少でもない状態を良しとする思想である．中村忠氏はこの言葉を，中庸の思想のエッセンスと考え，誠道塾の設立の根本理念として，その組織のネーミングの元とした．この言葉を収める『中庸』の該当箇所について，赤塚（1976,p276）は次のように訳している．

> ***誠とは，天が定めて***あまねくこの世に行われるべきものとして布いる道である．だから***人々が誠を身に備えることは，人としてなさなければならい道***である．（人間について言うと）誠であるということは，ことさらに努力しないでも道にかない，ことさらに思いめぐらさないでも物事の処理が適正をうる（つまり），心の欲するままにして自然に道にかなうということである．この***誠を十全に備えている***ものは聖人である．また，聖人にならって，***誠を身に備える方法は，物事について最善のことを知って選び取り，かつそれを固く守って常にわれとわが身につけておく***ということ，そのことである．

誠とは最高善であり，それを備えた状態になることは，すなわち聖人のようになることは，人が目指す道であって，そのためには最高善を学び，自分のものとして身に着けなければならないと，解釈できる．
また，当段の最後に以下の記述がある．

> もしも他人は才能が優れておって一度で以上のことができるならば，自分はこれを百倍する努力を重ねて目的に到達することを図り，他人が十度でできるならば，自分は千度するように，たくましい気力でつとめるものである．真にこの好学力行の方法をなしおえたあかつきは，***たとえ才能の愚なるものでも必ず明知の人となり，柔弱なものでも必ず強勇の人となって，よく誠を備える***のである．（赤塚, 1976 p227）

これは努力次第でだれもが誠を身に着けることができるという意味である．中村忠氏の自伝的著書「人間空手」においては，「人間として人に恥じることのない誠の道を歩んでいく，それが私のめざすところだった」(中村，1988 p181)と記されている．さらに，誠道塾のホームページ（https://seido.com/）の，About Seido The Sincere Way of Karatedo では，設立の主旨がこう述べられている．

> *"My purpose in founding Seido Karate was to show what I feel is the true essence, the kernel of true karate-do: **the training of body, mind, and spirit together in order to realize the fullness of human potential**."*

> *私が誠道空手を創設した目的は，人間の可能性を最大限に発揮するために，身体，心，精神を共に鍛えるという，私が感じる真の空手道の本質，核心を示すことでした．*

以上より，中村忠氏が創始した誠道塾の根本理念は，「誠を身に着けそれを発揮する，すなわち潜在能力を最大限に発揮できる人間を育むこと」と示唆される．

中村忠氏はこの理念の基に，自分の空手家として，空手指導者としての体験から，流派のスローガンを作っている．それが「力よりも技，技よりも心」である．そもそも中村忠氏は，試合の勝負を重視し，力で押す空手の流派から，自身の信念を持って独立し，誠道塾を立ち上げた．武道は腕力の強さを誇示するのではなく，バランスの取れた心が大事であり，中村が大切にしたものは「人生を豊かにする心」であった．さらにモットーとして「尊敬，愛，従順」が掲げられている．

これら 3 種の理念，スローガン，モットーはそれぞれが独立したものではなく，これらを総合したものが，心の在り方を根底にした誠道塾のフィロソフィーであると考えられる．すなわち，「空手道の目的はそれをライフワークとして誠の道を見出すことである．それは，他人に対する尊敬の念と愛情を持ち，自らは謙虚な気持ちを持って従順に振る舞うことでエゴを打ち消し，自分の日々の生活を豊かなものにし，社会への貢献を実現すること」とまとめられる可能性が示唆される．

3.2.2 誠道塾の修練システム

次に誠道塾の修練システム（Discipline System）について考察した.「人間空手」(中村, 1988) によれば，誠道塾は自らの組織理念を実践するために，次の 3 つの特徴的なシステムを構築している．それは（1）ベルトシステム,（2）昇段審査,（3）そして道場という場を考えさせる指導，である.

（1）の，ベルトシステムとは道着を締める帯の色で熟達度合いを示す，武道に一般的に見られる階級制度である．対象組織では，白帯から始まり，黒帯へ至るまで計 10 段階ある．この色帯の制度は，かつて中村忠氏が生徒に対するモチベーションアップを図るために考案し，以来多くの空手の流派が採用している．誠道塾のベルトランクは稽古内容と密接に関係づけられている．具体的には，シラバスが規定され，それぞれの段階に合わせた空手の型や動きを幾つかのパターンとして学び，それらをマスターして初めて次の段階に行けるように設計されている．帯毎に自分が何を稽古すればよいのかが明確に示されている．体力が向上し，習得した技が組手の稽古に用いることができるようになったと判断できるグリーンベルト（四級：最短でも 1 年以上の稽古が必要）以上になって初めて，組手の稽古への参加が許可されると，明確に定められている．組手の稽古はマウスピースやファウルカップ（男性の急所を防御する）を含めて，グローブやヘッドキアなどプロテクターを身に着け，しかも打撃は常にコントロールし，力任せに相手に当ててはならないというライトコンタクトというルールで行っている．これは，自分の体を守るという意味合いはもとより，相手を傷つけないという理由に基づいている．こうして，誠道塾の修練システムは，事故の予防という誠道塾が第一に掲げる「安全性」の確保と基礎的な稽古の徹底，および生徒の段階的な成長を意図している.

（2）の，昇段審査では，空手の実技審査と筆記試験が課せられる．技が上達した，力がついたという身体的な能力の向上は普段の稽古でも把握できる．そのため，昇段審査では主に「空手の稽古を通じて，どれだけ精神的に強くなり，人間的な成長をしたか」について審査される．ひとつの具体的な審査方法として，例えば「空手の稽古を通じて日常生活にどんな変化がもたらされたか？」というようなテーマが出され，エッセイを作成し，それを稽古仲間であるメンバーの前でプレゼンテーションすることが審査項目に含まれている．空手の稽古について努力したということのみならず，私生活や仕事の場面で直面した問題に対して自分がどう向き合ってきたのかを書くことで自分を顧みることになり，また仲間の前で自分をさらけ出して発表するという経験自体が試験となっている．人間として誠道塾から何を学んだかを評価されるのである.

（3）は，道場という場はサービス交換が行われている現場である．道場という場を考えさせ

る指導をしていることは特に重要であると考えられる．道場については複数の出版物に関連する記載がある．それを表 3-4 に示す．

表 3-4　道場の意義

#	道場の意味	説明記載	*出典*
1	自己研鑽の場	**道場とはそもそも人間の修養の場，人を目覚めさせる場である．**こうした神聖な場所をきれいにするのは学ぶ者の義務であり，またその後で使う者に対する礼儀でもある．掃除はその気持ちを具体的に表す手段である．結局は，それが自分の強さを磨くことにつながってくる．(中村, 1988)	*1*
		道場とは君達の人生におけて自分を見出す場所であり，自分を鍛えるところであり，**自分を素直に見つめる場**である(中村, 2002 p7)．	*2*
2	安心する場/第二の家	**道場に来ればホッとする．**自分の苛立ちや乱れを空手の稽古の中でワーッとアジャストして，上手に消化させるというか燃焼させていく(中村, 2002 p7)．	*2*
		生徒はそれぞれ自分の目標を持ってやっています．大事なことは，生徒たちが**道場を自分のセカンドホーム，第二の家という観点で思ってくれるように指導している**ことです．一番いい例が，911 のテロの際に，門下生達は，心の安らぎを求めるには何がいいかって，結局皆道場来るんですよ・・中略・・事件の後，かえって出席率がよくなってきてるんです．彼らは自分自身にとって道場がいかに大事な場であるかが，分かったんですね(中村, 2002 p7)．	*2*
3	相互理解の場	道場はもっと大きな心で**相手とよく理解し合おうという気持ち**が湧いてくる場でなくてはいけない(中村, 2002 p7)．	*2*
4	オープンマインドになれる場	道場は，ヤーヤーと無機質的な稽古をするただの板敷フロアのロフトスペースのようなところではないんです．**本当に自分が泣いたり，笑ったり，人の絆のありがたさを実感できたり，素直な自分に戻る場所**なんです．道場の床を一生懸命磨くということは，自分をもっと磨かねばいけないんだということをリマインドする．自分を叱咤する．そういう場であるんです(中村, 2002 p7)．	*2*
5	道場を出たら自分が道場を持っている	空手を，単に道場の中だけでなく，**道場を離れた生活の場で生かしてほしいという私の考え**を，具体例を交えて話をするわけだ．道場の中で気合いを入れたら，そのエネルギーを日々の生活にいかに還元させるか，それが大切だと私は思う．だから，私は生徒	*3*

		たちにいつも言う．**「道場を一歩出たら，あなたが道場を持っている」**と．どこへ行こうが，道場を出てからも態度や気をゆるめず，毅然とした態度と人への思いやりを忘れないでほしい．自分が強くなったのも，ほかの人の協力なしにはありえなかったのだということを，肝に銘じてほしい．だから，常に道場の先輩や仲間，後輩への感謝を忘れないようにしなければいけない．そして，道場を一歩出たら，自分を育ててくれた親に対する感謝，社会への感謝も忘れてはいけない．空手を学ぶことによって，自分が生きることへの感謝，そして一息もむだにしない生き方を目ざすことができたら，それこそが生きた空手だと思う．言ってみれば，誠道塾のベルトシステムや稽古体系は，空手を生かすための私なりの工夫によって生まれたものである．**道場を超え，肉体的な強さを超え，生きるために誠道塾空手を使ってほしい．それが私の願いである．**（中村, 2000）	
6	生徒達が共に責任を持つ場	私たちは道場と稽古に対して共に決意を持ちます．**決意を共有することで，道場を汚さないようにする責任を含め，責任が共有されます．**生徒たちは帯の色にかかわらず，稽古後に道場の拭き掃除をします．この伝統は最も古くからあり，すべての伝統的な道場で維持されています．機能的であることに加えて，この行動は私たちのエゴをより小さくする必要性を象徴しています．道場の外で生徒が何をしているかに関係なく，何かの専門職，学生，芸術家，それが何であっても，彼らが一緒に稽古する他の仲間と一緒に道場を掃除します．（Nakamura, 1992）	*4*
7	コミュニティと個を育む場	**道場は，コミュニティと所属意識を育む場所**です．これが，他の身体トレーニングの場所に浸透している孤立した疎外された雰囲気と武道の違いです．（Nakamura, 1992）	*4*
8	儀礼的に振る舞う場	道場では，いくつかの理由によって，大切な形式的な振る舞い（儀礼的行為）を守り続けています．1.それは私たちの特別な場所である誠道塾の厳粛かつ威厳のある雰囲気の創造と維持に貢献します．2.**それは私たちの行動がより意識的に，繊細に，注意深くなることを促します．3.それらは道場にいる個々の人を他と全く別でユニークな個人として認識し，尊重する方法を私たちに与えます．4.それは，道場にいる間，ユニークな個人として，私たち全員に一つの共通の固定された生き方を与えることによって，私たちを一つにしてくれます 5.それ自体が学習と成長の一部であり，異なる文化と異なる価値観に私たちに教えてくれます**（Nakamura, 1992）	*4*

出典 1 : 人間空手, 2: Hoyu Promenade #15, 3: 誠道塾空手教本, 4: One Day One Lifetime

これらの分析により，中村忠氏は道場の機能として具体的に次の要素を掲げていることが示唆された．

1. 自己研鑽の場 ：道場とはそもそも人間の修養の場であり人を目覚めさせる場である．
2. 安心する場/第二の家：道場は来るとホッとする場である．生徒たちが第二の家のように思う場である．
3. 相互理解の場：相手をよく理解する場である．
4. オープンマインドになれる場：素直な自分に戻り人との絆を感じ，自分を激励する場である．
5. 道場を出たら自分が道場を持っているという意識の醸成：道場で空手を生活の場で使えるように日常が道場であるという認識を持つ
6. 生徒達が共に責任を持つ場 ：修練することを仲間とともに決意し守るべき場
7. コミュニティと個を育む場 ：コミュニティと所属意識を育む場
8. 儀礼的に振る舞う場：行動を繊細にして意識を向け，仲間を尊重し，それぞれの違う価値観を分かち合うために，儀礼である制度に従う場

武道では稽古の仕組みを実践する場として道場という物理的な場がある．しかし誠道塾では，空手の技を習得する稽古の場を超えて「人間の成長機会の場」という象徴的な場として機能させるように指導している．例えば，道場を掃除するとは，自分を磨くことであると指導している．道場を一歩出たら，親，他人，社会に対する感謝を忘れずに，修練によって造った肉体的な強さを超えて，生きるために誠道塾の空手を使うことを指導している．

3.2.3 中村忠氏の信念・価値観

二次資料の調査から，フィロソフィーに則り，修練システムを開発し，それを実践する場としての道場があることが示唆された．これらはいずれも中村忠氏の考えと信念によって作り出されたものである．従って，修練システムや稽古の場がなぜ，そしてどのように機能するのかを知るためには，それを支え，動かし続ける中村忠氏の人格，人間性，信念そのものがいかなるものであるかを，探求する必要がある．それは誠道塾で行われるサービス交換の基盤がいかに構築されたのかを考えるうえで重要である．そこで，中村忠氏にインタビューを行い，情報を収集し，分析をした．発言データの文末の括弧内の日付はインタビュー実施日である．

分析の結果，誠道塾で行われるサービス交換の実践において，前提としてどのような意識や考え方を参加者である生徒たちに伝えているのか，大きく４つのカテゴリーに分けられた．1. 誠道塾のすべての活動のベースである「心」，２．「自分の道を歩む」ための心構え，3. 修練の実践に対して持つべき「自分自身の態度」4. 空手道を学ぶ者として持つべき「他者との関係性を

重んじる」姿勢である．それぞれの意味とファクターについて次に述べる．

中村忠氏へのインタビューは４回に分けて行われた，データの終わりに括弧に入った数字は，インタビューの日付である．（yymmdd：180520,180717,190714,190716）

心

心がすべては，誠道塾のフィロソフィーの底流に流れる考え方で，「心」（表 3-5）を第一に考えるということが，すべての根幹であるということである．中村忠氏にとって誠道塾の精神的な共同創立者と言える次兄で医師の中村脩氏は，医療と空手道は同根であると言い，心がすべてという考えを中村忠氏と共有している．これが，誠道塾を支えている考えであることが抽出された．

表 3-5　心

カテゴリー	意味	Data
心	心がすべて	会長が自分の親，父親だと思ってそれで道場に来る，生徒も入れば・・**やっぱり心がなきゃできない**・・・(190716)
		兄は，すべては心，それがなければ何もならないと言っています．兄貴は恩人．人のために尽くすして，裏切られることもあるのだけど，自分が心を尽くしたのだからいいと言う．医は仁術，お互いに切磋琢磨していこう．極真を離れてこれからいろいろあるだろうけど，自分を信じてやっていけよって励ましてくれました (180520)．
	医療と空手道は同根	「**自分は医療をやっていく．お前は空手道という道を歩む**わけだが，両方に通じることは，人の肉体的な健康と，心，精神的な健康を向上させることなのだから，**職業は違うが，根本的には大事なことは同じなんだ．**だからお互いに頑張ろう．」と励ましてくれた (180520)．

自分の道を歩む

自分自身の「道」を造ることが大切である．それには次の要素が必要だと示唆された．
表 3-6 に示す．

１．信念を持つ：自分が信じる理想の姿を求めて誠心誠意歩むこと．
２．空手道が人生観を育む：空手道が精神的な面を含む道に通じる人生観を育む．
３．過程を重視する：すべては道であるが，初めから道があるのではなく，だんだんと成長していけば良い．

表 3-6　自分の道を歩む

カテゴリー	意味	Data
自分の道を歩む	信念を持つ	自分なりの理念というか自分なりの想いが通じるとうか，**理想の道を歩みたい**っていって(極真会を)離れたわけ(180717).
		人間がいろいろ面で知識を身につけたり，物事を見たりしていく中で，自分の生き方は，人と同じようにする必要はないし，**ほんとに，自分がそうだって思うことを一歩ずつ，ジャンプする必要ないし，少しずつでも，自分の道を築いていくことが己の道**だし，自分の空手だと思う(190716).
		道というのは自分で歩み，時には倒れ，歯がゆい思いしながら，這いつくばりながら，少しでも前進してゆくような，そういう自分なりの道って言うのが出てくる．極真の道とか，大山倍達にずっとついていかなくてはいけないという拘り，観念と違ってくると思った．だから**誠の道は，やはり自分が誠心誠意これだって思うこと忠実に歩むことで，自分の道って言うのが開けてくる**(190716).
	空手道が人生観を育む	沢山の場所が，オポチュニティの場所で教えてるのあるけど，結局，**空手を教えるけど空手道教えてない**わけよ．それの違いなんだよ(190714).
		体力的な，そういう身体的なことじゃなくて，**精神的に心の面も含んだ，そういう空手道というものを教えるところがほんとに少ない**よ．だから，それだけにね，ここを，私自身はなくしたくないわけ(190714) .
	過程を重視する	**最初から道，道，道だけじゃいけないのよ．一つの過程があって，だんだんと自分が成長していけばそれでいいわけ．**最初っからっていうのはない．それなりに体力的にいろんな指導があって，成長していかなければならないわけ．だけど，それだけで体力的に技術的に満足して，おれは凄いんだなんて思ったら，それこそゼロになっちゃう(190714) .
		やっぱり全ては道だなっていうことだね，空手道にしても，その一つの空手を学ぶ中で，その空手を修行する中で，自分の道を，あの，探求しながら，あの練磨しながら行くその道が，自分の空手道という道ができてくる(190716).

自分自身の態度

生徒たち自身がどのような態度で修練をするかは，中村忠氏がこれまでの自身の修練の中で実践してきたことを，指導者として稽古を通して生徒たちに伝授している態度であると考えられる．分析により，次の態度，考え方が抽出された．表 3-7 に示す．

1．探求心： 自分の人生を磨くために探求心がなければならない．
2．勝ち負けの価値観は不要であること ：強ければいいという概念は自分中心になってしまう．
3．謙虚さ，そして節度を持つこと：自分に謙虚に，目に見えないものを信じて，節度を持つこと．
4． 継続は力なりということ：「耕心結実」こつこつと心を耕すこと．
5． 後進へ継承していくこと：感謝の気持ちを持って，恩返しのつもりで後進の指導に当たること．
6． ポジティブ思考/チャレンジ精神：ポジティブに考えチャレンジすることが大事ということ．
7． オープンマインド：素直になって，オープンマインドになることが大事ということ．
である．

表 3-7　自分自身の態度

カテゴリー	意味	Data
自分自身の態度	探求心	勝ったとか負けたとか，そういう経験は，それはそれでいいんだけど，それに留まるっていうことじゃなくて，自分のその人生の歩みの中で，何が自分の，**自分を磨くために，大事なものかっていうことをやっぱり探求心っていうのが大事**なんだよ(190714).
		ほんとに大事なものは必ずある，**探求心があるかないかで変わってくる**と思うのね(190714).
		自分，己の道というものを追求するわけだ．人生というのはね，だからその中で，自分の今いる場所からどういうふうに自分をステップ，歩んでいくかって，**探求して，努力して，精進していく中で，自分の人生っていうのはぐーっと，道は出てくる，**道が出来てきてるわけだから(190716).

勝ち負けの価値観は不要	**スポーツを中心にものを考えると，結局自分が中心になっちゃう**から，人のことはまず眼中になくなってくるんだよね(190714).
	勝敗，勝敗，それで強ければいいっていうその観念というかそういう感覚，非常に人間が狭いし，何ていうんだろう，**寂しい**しね(190714).
謙虚さ/節度	誠道塾の空手に出会えた中で，**どういう自分を，自分なりに磨いていくかということを人として，人間として大事なことか**ということがわかればいい(180520).
	目に見えない無形，だからその無形のものに対する，その，何て言うの，**真剣に受け取る**，そういう心構えというか心を持つかっていうことでやっぱり，その人の生き方が変わってくると思うね(190714).
	ここは堅苦しいかわからないけど，もうトラディショナル空手として，全ていろんな伝統に対しても，厳しくするし，それで時たま息苦しこともあるけど，それはそれぞれの**自身の人生の中でやっぱり自分である面では，ピシッと節度を以て厳しくして行かなくてはという，一つの，チャンスというかオポチュニティ**なんだけど，それを受け入るくらいの姿勢でないと成長しない（190714).
継続は力なり	「耕心結実」は，脩先生が私に声を掛けてくれた言葉なのです．こ**つこつ自分の心を耕すという姿勢が，そういう風に続けることが何かの形が出てくる**わけだから，大事な言葉だと思っています．それに沿うようにしっかり努力しようと思っています（180520).
	今ポスターのデザインとして「継続」っていう，ポスターを今作ろうとしているわけよ．**凄い継続は力なり**って言ってやった（190714).
後進への継承	自分が何かこういう**場でしてもらえた恩返しというか，自分の持っている経験を伝えたい**（190714).
	自分は黒帯になって満足ですというんではな

		くて，こうやって**自分がお世話になれたというのも，感謝の気持ちで，少しでも後輩たちを励ますような**ね，そうやっていきたいという，そういう気持ちがね，私もやってててよかったなと思うわけ（190714）.
	チャレンジ精神/ポジティブ思考	**ポジティブに考えていく，それがあったから今がある**んだなって，つくづく思うよ（180717）.
		私の人生の中でそういう出来事（銃撃）があって，それで，それを**逆にばねにして，冗談じゃないよって，**みんなもそれで協力して頑張ってくれた（180717）.
		自分の期待してたのが**期待外れ**になったり，それが一つの**チャレンジというか，修行になるんだ**よね（180717）.
		これから誠道どうなるかわかんないけど，だからそれも一つの試練でね，どうなるかわかんないけど，**自分ができることをやっぱり，こなしていかないと**（180717）.
		体験，自分の身体で，自分の時間を費やして，それでいろいろ経験を積むっていうことと さ，その E-mail だのコンピュータ使って情報あれして，ああ，そうなの・・って言うのとね，まるっきり違うからね（190716）.
	オープンマインド	**一番大事なことは，自分はもうわかっているという自我を捨てて，自分はいつでもオープンで，オープンマインドで，オープンアイズで，モノを素直に吸収できるという心**をね，備えているように自分にリマインドしながら，やっていかなかったら成長できない（190714）.

他者との関係性を重んじる

自分自身に対する意識を確認することは大事であるとする一方で，他者との関係性も重視していることが示唆されている．分析により，抽出された要素は次のとおりである．表 3-8 に示す．

1. 利他心 ：他人の気持ちに応えるように行動すること．
2. 人との出会いに感謝する：他人のお陰で自分があるということを自覚すること．
3. 絆/相互信頼：絆の深さを感じ，お互いの心の通いがあるっていうことに感謝すること．
4. インクルーシブ：ハンディキャップがある人と協調すること．誠道が唯一の道ではないこと．

表 3-8　他者との関係性を重んじる

カテゴリー	意味	Data
他者との関係性を重んじる	利他心	理解して，将来のこと考えて，今，ずっと何十年も続いている**生徒たち，そういう気持ちを踏みにじらないように新しい誠道をつくる**（190714）.
	人との出会いに感謝する	**出会いっていうか，お互い大事にし合おうっていう**・・中略・・大事にするっていう気持ちがね，ずーっと継続だよ，それこそね・・中略・・**運命だっていう気持ちで大事にしなきゃ**いけない（190716）.
		その出会いから，ブラックベルトに喜びを感じながら，時の流れの中で育んでいくっていう，お互いそう思ってくれている，俺も思っている，それがね，感じることでさ・・・だから**自分が今あるのは，いろんなあのお陰だっていう気持ちが，常にないと，やっぱり，幸せになれないね．**はっきり言って（190716）.
		ご縁は大事だし，それをどう受け止めるかも大事です（180520）.
		自分が期待した以上に**幸せな気持ちでいられるということに感謝**しなければならない（180520）.
	絆/相互信頼	**絆の深さ**っていうか・・**お互いに愛し合ってる**っていうか，**信頼し合っている**っていうか・・(190716).
		全て絆だよ．それが大事かっていうものをいつも実感していなくてはダメなんだよ（190714）.
		一瞬一瞬，モーメントモーメント，一日一生，長生きしようと思っていてもぽっくり行くときもあるし，どこでどういう事故に遭うかもわからないし，災難はどこにあるかわからな

	いわけだから，**こういうインタビューができること自体も感謝している．信頼できる人に伝えることができることに感謝している．電話で話すことができることに幸せを感じている**（180520）．
	こういう目に見えない絆の尊さっていうものをやっぱりね，痛感する．だから，そういうこと感じられない人は不幸だよ．幸せじゃないっていうのはそういうこと感じれないっていうこと，だからこそ不幸な感じのあれになるわけで，やっぱりね，毎日の誰かとの出会い，誰かとのその**お互いの心の通いがあるっていうことに感謝する**，そういう気持ちがないとね，結局一日が無駄に終わっちゃう（190716）．
インクルーシブ	ほんとに私，心から思ってるけど，**ハンディキャップを持っている人**の，そういう，姿勢を見た時にね，自分が反省しなきゃならなかったり，学ばなきゃならないってことがたくさんあるって気づかなきゃならないし，**少しでもお手伝いしたいっていう気持ちに乗っていかなかったらね，そりゃ人間じゃない**と思う．うん．やっぱり，**お互いがうまく協和すること**だね（190716）．
	全ての人がその平等に，己の空手道というものを己の人生の道を築くための一つの手懸りになってくれればいいわけで，**誠道空手があったからっていって誠道が全てではない**し，誠道の中でまた別なこの歩みがあっていいわけ（190716）．
	弱者って言う言葉自体もよくないからね（190716）．

外部からの評価

ここで，外部から見た誠道塾に対する評価について付記しておく．組織や個人の評価は所属する業界の内外において賛否があるのが自然である．しかし，昨今，情報が溢れるネットワーク上に誠道塾あるいは中村忠氏へのネガティブな評価は発見できなかった．それが誠道塾の特徴のひとつであると考えられる．競技重視，あるいは至上主義のフルコンタクト系（直接相手の体に打撃を与えて勝敗を競う方式）から分かれて創設された誠道塾は，同業界の一端にはいないということで，そこからの比較，評価はないとも考えられるが，ネット上の調査でひとつ見つかった他流派の人からのポジティブな誠道塾の評価の記載例を引用する．

> *真面目で温厚で，さらに芯の強い人間性から，先輩・後輩を問わず人望と信頼を集めていました．その後スターになった極真空手の後輩たちの本でも，中村会長を悪く書いてある本はありません．空手の実力も然る事ながら，道場経営者としても成功しています．あくまで空手道を教えているた*

めに，稽古内容は非常にクラシカルです．よって，「競技として進化していくに伴い，技術体系も変化していく」ということは，あまりありません．ここには年をとってもできる，空手らしい空手が残っています．

https://sabaki.club/845.html　（2023 年 2 月 5 日閲覧）

また，もうひとつポジティブな評価の例として，在ニューヨーク日本国総領事館からの在外公館長表彰発表の記事を引用する．

2016 年 在外公館長表彰
中村 忠
世界誠道空手道連盟会長

在ニューヨーク日本国総領事館は，中村　忠 世界誠道空手道連盟会長に対し，長年にわたり数多くの米国人に日本の伝統的武道である空手を教えるとともに，米国社会に対する慈善活動に積極的に従事されていることに敬意を表し在外公館長表彰を行うことといたしました．

経歴：

故大山倍達氏の元に 1953 年に空手を始め，極真会にて最年少の黒帯に輝く．1961 年には 19 歳で全日本学生空手選手権デビューし勝利．その後極真会本部の正師範代を務めた後，空手の精神を伝承する人物としてニューヨークに派遣され，1976 年に世界誠道空手道連盟誠道塾を創設．以後，40 年にわたり独自のカリキュラムに則って，性別や年齢を問わず世界中の多くの人々に誠道塾空手を教えている．

功績概要：

１． 米国において，今日ほど日本文化が浸透する以前の 1960 年代より活動を開始．1976 年ニューヨークに自ら世界誠道空手道連盟誠道塾を創設し，現在まで 40 年の長きにわたり日本の伝統的武道である空手の普及に努めている．

２． 単に技の強さだけを求めるのではなく，人々の生活に入り込み，年齢，性別，人種，ハンディキャップを越えて，人生を意義深くするために学び，心・技・体ともにバランス良く高めていく『人間空手』を標榜し，日本文化の要諦である『礼節』，『思いやり』の精神を体現して日本のイメージアップに寄与した．

３． 毎年開催されるベネフィット・トーナメントで得られる収益金を，米国赤十字，NYPD，FDNY，9.11 被害者基金等に献金するなど，米国社会に対する慈善活動に積極的に従事し，日米間の友好親善促進に貢献している．

在ニューヨーク日本国総領事館
https://www.ny.us.emb-japan.go.jp/jp/h/consulgeneralscommendation/2016/1/Mr-Tadashi-Nakamura-jp.html（2023 年 2 月 5 日閲覧）

3.2.4 フロネシス/中庸

誠道塾は人間形成を目的としていることが示唆されているが，創始者のフィロソフィーの評価として，文献レヴューで見たフロネシスのファクターに当たる要素も抽出されている． 近年では，ヘドニックとエウダイモニックの両系統の研究で，経済状態，すなわちお金が幸福につながる確実な道筋ではなく，貧困には多くのリスクがあるが，豊かさにはほとんどメリットがないという研究が示されている(Ryan & Deci, 2001)こともあり，金銭授受の項目には言及しない．フロネシスは人間の最高善を体現する人間性のファクターであり，中国の『中庸』の根本精神と同じく，過剰にも不足にもならない中庸の態度がベストであるという考えを基に，場面によって持つべき意識，取るべき態度を示している．それらに対して，中村忠氏の発言を分析した結果，フロネシスに対して中村忠氏の人間性が重なっている部分があることが次のように示唆された．表 3-9 に示す．

表 3-9　フロネシス/中庸

フロネシスの軸	中庸	Data
勇敢	恐怖と自信に関する中庸 （両極：向こう見ず，臆病）	**ガーンって落とされて，それから這い上がっていかなきゃいけない時の，その自分なりにジレンマとか，焦りとか，いろんなあるけども，それは一つの人間の生きる中での修行なんだ**よね，うん，それは学ぶ一つの材料を提供してもらっていると思わなきゃ，ほんといけないと思う（180717）．
		それも一つの試練で，私にとっては．その試練が，一つの何て言うの，自分をもっと生かせる，成長してもらえる．そういうもとに，それこそ変な言い方かもしれないけど，貴重な体験だったんだね．そのお陰があ

		ってこそ，冗談じゃない，日本ともう絶縁だって，俺は一匹狼でとにかくやっていくんだって，そういう気持ちが，がーって出たから・・中略・・俺が撃たれてどうのこうのってこと一切口にするなって・・中略・・俺はちゃんと出て指導もするし，まあ，しばらく松葉杖つきながら，やってたけどさ（180717）.
節制	快楽と苦痛に関する中庸 （両極：放埒，無感覚）	どんな分野のどんな偉人も，今私が思うのは，やっぱり尊敬できる人はそれだけ，超越して，努力して，いろんなことをどうのこうのあるけど，一番大事なのは自分の私生活をピュアなもので何年も努力してきたということだと思います．人に見えない私生活が神に恥じることなく，きちっと貫いていけることができる人は心から尊敬できます．（180520）
高邁	名誉に関する中庸 （両極：虚栄，卑下）	空手を稽古することによって，自我を殺し，視野を広げ，どんなに恵まれない環境にいても自分を卑下することも悲観することもなく，逆に，どんなに恵まれた環境にいても傲慢になることなく，自分を育ててくれた人々や社会に感謝し，豊かに人生を送れる．空手とは，まさに人生の肥やしである(中村, 2000)（誠道塾空手教本）.
		ここまできたのおめでとうっていう気持ちと，ただ，それを喜びのっていうか増長するんじゃなくて，もっと謙虚な気持ちで，また初心に戻って，おまえたち黒帯になった，それはおめでとう，しかしだな，というところ（180717）
		体力的に技術的に満足して，自分は凄いんだと思ったら，それこそゼロになってしまう（190714）.
温厚	怒りに関する中庸 （両極：怒りっぽさ，怒りの欠如）	人間の人生にとって意味のある空手，追い求めなければならないのはそれである．それを学んだせいで精神的な自信が生まれるような，仕事の面でもプラスになり，家庭，夫婦間も円満になるとか，人に対する接し方，感じ方にも余裕が出て，いままですぐカッカして喧嘩ばかりしていたのが，いったんことあっても冷静でいられるようになるといった，そんな有意義な空手の道を築くことができれば，きっと誰でもが「こんな空手ならば，一生続けていきたい」と考えるようになるだろう(中村, 1988)（人間空手）.
		大山館長が亡くなられた時に，薄井支部長と葬儀に行って，私は破門された人間だから，極真の関係者は変

		な雰囲気になったけど，その中で古い大山道場時代に韓国のブローカーみたいな年配の人が出入りしていた人がいて，顔は覚えているのだけど名前はすっかり忘れてしまいましたが，控室でその人が，「中村師範，久しぶりです．大山館長があなたに会ったら一言伝えてくれと・・・くれぐれもよろしく．申し訳なかったと・・・」それで，結構長く，祭壇の前で気持ちがぐーときてしばらくお祈りして．**それがあって大山館長に対して，これで，これでよしと，事実は一生変わらないけど，個人としてのことはこれでよしと決めたのです**(180520).
友愛,誠意,機知	人と人との関係における中庸 （両極：愛想，意地の悪さ）	本当に社会に求められる空手とは，体力がなくとも，いや，身体が不自由であろうとも，平等に強さを求めていくことができる空手でしょう．人と強さを争う空手ではなく，各自がきのうの自分より，きょう，ほんの少しでも強くなるように努力する．そして**仲間は仲間が強くなるための手助けをする．そんな個人と仲間たちが，己と互いをみがきあうことのできる空手，それが誠道塾の目ざす空手です**(中村, 2000)（誠道塾空手教本).
		もう俺の一生は大山館長との出会いに感謝をしていきつつ，自分の中村忠の道を，誠心誠意以て歩んでいこう，そういう気持ちがが一っと深まったこと（190716).

一番目は，勇敢についてである．いい結果を獲得できても，突き落とされるような経験をしても，さらに次に向かってチャレンジをしてゆくことが大事であるという発言が当てはまる．二番目は，節制についてである．トラディシナルな空手道として道場では敬虔な姿勢を持ち，私生活でも純粋な心持ちで過ごすことの必要性を説明していることが合致する．三番目は高邁である．身体的な強さを求めてそれ誇示するのではなく，精神的な面も含めて自分を過小評価も過大評価もせずに，自分を育ててくれた社会に感謝する態度が重要であると説明している．四番目は温厚である．人に対する接し方に余裕を持ち，人を恨むことなく，何か事があっても冷静でいられる心が大事だと話している．五番目は友愛，誠実，機知である．人と人との関係性においては，仲間同士が助け合っていく絆が重要であると話している．これらのことから，中村忠氏はフロネシスを内面に持つフロニモスであり，同氏によって創設された誠道塾はフロネシスのファクターをエンベディッドしていることが示唆された．

3.3 発見事項

誠道塾の組織を成り立たせるフィロソフィーの内容が確認できた．第一は組織理念として，修練によって誠という最高善を獲得するという意味で，組織のネーミングにも用いられた，「誠は天の道なり，それを誠にするは人の道なり」である．第二は修練の価値基準となる考え方として「力より技，技より心」を掲げ，腕力ではなく，人生を豊かにする心を持つことの必要性を説いた．そして第三は行動指針の基礎として「尊敬，愛，従順」を挙げている．これにより「相手に対して尊敬の念を持つことで愛が生まれ，それは謙虚さとなって人間関係が豊かになる」というインタラクションが起こることが示唆されて，それがすなわち修練の実践というサービス交換における基本的な心の内面の動きである可能性として考えられる．中村忠氏はこれらのフィロソフィーに則り，ベルトシステム，昇段審査，道場を意識させる指導という要素を盛り込んだ修練システムを構築した．フィロソフィーが道場という修練の場で参加者による相互作用によって実際に生かされていくことが，サービス交換であるが，それを促進し持続させるために参加者である生徒たちにとって必要な心持とはどのようなものなのかを抽出した．これらは，中村忠氏自身の経験から生成された信念，価値観であり，心を持って，心の在り方を常に吟味しながら生きることを最重要な姿勢として念頭に置き，次に自分の道を切り開いて歩んでいくということを目標にして，フロネシスを始めとした実践に対する心持を確認しながら修練を行う．フィロソフィーと修練システムに即して行われる修練の実践が，フィロソフィーそのもの（図 3-1）を起動させて，修練者である生徒に伝わっていく．

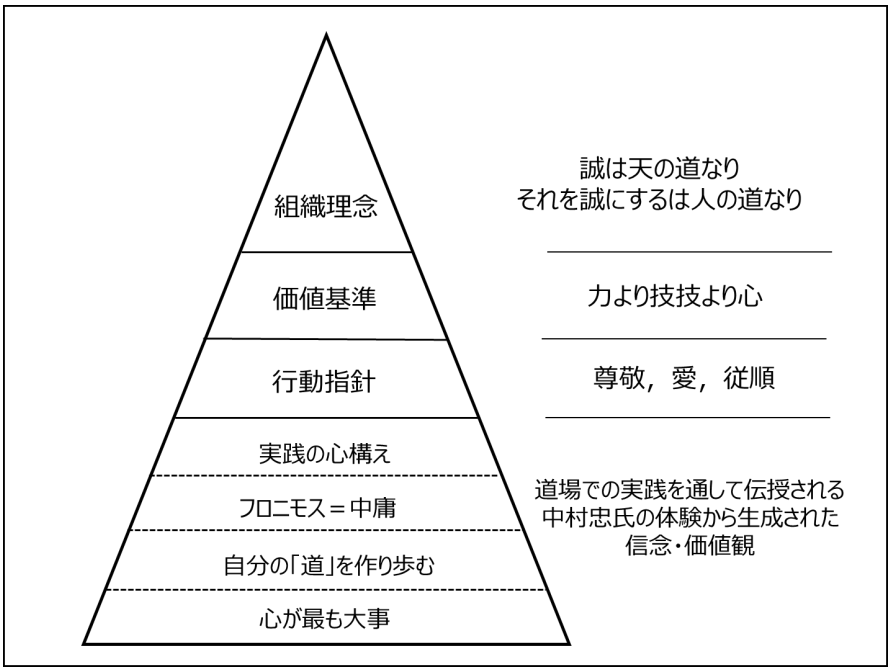

図 3-1　誠道塾のフィロソフィー

3.4 小括

中村忠氏は誠道塾の創設に当たって,「誠は天の道なり，それを誠にするは人の道なり」,「力より技，技より心」,「尊敬，愛，従順」のフィロソフィーを掲げ，それに則って修練システムを考案した．修練というサービス交換の実践のために必要な心持ちによって，フィロソフィーそのものが起動して修練者に伝わっていくことがわかった．すなわち，修練の実践というサービス交換を行う基盤になるものは，その実践のために用意された，フィロソフィー，修練システム，心持の教えの全てが織りなすダイナミクスであると考えられる．

第四章　研究 2　道場でのサービス交換の分析

4.1 方法

4.1.1 背景

武道修練は道場という場で行われる．先行研究レヴューを通じて，サービススケープ概念が，サービスが行われる物理的な場所としての意味を超えて，サービス参加者の価値共創プロセスに様々に影響を与える空間として機能していることを整理した．そして価値共創を通じてサービスの参加者は自らのニーズを満たすだけでなく，サービススケープでの共創経験や参加者同士の関係性構築経験をもとにウェルビーイング形成を可能にしていることを示した．

この一方で，サービススケープとウェルビーイング形成の関係については未だ十分に研究が蓄積されていないことを指摘した．とりわけ，本研究がテーマとする武道は身体活動を伴うスポーツであると同時に，人格形成を重要目的にしている．これは痛みや挫折経験を伴いながらも，持続的に修練を行うことで自己を鍛錬し，人間として成長していくプロセスである．このような活動に参加する参加者がどのようにしてウェルビーイングを形成しているのか，十分に研究がなされていない．

4.1.2 研究デザイン

武道を対象にしたサービス関連の研究は少なく，中心概念に対する理解が限られているこ

とから，探索的な研究デザインの採用が不可欠であると考えた．本研究では，空手の修練者に対するインタビュー及び質問紙に対する回答から収集した定性的データを用いる．

誠道塾は参加者それぞれが修練の場として集う道場を中心とした運営を続けている．そのため，道場はウェルビーイングが形成されるサービススケープであると考えた．サービススケープで起こる複数の参加者同士や指導者との間の相互作用を，サービススケープの段階的知覚理論(Rosenbaum, 2006)と参加者同士の自己認識形成(Cuba & Hummon, 1993; Ekinci et al., 2013; Rosenbaum & Massiah, 2011; Wattanasuwan, 2005)，そしてサービススケープに形成される制度(Akaka & Vargo, 2015; Baron et al., 2018; Vargo & Lusch, 2016; Vink et al., 2021)の観点で調査，分析する．これにより，道場においてどのようなサービス交換が行われているかを探求する．

4.1.3 対象と調査内容

長年稽古を続け，指導者クラス以上にまで昇格したメンバーは誠道塾のフィロソフィーを受け継ぎ，それにより自分の人生を開花させた者であるとし，彼らを調査対象にする．彼らを中心に調査を進めることで，統合された複数のリソースと価値の次元をより深く考察，説明できると考え，誠道塾の姿を浮き彫りにすることができると判断した．

具体的には， SRQ2「道場では参加者は相互作用からどのようなアウトカムを得ているか？」に対する回答と SRQ3「道場という場では，どのようなサービス交換が行われているのか？」の回答につなげる．このために，まず日本在住の指導者レベル，中級者，初級者という異なるレベルの修練者から一人ずつ選び，この 3 人のメンバーに対して，表 4-1 のような質問を用意して半構造化インタビューを行った．

表 4-1　修練者に対する質問及び質問紙の項目

1	入門のきっかけは何であったか
2	空手の教程，稽古システムの感想
3	空手道場の空間で行われている生徒間の切磋琢磨への印象
4	空手が自分の人生にもたらした影響
5	道場主宰者の印象に残る出来事

指導者レベルにある修練者にはさらに後輩への指導の際に意識していることについて尋ねた．インタビューは半構造化されているため，質問の表現はインタビュー対象者によって異なり，また，回答をより深く掘り下げるためにプロービング・クエスチョンを用い，会話の流れに沿って出てきた自由回答形式の質問によって，より深い考察を促し，データを

収集した．インタビューは 2019 年 11 月 2 日および 11 月 29 日に，公共性のあるカフェ内で行われ，平均して 1 時間程度で終了した．

次にインタビューと同様に，SRQ2「道場では参加者は相互作用からどのようなアウトカムを得ているか？」に対する回答と SRQ3「道場という場ではどのようなサービス交換が行われているのか？」の回答につなげることを目的に，日本在住の 5 人のメンバーと，誠道塾が国際的に展開している組織であることを鑑み，海外に在住する 11 人のメンバーに対して，表 4-1 に基づくインタビューと同じ項目を記した質問紙による調査を行った．なお，対象者の人選に当たっては，主宰者の中村忠氏に依頼し，同氏が，誠道塾で長年修練をしている人を対象に，地域（国）が偏らないようにしたうえで質問紙を送付した．

これにより，各回答者に該当する新しい情報を柔軟に発見することができた．回答傾向から，データ収集はこの段階でデータ飽和のポイントに達していると判断した．つまり，インタビューと質問紙で収集したデータから新しいテーマが生じなかった．

インタビューおよび質問紙による回答者は表 4-2 の通りである．

表 4-2　インタビュー対象者及び質問紙回答者

#	＊	名前	タイトル	地域
1	I	A	生徒	日本国内
2	I	B	インストラクター	日本国内
3	I	C	インストラクター	日本国内
4	Q	D	マスター	海外
5	Q	E	マスター	海外
6	Q	F	マスター	海外
7	Q	G	マスター	海外
8	Q	H	マスター	海外
9	Q	J	マスター	海外
10	Q	K	マスター	海外
11	Q	L	マスター	日本国内
12	Q	M	マスター	日本国内
13	Q	N	マスター	日本国内
14	Q	O	マスター	海外
15	Q	P	インストラクター	日本国内
16	Q	Q	インストラクター	日本国内
17	Q	R	インストラクター	海外
18	Q	S	マスター	海外
19	Q	T	マスター	海外

＊I：インタビュー　Q：質問紙

4.1.4 分析方法

本研究では定性データの分析のために，Grounded Theory を導き出す手法のひとつである Gioia Method を使う．研究対象の社会現象の理論的概念を開発する Grounded Theory(Corbin & Strauss, 1990)のオプションである Gioia 方式は，頑健性を持つ質的帰納的研究法である(Gehman et al., 2018; Gioia et al., 2013; J. Pandey et al., 2022)．Gioia 方式の利点は，社会的に構成されている世界において，情報提供者と研究者の双方を「知識ある主体」とし，情報提供者が自分の行為の意図，思考，感情が何であるかを知識的に説明できることを前提にして(Gehman et al., 2018)，双方の知識が資源統合され理論の共創が起こることである(Gioia et al., 2013; J. Pandey et al., 2022)．研究者は最初に情報提供者の発言をできるだけそのまま使ってデータを分類し，文脈の中で解釈，構造化し，理論的な用語に置き換えて，創発的，機能的なモデルに置き換えていくプロセスをたどる(Gioia et al., 2013; Nag & Gioia, 2012)．

この方法論は，ある現象の発生から内包される相互関係を見出すことが可能で，導き出されたデータ構造に至るメカニズムの考察が重要視されている(Corley & Gioiia, 2011; Gehman et al., 2018). このような特徴から，Gioia 方式は，ほぼ手のついていない武道の道場での価値共創の可能性探求に適すると考えた．

Gioia 方式の分析プロセスは，まず一次分析として，情報提供者が発した用語を，類似点と相違点を比較，強調することで分類し一次コードのカテゴリーを決める(Corbin & Strauss, 1990; Gehman et al., 2018)．二次分析では研究者中心の概念，テーマ，次元を設定する．一次コード，二次テーマ，次元へ移行していくことで，質的研究の厳密性が保たれ，データ構造構築の基礎ができる(Gehman et al., 2018)． ここで出現した静的な概念間の動的なつながりを，解釈的なアプローチで，その関係を示すことで，生き生きとした帰納的モデルが構築され，データに根ざした創発的なグラウンデッド・セオリーが成立する(Gehman et al., 2018; Gioia et al., 2013; Gioia & Chittipeddi, 1991)．そして，二次分析で生成したテーマと三次分析のディメンションを用いて，解釈的な方法で概念間のつながりを考慮しながら，データをモデル化する． なお，本研究では，特にデータ構造の検討作業において，インタビューにも質問紙にも同じ質問を用いて情報を収集したが，インタビューではより深い回答が得られていると考え，インタビューデータを中心据えて分析し，質問紙からの回答を補足として加えた．インタビュー回答者はデータ末尾に(A),(B),(C)とある３名であり，データは太字で表記した．

4.2 結果

分析の結果，誠道塾において，参加者が道場での相互活動の継続によって得られたアウトカムは，５つの異なる結果にカテゴライズされると考えられる．検討段階ではランダムにカテゴライズしていったが，時間の経過あるいは時間的なサイクルによって参加者がどのような変化をしたのかを述べる元データとするために，図4-1として，上から時系列にカテゴリーを並べて掲載した．当該図の次元の集約には次の５つのカテゴリーが充てられると示唆された．すなわち，１．なぜこの道場に入門したのかというモチベーションの種類　２．入門してみて感じた道場への認識はどのようなものであったか　３．道場で他の参加者と一緒に修練をすることによってどのような相互作用があったか　４．道場に通うことで得られた価値はどのようなアウトカムによって示されたか　５．道場で空手を修練することによって日常生活での行動にどのような変化があったか，である．

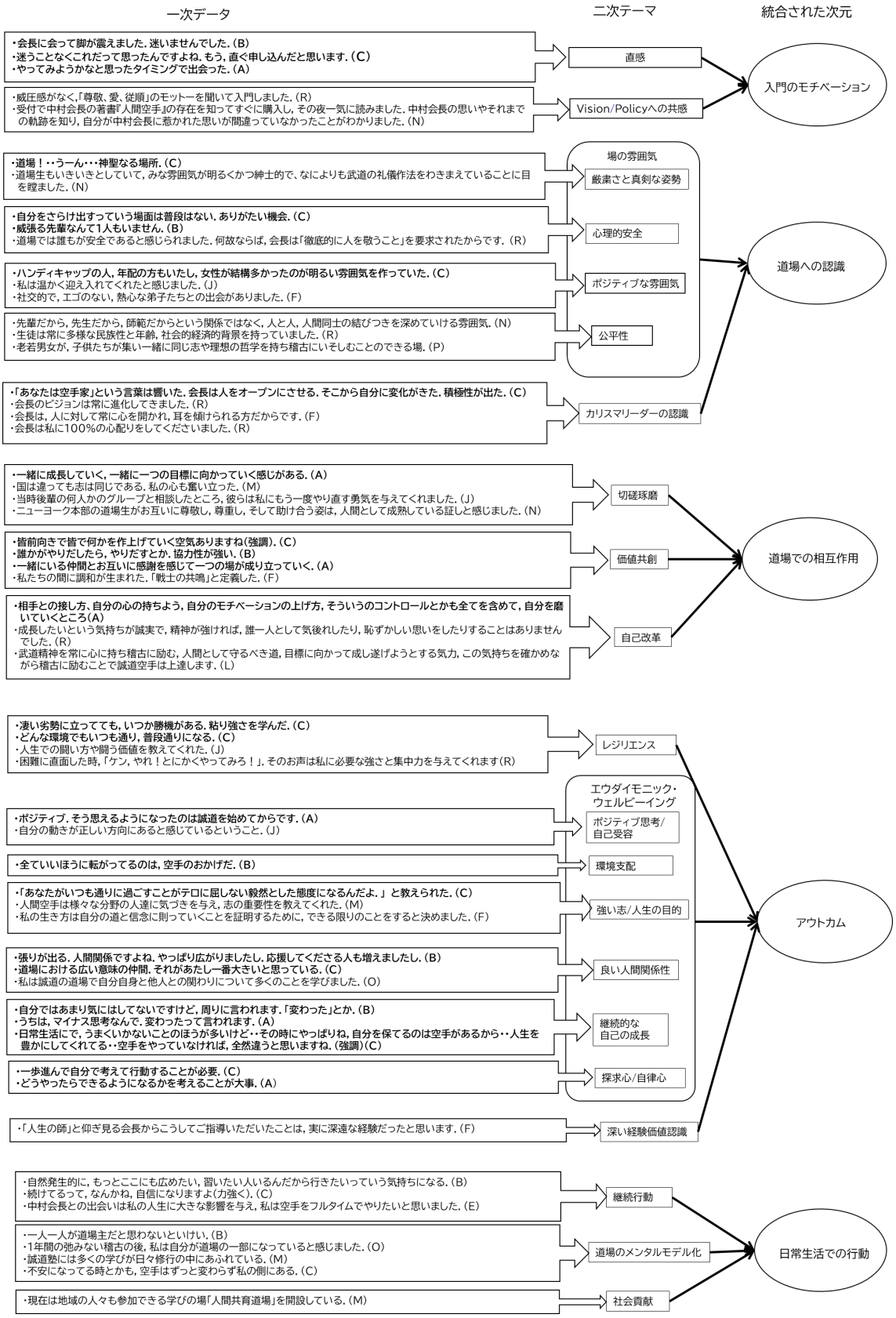
一次データ
二次テーマ
統合された次元
・会長に会って脚が震えました. 迷いませんでした. (B)
・迷うことなくこれだって思ったんですよね. もう, 直ぐ申し込んだと思います. (C)
・やってみようかなと思ったタイミングで出会った. (A)
直感
・威圧感がなく,「尊敬、愛、従順」のモットーを聞いて入門しました. (R)
・受付で中村会長の著書『人間空手』の存在を知ってすぐに購入し, その夜一気に読みました. 中村会長の思いやそれまでの軌跡を知り, 自分が中村会長に惹かれた思いが間違っていなかったことがわかりました. (N)
Vision/Policyへの共感
入門のモチベーション
・道場！・・うーん・・・神聖なる場所. (C)
・道場生もいきいきとしていて, みな雰囲気が明るくかつ紳士的で、なによりも武道の礼儀作法をわきまえていることに目を瞠ました. (N)
場の雰囲気
厳粛さと真剣な姿勢
・自分をさらけ出すっていう場面は普段はない. ありがたい機会. (C)
・威張る先輩なんて1人もいません. (B)
・道場では誰もが安全であると感じられました. 何故ならば, 会長は「徹底的に人を敬うこと」を要求されたからです. (R)
心理的安全
・ハンディキャップの人, 年配の方もいたし, 女性が結構多かったのが明るい雰囲気を作っていた. (C)
・私は温かく迎え入れてくれたと感じました. (J)
・社交的で, エゴのない, 熱心な弟子たちとの出会がありました. (F)
ポジティブな雰囲気
・先輩だから, 先生だから, 師範だからという関係ではなく, 人と人, 人間同士の結びつきを深めていける雰囲気. (N)
・生徒は常に多様な民族性と年齢, 社会的経済的背景を持っていました. (R)
・老若男女が, 子供たちが集い一緒に同じ志や理想の哲学を持ち稽古にいそしむことのできる場. (P)
公平性
道場への認識
・「あなたは空手家」という言葉は響いた. 会長は人をオープンにさせる. そこから自分に変化がきた. 積極性が出た. (C)
・会長のビジョンは常に進化してきました. (R)
・会長は, 人に対して常に心を開かれ, 耳を傾けられる方だからです. (F)
・会長は私に100%の心配りをしてくださいました. (R)
カリスマリーダーの認識
・一緒に成長していく, 一緒に一つの目標に向かっていく感じがある. (A)
・国は違っても志は同じである. 私の心も奮い立った. (M)
・当時後輩の何人かのグループと相談したところ, 彼らは私にもう一度やり直す勇気を与えてくれました. (J)
・ニューヨーク本部の道場生がお互いに尊敬し, 尊重し, そして助け合う姿は, 人間として成熟している証しと感じました. (N)
切磋琢磨
・皆前向きで皆で何かを作上げていく空気ありますね(強調). (C)
・誰かがやりだしたら, やりだすとか. 協力性が強い. (B)
・一緒にいる仲間とお互いに感謝を感じて一つの場が成り立っていく. (A)
・私たちの間に調和が生まれた. 「戦士の共鳴」と定義した. (F)
価値共創
道場での相互作用
・相手との接し方、自分の心の持ちよう, 自分のモチベーションの上げ方, そういうのコントロールとかも全てを含めて, 自分を磨いていくところ(A)
・成長したいという気持ちが誠実で, 精神が強ければ, 誰一人として気後れしたり, 恥ずかしい思いをしたりすることはありませんでした. (R)
・武道精神を常に心に持ち稽古に励む, 人間として守るべき道, 目標に向かって成し遂げようとする気力, この気持ちを確かめながら稽古に励むことで誠道空手は上達します. (L)
自己改革
・凄い劣勢に立ってても, いつか勝機がある. 粘り強さを学んだ. (C)
・どんな環境でもいつも通り, 普段通りになる. (C)
・人生での闘い方や闘う価値を教えてくれた. (J)
・困難に直面した時,「ケン, やれ！とにかくやってみろ！」. そのお声は私に必要な強さと集中力を与えてくれます(R)
レジリエンス
エウダイモニック・ウェルビーイング
・ポジティブ. そう思えるようになったのは誠道を始めてからです. (A)
・自分の動きが正しい方向にあると感じているということ. (J)
ポジティブ思考/自己受容
・全ていいほうに転がってるのは, 空手のおかげだ. (B)
環境支配
・「あなたがいつも通りに過ごすことがテロに屈しない毅然とした態度になるんだよ. 」と教えられた. (C)
・人間空手は様々な分野の人達に気づきを与え, 志の重要性を教えてくれた. (M)
・私の生き方は自分の道と信念に則っていくことを証明するために, できる限りのことをすると決めました. (F)
強い志/人生の目的
アウトカム
・張りが出る. 人間関係ですよね. やっぱり広がりましたし. 応援してくださる人も増えましたし. (B)
・道場における広い意味の仲間. それがあたし一番大きいと思っている. (C)
・私は誠道の道場で自分自身と他人との関わりについて多くのことを学びました. (O)
良い人間関係性
・自分ではあまり気にはしてないですけど, 周りに言われます.「変わった」とか. (B)
・うちは, マイナス思考なんで. 変わったって言われます. (A)
・日常生活にで, うまくいかないことのほうが多いけど・・その時にやっぱりね, 自分を保てるのは空手があるから・・人生を豊かにしてくれてる・・空手をやっていなければ, 全然違うと思いますね. (強調)(C)
継続的な自己の成長
・一歩進んで自分で考えて行動することが必要. (C)
・どうやったらできるようになるかを考えることが大事. (A)
探求心/自律心
・「人生の師」と仰ぎ見る会長からこうしてご指導いただいたことは, 実に深遠な経験だったと思います. (F)
深い経験価値認識
・自然発生的に, もっとここにも広めたい, 習いたい人いるんだから行きたいっていう気持ちになる. (B)
・続けてるって, なんかね, 自信になりますよ(力強く). (C)
・中村会長との出会いは私の人生に大きな影響を与え, 私は空手をフルタイムでやりたいと思いました. (E)
継続行動
・一人一人が道場主だと思わないといけい. (B)
・1年間の弛みない稽古の後, 私は自分が道場の一部になっていると感じました. (O)
・誠道塾には多くの学びが日々修行の中にあふれている. (M)
・不安になってる時とかも, 空手はずっと変わらず私の側にある. (C)
道場のメンタルモデル化
日常生活での行動
・現在は地域の人々も参加できる学びの場「人間共育道場」を開設している. (M)
社会貢献

図 4-1 データの構造

4.2.1 入門のモチベーション

入門のモチベーションとして，「直観」と「Vision/Policy への共感」の 2 つのテーマを抽出した．ここで分かったことは，この道場の参加者の入門動機が多様性に富んでいて，入門の理由が何であれ，誠道塾での修練を継続していくことが可能であることが示唆されている．入門時，修練をスタートするに当たり，道場は参加者にとって自らのニーズを満たす空間であったと考えられる．

直感

回答者は，特にきっかけもなく偶然に，或いは空手の体験クラスに参加する友人に付き添って行った際に，空手と出会っている．合理性よりも参加者の道場での稽古を観察することによって生じた直感に頼って道場に入門していることが示唆される．

> *ニューヨークに留学してたので，あたしが自発的に探したのではなくて，で，A さんていう人がいて，彼女がなんかやりたかったみたいで・・何軒か見て，やっぱ，ビビッときたらしいんですね．ここはなんか正しいみたいな感じ・・彼女と同じ語学学校に行ってたので，なんか，行かない？って，その時に体験会に行きました．(C)*

> *仕事の同僚からマンハッタンで空手のクラスを受けてみたいので，一緒に行ってくれないかなと頼まれて，文字通り付き添いで行ったに過ぎませんでした．結局，友人は入門しませんでした．ところが，私の方が入門してしまったのです．空手は体調を整えるには良い方法のように思えたし，そこの人々はみんな親切でした．(D)*

vision/policy への共感

誠道塾の vision や policy への共感が入門のモチベーションになることも示唆された．L は他流の道場に所属していてその道場に疑問を持っていた時，誠道塾の vision や policy を知り，創始者の著書に感銘を受けたことが入門のきっかけであると述べている．また，J のように，長く続けているメンバーが多い道場には信頼がおけるという判断も入門を意思決定する要因になっていると考えられる．

空手に対する生きがいも感じられず，このまま空手を続けて行くことに疑問を感じていました．その時です．中村会長の「人間空手」出合ったのは．一気に読破して，誠道空手こそ自分が求めていた空手であると確信しました．そこには極真会にないものがありました．(L)

黒帯になるまで生徒を育て，先輩空手家として定着させるという課題に向き合い続けている指導者が欲しかったのです．(J)

4.2.2 道場への認識

道場への認識，として「場の雰囲気」と「カリスマリーダーの認識」の２つのテーマを抽出した．ここからは，指導者は尊敬できる人格者であり，道場は安全に修練を継続できる場であり，分け隔てなくだれとでもコミュニケーションができる空間であることが認識されたことが示唆された．

場の雰囲気

O は道場について，道場生が真剣に稽古に取り組んでいて，日常とは異なる神聖さや厳粛さを感じる場であったと説明した（厳粛さと真剣な姿勢）．E は，会長の理念をもともと知っており，道場で行われている空手がその理念と整合した安全な場所であることを認識していたと述べている．具体的には誰もが平等に扱われ，肉体的・精神的な危険がなく安心して参加できる，心理的に安全な場を道場は醸し出しているという認識であると考えられる（心理的安全）．N は体験入門時に黒帯のメンバーから丁寧な説明や対応を受けたことを印象深い経験として記憶し，入門し稽古を続けることが他者から歓迎されている雰囲気によるものだと述べている（ポジティブな雰囲気）．さらに Q は，道場では空手を学ぶのに前提要件は無く，また，ハンディキャップを持つ生徒も必要な援助を受けることができるような公平性のある空間（公平性）だと認識していると考えられる．

道場に初めて訪問したとき，私は感動しました．生徒たちの純粋なエネルギーとひたむきさは息を呑むほどでした．今まで出会ったことのないような複雑な動きに目を見張りました．ここは，私が学び，成長できる場所だと強く感じました．道場内での生徒や先輩に対する尊敬の念がその姿勢を支えていました．(O)

中村会長が「全ての人が安全に稽古できるのが本来の空手の姿だ」という信念を具体化してくださったことは，我々にとってとても幸運でした．会長は「人間空手」を標榜されて，誠道塾を創設されました．そこで，老いも若きも，強くても体力に自信がなくても，健常者であっても特別なヘルプが必要な人であっても，全ての人に空手道の門戸を開かれたのです．（E）

私はさっそくその道場を訪ねて行き，体験入門の稽古を受けました．黒帯の女性が基本からベーシックセルフディフェンス，太極の型まで丁寧に指導してくれ，日本のように稽古後の雑巾掛けまでしっかりとやることに感心しました．（N）

ニューヨークの本部道場では，様々な人が稽古していました．高齢の方，LGBTQ＋の方，障害のある方，そして私のような外国から来た人などです，そして日々の稽古は何の区別なく，その多彩な人々が一緒に汗を流します．ハンディキャップのある方へは，必要な手が差し伸ばされます．視覚障害のオーナーを待っている盲導犬も，いつもの席から稽古を見守ります．ここでは強く逞しく空手の上手な人だけが尊敬の対象ではなく，様々なハンディキャップを持ちながら，心身を鍛えるためにやってくる人々が称賛されます．（Q）

カリスマリーダーの認識

K は，創始者である指導者の卓越した技術のみならず，他の空手家とは本能的な違いのある存在感の全てが，その場を支配していたと，そのカリスマ性を示唆している．L は空手の強さに加えて，陶冶された人格とそれに基づく正確無比な行動力を持つ創始者を最も尊敬できる人であると述べている．

私は会長の中に，行動する戦士としての精神集中とコミットメント，自分のやっていることに全力で取り組む姿勢を見ました・・・中略・・・中村会長は天性の運動能力，強さ，敏捷性に加えて，ほとんど芸術的レベルと言うべきテクニックを持たれていました．リーダーシップとは言葉ではなく，行動と態度であると思いますが，中村会長には見た目に加えて更に本能的な何かがありました・・・中略・・・中村会長と会って，その所作を見れば，彼は他の空手家とは違うとわかりました．・・・中略・・・会長の声，態度，身体的な存在感全てが，その場のコミュニケーションを支配していました．(K)

中村会長は極真時代の大先輩であり，その空手の強さに加えて，陶冶された人格，常に物事を人間的に考え，それに基づく正確無比な行動力を持っておられ，武道空手家で自分の最も尊敬する人でした．(L)

4.2.3 道場での相互作用

道場での相互作用として，「切磋琢磨」「価値共創」「自己研鑽」の３つのテーマが抽出された．修練は個人で行うものではなく参加者同士が仲間として切磋琢磨するものであり，それを続けていくと，道場という場の意味付けから，自分自身への意味付けに変化し，道場に対する認識が自己改革できる空間に変わることが示唆された．また，長い伝統を守り受け継ぐ武道の世界で，そのしきたりや制度は硬直しているのではなく，上下関係あるいはジェンダーにおける暗黙の区別も，参加者と指導者の共創により新しいものに変化させることができる場であることが示唆された．

切磋琢磨

切磋琢磨とは，仲間同士で互いに励ましあって技や学徳を磨くことである．道場では，それぞれの参加者が持つ目標をお互いにサポートし，励ましあうことが行われていると考えられる．空手への参加が休みがちになると仲間同士で実際に声を掛け合い，切磋琢磨する環境を自ら整えていることも示唆される．これは次のような道場参加者の言葉からもうかがえる．

誠道塾で学んだことの中に，ひとつの価値観にとらわれることなく，柔軟で広い心を持つことの大切さがあります．道場には，年齢や性別，人種や職業に関わらず様々な人達が稽古に来ていました．そんな人たちにもまれながら空手という日本の武道を学ぶことができたことは人生の宝物となりました．(N)

時が経つに連れて，私たちの多くは親密な関係を築き，クラスやトレーニングに参加することを期待されるように．もし，１日か２日休むと，たいていは電話がかかってきました，(H)

価値共創

道場では，生徒同士や指導者と生徒の共同作業で成り立っていたり，伝統に固執せず新しい方

向性を見出したりする価値共創が起こっていることが示唆された．同僚と共に一緒に何かを作り上げる経験をしたり，師弟関係の中でも互いに意見を出しながら道場をより良くするための知識共創をしたりしていることが示唆された．Jは，創始者が生徒の提言を受け入れて古いやり方を改めて，新しいやり方を創り出すことを説明している．

> *仲間は皆前向きで，皆で何かを作上げていく・・ああ，そういう空気ありますね．(C)*

> *会長は道場にもっと多くの女性のメンバーが欲しいし，稽古をより参加しやすくすることによって私たちを歓迎しようとされていました・・中略・・男の生徒と同じ稽古をさせてもらった方が，私やグループの他の女性もより歓迎されているように感じますと伝えると，会長はそれ聞き入れてくださいました・・中略・・会長があたりまえだと思っていた伝統的な考え方にもかかわらず，会長は自分のオフィスに行かれ，何が起こったのか，女性は何を求めているのかをお考えになり，会長はこれを変化の時だ，自分の考え方を変える時だと決心されたのでした．会長は皆の声に耳を傾け，聞いてくださいます．(J)*

自己改革

自己改革とは深く学び精神的に成長することを意味する．D は，道場には常に自分が成長するためのチャレンジがあり，そこが自己改革の場であるからこそ，道場に通い，稽古を継続できると述べている．

> *私が道場に通い続けているのは，ここには常に取り組むに値するチャレンジがあるかです．もちろん，体力の衰えは否めませんが，稽古において，私は自己の内面を強化する修練に焦点を当てています．私にとってそれが一番大切です．その努力をしていく限り，クラスは必ず学びの体験を提供してくれるはずです．(D)*

4.2.4 アウトカム

道場の稽古で生じる相互作用によって得られるアウトカムとして，「レジリエンス」「エウダイモニック・ウェルビーイング」「深い経験価値認識」を抽出した．ここでは，これらを体験あるいは身に着けることにより，ウェルビーインの状態を創り出す能力を獲得し，それを他人や仲

間と分かち合い，生き方を変える人間的成長に寄与し，また外の環境に対して影響していく準備ができたことが示唆された．

レジリエンス

身についたアウトカムの一つは諦めない心，やり抜く力，すなわちレジリエンスであるということが示唆された．E は強い精神力，自分の人生を生き抜くという精神，J は問題を平和的に解決する忍耐力という表現を使って語っている．

> *私は武道としての誠道空手の役割を次のように定義しています．「誠道空手の技や稽古をその道具や乗り物として使いながら，人間が持って生まれた自分の人生を生き抜くという精神をそれぞれから引き出すこと」「やり抜くぞ！強くなるぞ！私にはできる！」こういった態度を粘り強く持ち続けることが大切です．強い精神こそ強い生命力であり，それは何が何でも生き続け，正しいと信じたものを守り抜く意志です．(E)*

> *私は問題が起こっても，それとより直接的に向き合い，解決するまで諦めなくなりました．私はより忍耐強く，慎重に人に話しかけ，より積極的に人の話を聞くようになりました．対立があれば，平和的に解決するために，より深く，全力を傾けます．(J)*

エウダイモニック・ウェルビーイング

文献レヴューで示したように，精神的な健康（Wellbeing）すなわちウェルネス(健康であること)には 6 つの次元(Ryff, 1989)があると言われている．誠道塾で稽古を続けることでそれらを獲得し， 同時にポジティブな意識をもたらすエウダイモニック・ウェルビーイング(Keyes, 2006)を実現しているとの証言がある．例えば Q は自分を鼓舞し明るく生きることを学び, 1)自己受容（self-acceptance）を経験したと語る.また F は夢とヴィジョンの実現について思考がポジティブになり，自分の人生と周囲の環境を効果的に管理する能力としての 2)環境支配（environmental mastery）ができるようになったことを示唆している．P は，道場で稽古を積むことで自分が指導者になり，学んだことを後進に伝えようという確固たる決心をしている．このような強い志を持つことは，3)人生における目的の創造（creation purpose in life）とリンクしていると考えられる．道場での相互作用はまた，４）良い人間関係（positive relationships）を生んでいると考えられる．例えば P は誠道ファミリーが作る人間関係の偉大さに感銘を受けたと語っている．D は，人間性を尊敬できる世界中の仲間との稽古で多くの学びを得たと述べている．道場での体験は持続的な 5)自己の成長が望めること（personal growth），6)探究心/自

律性があることが示唆される．例えば，N は自己の成長について，共に成長を図りたい一心で，自ら道場を経営していると語り，P は探究心/自律性について，本当に大切なことを見逃さないように，心を耕し実が結ぶように，練磨を続けていきたいと述べている．

> *多様性の素晴らしさや人の苦しみを知って共存を求めることは，様々な人との絆を結び，人生に喜びをもたらしてくれます．自分を励まし朗らかに生きる心の持ちようを学んだことは，何にも代え難い財産を得たと思っています．(Q)*

> *ヴィジョンは夢でもある，夢を見れば実現する．夢が実現すれば，ヴィジョンも実現する．(F)*

> *エクササイズをするジムでなく，精神と肉体を鍛錬する場．老若男女が，子供たちが集い一緒に同じ志や理想の哲学を持ち稽古にいそしむことのできる場．また，疲れた時にはエネルギーをもらえ癒してくれる場．そういう場，まさにニューヨークの総本部道場のような空間が必要です．この場の維持継続こそが今後私に課せられた使命だと気づきました．(P)*

> *我々誠道の空手家は，世界誠道空手道連盟という絆で繋がり，世界中に散らばっています．これほど多くの善良で品行方正な方々と出会い，長きにわたって一緒に稽古できる偉大な機会を与えられたことを誇りに思います．私は彼らから多くを学びました．彼らの献身的な姿と，その人間性をとても尊敬しています．(D)*

> *私の道場にも世界中の仲間が立ち寄ってくれることが，とかく視野の狭くなりがちな私，そして支部のメンバーの世界観を広げてくれています．このような素晴らしい人間関係の連鎖が世界中に広がっていることの壮大さ，偉大さと誠道ファミリーという硬い絆を再認識いたします．(P)*

> *これまで中村会長からご指導いただいた「人間空手」の技と精神を余すことなく道場生に伝え，道場生と共に自分をも高め，共に人間的成長をはかりたいという一心で道場を運営しています．(N)*

> *今後も見えない目を見開き，聞こえない耳を傾け，本当に大切なことを見逃さないよう，中村会長の書かれた「耕心結実」を胸に心を練磨し続けて参りたいと思います．(P)*

深い経験価値認識

誠道塾の道場では相互作用によって，空手の技を身に着け，上達することのみならず，深い経験価値が認識されていることが示唆された．すなわち，考え方，生き方を変える人間的成長を伴う人格の変容を実感する体験である．たとえば，E は，スピリチュアリティのセンスを成長させることができると語り，D は，人間空手という真の空手道が人生全体に大きく影響したと話した．また，L は，ハンディキャップのある人との稽古で，彼らの心を知ることができたと話している．

> *正しく空手の稽古を積めば，自分が思い込んでいた限界は遠のいていきます．徐々に，生徒たちは肉体的にも，精神的にも成長していきます．そしてここが一番大事なポイントですが，スピリチュアルなセンスを成長させることができます．つまり武道は，自分の人生で遭遇する未知の敵に立ち向かう準備をさせてくれます．(E)*

> *真の空手道を学ぶ道を創ってくださった中村忠会長に感謝いたします．人間空手という信念の元で創られたカリキュラム，学ぶことができた教訓，それぞれにとっての審査や成長の機会，そして集う人々とそれによってできた組織，これら全ては，私の素晴らしい人生に大きな影響を与えてくれました．(D)*

> *知的障害者，目の不自由な人など，身体的にハンディキャップを背負った人達のクラスの手伝いをして彼らと共に稽古をしました．その人達が誠道空手で武道精神を学びながら身体を動かして，自分の生きる力にしている．皆が必死になって学ぶ姿を見て，その人達の気持，心を知ることができました．(L)*

4.2.5 日常生活での行動

誠道塾の道場での稽古が，道場という場を超えて，実生活での行動変容をもたらしていることが示唆された．具体的には「継続行動」「道場のメンタルモデル化」「社会貢献」を抽出した．ここでは，道場というウェルビーインを生み出す空間そのものが意識化され，エウダイモニック・サービススケープになっていくという可能性があるということである．

継続行動

空手の上達のみならず，空手で得たことを糧に，自分の人生の目的に向かって努力し続けるようになったと示唆された．例えば，Q は，自分がどのようになりたいのかを鮮明に描くことができ，そこに向かって努力し続けることができるようになったと語っている．S は自分の人生に対する運命的な決断をし，資格取得のために学び続けることにしたと述べている．

> *何故空手をするのか，自分の人生にどういう意味があるのか，自分の内に向かい本当の自分を見つけ出すことで，ひいては，空手だけではなく，生きる上で自分の願いが何なのか，はっきり知ることに繋がるように思います．困難に際して早く諦めてしまうことがなくなり，自分が何になり，どのように生きたいのかを鮮明に心に描き，そこに向かって努力を続けることにつながりました．(Q)*

> *先生方の教えは，肉体的にも精神的にも，私の物事に対する姿勢と自信をどんどん変え始めました．私は新しい目的意識を持って，大学での勉強に取り組み始めました．それまでの大学生活の最初の 2 年間は，何に重点を置いて勉強すればいいのかわからず，流されて過ごしていたのです．しかし，そのとき私は体育の教師になる決心をしたのです．これは運命的な決断でした．1984 年，私は代用教員として働きながら，理学療法士の学校に通い始めました．(S)*

道場のメンタルモデル化

空手の経験を積み重ねることで，ある参加者は日常生活において，道場が自分の生き方と一体化する感覚を得ているように考えられる．空手の精神は，通常は道場の中で参加者が共有し，それが空手を修練していく上での規範としてサービススケープを支配するものである．しかしながら興味深いことに，インタビューの結果からは，その精神あるいはメンタルモデルのようなものが，道場から離れ自分の人生の指針になっている可能性があることが示唆された． 例えば，Q は，道場における「自分を知り他人を知る相互理解の行為」は，道場の外で機能すると答え，また，J は，空手道場の稽古体験が，日常生活の課題解決をサポートしてくれると語っている．A は行動や積極的になり，他人とのコミュニケーションも向上したと語っている．T は仕事の現場で道場の体験がよみがえり，任務を遂行できたと語っている．また，A はこれまで話せなかった話題をオープンにすることができるようになったと語り，C は社会的な立場が弱くなったとき道場の体験に立ち戻ることができ，B は他人に対して意思表示ができるようになったと語っている．これらの体験は，道場がメンタルモデルとして，個々人に内面化していることを示唆しているのではないかと，解釈した．つまり，道場での修練を通じて道場のフィロ

ソフィーやその場での振る舞いが具体的体験として生徒の中に取り込まれる．それが抽象的概念として観念化され新たな価値観として内面に定着していく．それは信念として日常生活で活用され始める．この一連の作用の蓄積によって，道場で形成されてきた意識が，個々人の日常生活のバックボーンになり，メンタルモデル化されていくと考えられる．

> *自分を知り，その思いを他者に伝えることが出来ると，相手も心を開いてくれて，相互の理解が深まります．これは道場以外でも大変役に立ち，空手を人生に生かしていると感じることの一つです．(Q)*

> *最もハードな稽古は，常に道場の外で行われます．最初の頃は，ほぼ全てのスパーリングで自分の心が自分に負けていました．今では，私は道場で誰かと組んで稽古をしているときは，現実の今この瞬間全てに，焦点を当て，集中して対応できます．しかし，道場を出ると，そうはいかないこともたくさんあります．私の心は昔に戻って，釣り針に引掛かかった大きな魚のように，あらゆる方向に暴れまくって，脱出する方法を探しています．誠道空手の稽古は，私がこの魚を巻き上げるために繰り返し，繰り返し使う強い釣り糸です．その時こそ，誠道の道を歩んできたことに感謝し，人生での闘い方や闘う価値を教えてくれた会長に心から感謝する時なのです．(J)*

> *行動範囲も広がりましたし，人との接し方も変わりました．農業の会合とかにも出るようになったり，子供の学校でずっと一緒だったお母さんから，話しかけられるようになったり，怖くて話し掛けられなかった・・・丸くなったよねって，言われます．(A)*

> *火はとても熱く，2分もしないうちに私の体から力が抜けてしまいました．ホースを握る手の力も弱くなってきました．腕の関節でホースを支え，流れを整えなければなりません．もう逃げ出したい・・・．その時，私は黒帯の昇段審査で，組手審査の最中に感じていたことと同じ気持ちが沸き起こりました．会長や先輩たちは私を限界まで追い込みます．そこでは，自分の心，自分の意志，自分の決意に頼るしかないのです．それは肉体的なことだけではありません．私は火の勢いを少し弱めて，それ以上燃え広がらないようにすることができました．(T)*

> *誠道に入って図太くなったというか変わりました．今まで耳の障害のことでいじめられて，でも世の中，普通を求められるから，ずっとバレちゃだめだと思っていましたが，実は耳がって言えたのです．初めてでしたよ．旦那にもカミングアウトできました．彼にも言ってなかったので．(A)*

空手はいつも変わらずにいつも私の側にある．転職，数年前にして，立場が何もなくなる時が何か月かあって，そのときにやっぱり道場に通っていて，そうすると普通の今までの自分に戻れる感じがある．(C)

言葉悪いですけど，周りに変な人いなくなりましたよ．明らかに，まるっきり変わってるんじゃないですか，その辺は.基本的に，人の嫌がることはもちろんしなくなったし．それに，欲求に対する抑制が利きますよね．昔は，欲しいものあれば何でも欲しいし，どんな手を使ってでも，借金してでも，みたいなことありましたけど．それに，はっきりものを言えるようになりました．昔は，例えば，友達に誘われても，行けたら行くみたいな，あやふやな返事しかできなかったんですけど．(B)

社会貢献

インタビュー結果からは，「道場のメンタルモデル化」のように，空手経験が参加者個人に反映されていく側面とともに，地域貢献や人材育成などの自分以外の他者に向けられた社会貢献活動を動機づけている可能性があることが示唆された．例えば，P は青少年育成の為の学校教育での空手の普及を検討し，L は震災により被災した小学校を慰問に訪れる行動を起こし，M は，空手を教えることに留まらず，世界に貢献できる人材を育てることが目的になり，一般の人の心の成長を目的としたクラスを開講したと語った．

空手の魅力，素晴らしさを若い人たちに伝播するために，メンバーの所属する学校，卒業学校でのクラブ活動，同好会活動等にも援助参加できないかと考えています．(P)

中村会長の命を受け，被災地，気仙沼市を訪れました，想像を越える余りの悲惨な状況に私たちは衝撃を受けました．世界中の誠道塾の生徒より寄付金，そして困難から立ち上れるように作られた日本の伝統の千羽鶴，これらを私たちは，気仙沼市役所，大谷小学校に渡しました．社会貢献の大切さを学び，周りの人々と助け合い，励まし合う喜びを実感しました．(L)

私は誠道空手を通じて多くの社会貢献できる人材，国のため，ひいては世界に貢献出来る人材が我が道場から育ち，またそのような人材を輩出させることが私の役目であり志である．(M)

誠道空手を真剣に追求することで，それを後押してくださる方々が出ていらして，その方々との関わりを通じて自分の生き方がさらに深まっていっ

た．現在は地域の人々も参加できる学びの場「人間共育道場」を開設している．年に三回，その道のプロ（一流の人）をお招きして，生き方，考え方，思いを聞く．その後，グループに分かれて意見交換，ゲストへの質疑等，振り返りの時間を持っている．(M)

日本は，超高齢化社会に突入しています・・中略・・膝，股関節，腰，体幹へのエクササイズ，また棒や杖を利用する運動など，健康増進を目的とした空手運動療法，健康クラス等の新設を検討したい・・中略・・また，震災，災害等で長期間避難されることが発生した場合でも，避難所でも空手健康療法がお役に立てるのではと考えています．(P)

4.2.6 修練継続期間の違いによる意識・行動の変化

インタビューをした 3 名はそれぞれ初級者（A)，中級者（C)，上級者（B）である．修練継続期間の長さ，すなわち修練の積み重ねによって，意識や行動にどのような変化があるのか，その言質から分析した（表 4-3)．その結果，修練によって，初級者はコミュニケーションが広がったり，探求心が出てきたり，自分自身の変化を中心に話をしていることが示唆された．中級者は，勝敗のないコミュニティの和やかさや，劣勢に立った時の平常心等，自分と他人とのコミュニケーションについて語っている．そして上級者になると，今ここにいる自分と他者の関係のみならず，自分のやっていることを伝えていきたいという意識の芽生え，使命感等，さらに組織の外に向けて広がりを持とうとする意識が生まれていることが示唆された．これによって，修練を継続し，修練年数が進むに従って，参加者の意識と行動に変化が生じ，自分に対する変化，自分と他者の関係性に対する変化，組織の外に踏み出してゆくという変化，このような深化をもたらせる経験を提供し続けている可能性があることが示唆された．

表 4-3 修練期間の違いによる意識・行動の変化

	意識・行動変化の対象	Data
初級者（A）	自分自身	普通であるっていうことを強制されないっていうか，普通じゃないことも当たり前，いろんな人がいて当たり前，そういう中に今いられています．そういう考え方自体が広まればいいなって思います．(A)
		誠道に来て，コミュニケーションが広がって，いいことなのですが，逆に，自分はどうしていいかが分からなく

		て，困りました．常識知らずだと思ってるんで，世間知らずなので．(A)
		取りあえずなんとかなる，できるんじゃないかなって，やってみようかなって，どうしてもできないことが増えてくるんで，**どうやったらできるようになるかなっていうふうに，もっと考えるようにはなりましたね**．(A)
中級者（C）	**他人や環境との関係性**	ライバルって，この人がいなかったら私がレギュラーになれるって・・・バレーボールやってたから，六人で，絶対のレギュラーは六人しかいないから，**誰かが怪我したら代わりに入るみたいな・・あーでもそういうのがないからこうみんな，穏やかに応援できるんですね，すごい和やかな感じ**ですよね，だから空手の試合って，殺伐としていて，勝った負けたで大変なことになってたんじゃないかと思っていたのですけど，そういうの全然ないですね．終わった後，みんな，**国際試合なんかだと，どっから来たの？とか，いつから始めたの？とか**・・(C)
		会長が，空手をね，稽古する生徒たちに自分の中に取り入れなさいって・・・実際は，例えば道で出会った人と闘うような場面には絶対出くわしたくないじゃないですか．でも，組手って，ほんと凄く性格が出るっていうか，凄いいろんなこと学ぶなって，人との距離・・近すぎたら見えない．でも遠過ぎたら何も攻撃もできないし，近づくとやられるけど，それなりな，間合いとか，**そういうのって組手だけじゃないんだなって，人との接しかた・・空手だけじゃない**・・(C)
		仕事なんて理不尽なことだらけじゃないですか？それでカチンときても，やっぱ**平常心**というか，どんな時でも言い訳をしないって言うか，**凄い劣勢に立ってても，いつか勝機があるって言うか，粘り強くとか，なんかそういうのを空手で学んだ**ような気がしますね．いろんな状態で，何々がないから今日はできないのとか，最高のパフォーマンスができないよとか，いや，それは言い訳にならないよね，みたいな・・(C)
上級者（B）	**組織の外**	**自分がやってることを伝えていくんだ，伝えていかなければいけないっていう意識が芽生える**っていうこと自体は，やっぱりこの誠道っていうところの素晴らしいところ・・・なんない人は辞めてくんですよ．自然発生的に，もっと**ここにも広めたい，習いたい人いるんだから行きたいっていう気持ちになる**んじゃないですか．不思

	議ですよね．(B)
	お世話になっているのだから一生懸命やらなきゃいけないっていう気持ちが自然に出てくるというか．自分はそうです．やっぱり誠道にいてよかったなと思うし，会長に出会わなかったらどうなっていたのだろうとか．もっといい人生があったとは思えないですもんね．自分は特に．本当，拾っていただいた，助けていただいたっていう感じで，精いっぱい続けたいなと思います．**使命感って言ったら格好いいですけど，自分にできることは何だろうって考えたら，誠道の芽をまくっていうことなのかなと，そういう感じですかね．**皆さんそうなんじゃないですかね．(B)

4.3 発見事項

図 4-2 は Gioia 方法によって整理，分析したデータを元に道場におけるウェルビーイング形成の流れを描いたものである．まず，道場というサービススケープにおいては，参加者らは互いに切磋琢磨，自己改革，価値共創を経験していると考えられる．この経験には，道場の持つ場の雰囲気やリーダーの人格といった，道場への認識が関連している可能性がある．そしてそれは道場との継続的な関わりの中で育まれていくことが示唆された．

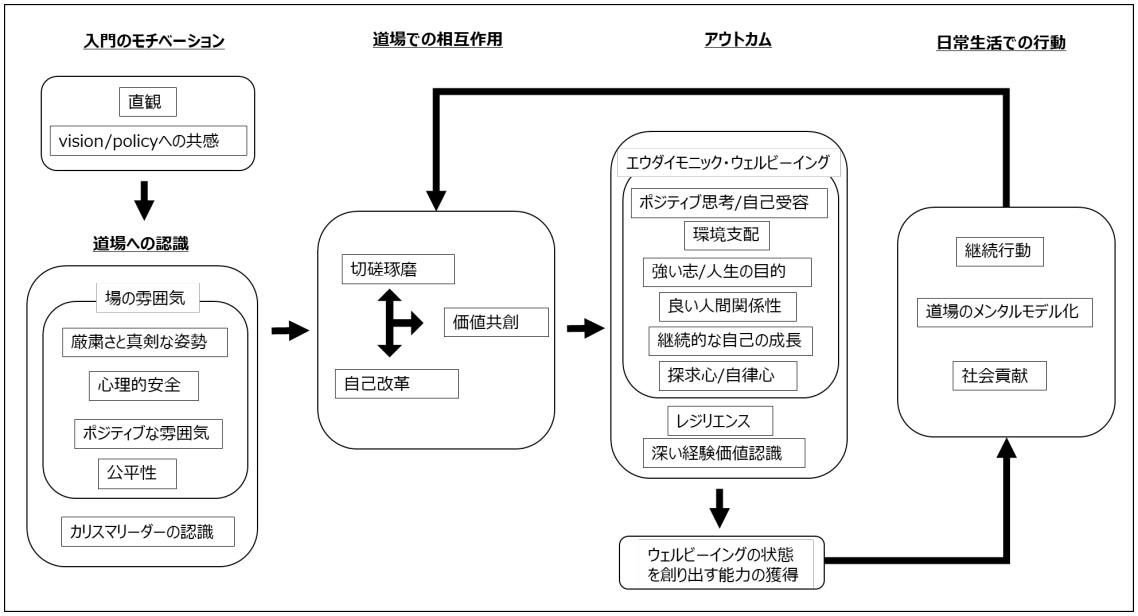

図 4-2 道場でのウェルビーイング形成の流れ

これら道場での参加者の相互作用によって，自分自身のレジリエンス，深い経験価値認識をはじめ，ポジティブ思考/自己受容，環境の支配，強い志/人生の目的，良い人間関係性，継続的な自己の成長，探求心/自律心という，多様なウェルビーイングのアウトプットが創造されている可能性を見出した．これらのアウトプットは総じて，ウェルビーイングである状態の獲得というよりはむしろ，ウェルビーイングの状態を自らが創り出すことができる能力を獲得していると考えられる．そして，その能力が行使されることで，道場との関わりや，自分の人生目標に向う努力の継続行動，道場のメンタルモデル化，社会貢献の実行という，日常生活での行動の変容をもたらせていることが示唆された． さらに，道場の外で活動しながら，常に新たな目標を提示してくれる道場での修練に戻っていくサイクルが生まれていることが示唆された．このように道場というサービススケープにおけるウェルビーイング形成とはウェルビーイングの状態を自らが創り出すことができる能力の獲得に特徴があることが示唆された．

4.4 小括

道場で行われる参加者の相互作用によって生じ，獲得されたアウトアムは，その総体としていつでもウェルビーイングの状態を創り出すことができる能力になる．それを道場の外で行使することによって，行動の継続，社会貢献など，日常生活に変容をもたらせながら，新たな目標にチャレンジするために道場の修練に戻るサイクルが働いていることが示唆された．

第五章　ウェルビーイング形成のメカニズムについて

5.1 サービススケープとしての道場

文献でレヴューしたローゼンバウムのサービススケープにおける段階的認理論は，その場での経験が進むと，最終的にはその場が家のような場に感じるようになるというものであり，サードプレイスの段階的認知の変化における基本的なモデルであった．さらに，サービススケープ上でアクターが行う相互作用は，場所への意味付けと共に自分自身への認識を深め，更にそのサービススケープで共有されている制度を変化させる可能性を持っていることを提示した．これは，場に対する認知的な変化であり，アクターは物理的なその場に留まることが前提である．

本研究によって，修練を続ける参加者は，道場で獲得したアウトカムを，内面化し道場の外で

生かしていることが示唆されている．このことから，誠道塾ではサービススケープとして，道場における認知的な変化に，ローゼンバウムが示した三段階の認知モデルに加えて，次の第四のプロセスがあることが示唆された．そこで，ローゼンバウムのモデルを拡張したモデルを示す（図 5-1）．誠道塾にはフィロソフィーと修練システムという制度があることが前提である．

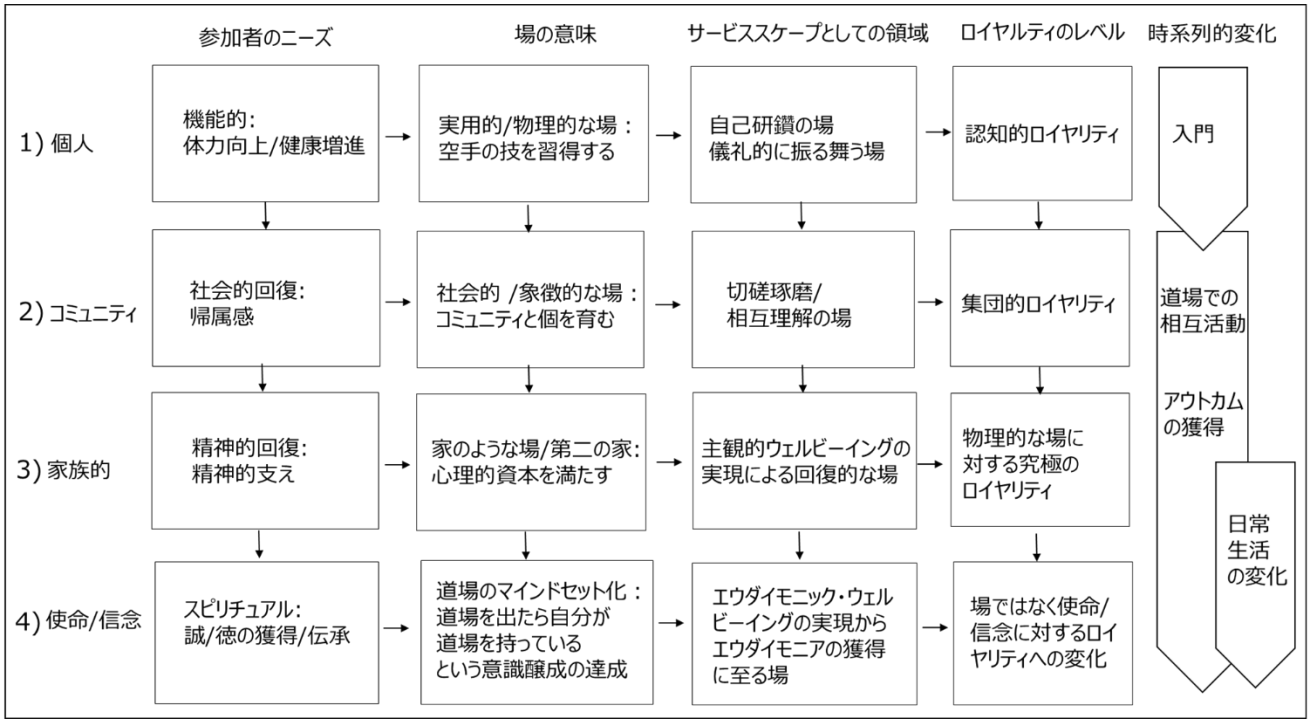

図 5-1　誠道塾道場のサービススケープの段階的認知変化

1）第一段階は「入門のモチベーション」で示されたように，参加者が個として，ポリシーへの共感がある場合も，直感で入門を決められる雰囲気の中で，物理的な道場という場において「道場への認識」を新たにし，そこを空手の技を習得する修練の場として認識すると考えられる．さらに，制度の認識もなされる．中村忠氏による道場の機能への言及では，自己研鑽の場であり儀礼的に振る舞う場という認識が始まる時である． 初級者の行動から示唆されたように，この段階のサービススケープとしての道場へのロイヤリティは，空手の稽古を実用的なものとして自分に対する変化を体験する，認知的ロイヤリティであると考えられる．

2）第二段階は「道場での相互作用」で示された，道場での切磋琢磨による経験が，このフィロソフィーや規律に則り，稽古や審査を通して参加者の中に記憶され，蓄積されると考えられる．「道場への認識」で示されたように，道場への心理的安全の確認やポジティブな雰囲気からコミュニティに対して帰属感が生まれ，道場は社会的，象徴的な領域として認識される．中村忠氏による道場の機能への言及では，相互理解の場であり，コミュニティと個を育む場であり，生徒達が共に責任を持つ場である．中級者の行動から示唆されたように，この段階のサービス

スケープとしてのロイヤリティは，認知的なものから道場と言う物理的な場に拡張し，自分と他者の関係性に対する変化を体験する，集団的ロイヤリティであると考えられる．

3）第三段階は「アウトカム」で示された，道場での経験，獲得した意識は内省的観察によって概念化され，真正性を伴った武道家としてのアイデンティティとなって確立され，アウトカムの総体が，主観的ウェルビーイングとして自分自身を回復してゆくと考えられる．中村忠氏による道場の機能への言及では，ローゼンバウムの説明とも直接合致する，安心する場/第二の家，オープンマインドになれる場であり，第二段階と第三段階においては，Luthans et al.,(2004)が提案する積極的な反応や自律的な目標達成を促す希望，自己効力感，レジリエンス，楽観性で表される心理的資本という概念が道場というサービススケープに継続参加する者に備わっている可能性があることを示唆している．先行研究では，第三段階において究極的なロイヤリティがあると提示されていたが，本研究においてはそれはあくまで物理的な場に対するロイヤリティの最終形であることが示唆された．

４）そして，「アウトカム」及び「日常生活での行動」で示された行動から判断すると，参加者は道場で得た武道家としてのアイデンティティを生活の鏡として活用していると考えられる．その場が，ローゼンバウムのモデルにはなかった第四段階として，エウダイモニック・ウェルビーイングを越えた意識としてエウダイモニアが確立するサービススケープとなると考えられる．日常生活の現場が，修練で獲得された「誠」すなわちエウダイモニアを伝承していく使命感，信念と言った自意識が生まれ，スピリチュアルな場面となり，中村忠氏による道場の機能への言及では，道場を出たら自分が道場を持っているという意識の醸成が達成される．上級者の行動から示唆されたように，場所への意味付けが，自己への意味付けへと移行し，それが深まっていくと，自己の内面に対するロイヤリティ，つまり最終的に道場と一体化し，物理的な場を越えた自分自身に対してのロイヤリティとなる．

参加者が段階的に場に対する認知を成熟させていき，究極的には家のような安心できる場として認識されるというこれまでのサービススケープ研究の議論(Rosenbaum, 2006)に加えて．本研究では，図 5-1 にまとめられるように，そうしたサービススケープの持つ場の認識を超えて，自分の人生に対する価値観を道場と一体化させる感覚形成という新たな認知行為があることが示唆された．そしてその感覚は肉体的，精神的鍛錬を通じて参加者の内面に蓄えられ，道場の外，いわゆる日常生活に持ち出されることで，日常生活の様々な場面にそのサービススケープがメンタルモデルとして転写され，それによりウェルビーイングを自ら形成する能力となっていることが伺える．

誠道塾では最終的に道場という概念が自分の信念，使命感と共にポータブルに道場の外へ持ち出すことができることで，三段階あったローゼンバウムのサービススケープの段階的認知の理

論をさらに進め，サービススケープの内面化という新しい価値共創の次元があることがわかった．その第四段階のサービススケープとして，物理的な道場の外で知覚される物理的な特定の場に捕らわれない道場の存在を加えることができるのである．そこでは，サービススケープの認知によって，主に社会的な回復や安心感，孤独感の排除などが日常生活に対して効果的に働くとされるローゼンバウムの家のような存在となる第三段階の認知に(Rosenbaum, 2006)加えて．本研究で示したサービススケープの四番目の認知では，自分に対する心身の健康の獲得のみならず，他者や社会に対して積極的に関係性やサポートを働きかけるようになるという変化としてのファクターを獲得すると考えられる．そこで，この第四番目のサービススケープが，エウダイモニアを獲得するエウダイモニック・サービススケープであると考えられるのである．

5.2 道場におけるサービス交換

道場におけるサービス交換は，いかにして参加者はアップリフティングチェンジを経験しているのか，という点に視点を移すことで説明することが可能であると考える．道場というサービススケープにおける修練という身体的な活動は，一過性のポジティブな経験をすることが最終目的ではない．これまでの分析によって，参加者がそのサービススケープでのサービス交換により具体的に獲得するアウトプットがあり，それは自分の人生を生き抜く諦めない精神，また社会貢献に目を向けたり，利他的に振舞ったりする心という，人間的成長であることが示唆された．加えて，修練の目的は人格のポジティブな変容であることが示唆された．スポーツとサービスが変容的価値を生み出す可能性が指摘され始めている(Vinet & Zhedanov, 2010)が，人間が身体を修練する場においてどのように個人がアップリフティングな変化を経験しウェルビーイングを形成しているのかについての研究は未だ十分ではない(Rosenbaum et al., 2017, 2020; Rosenbaum & Massiah, 2011)．

本研究では，以下のことが示唆された．参加者は，修練を通して本来の自分と向き合い，調和する．それによって，これまで制限されていた自己が解放され，自己は外へと向かい，取り巻く組織や社会的・自然的環境と調和していく．その中で参加者は，相互につながっているという感覚を認識しながら，人格のポジティブな変容すなわち変容的価値を形成していくと考えられる．これは，将来，人生行路で未知の困難に遭遇しても，それに立ち向かい，いつでもウェルビーイング状態を自らが創り出せる，持続可能な人間的成長を支援する能力を獲得できる可能性を示唆している．言い換えれば，参加者同士のサービス交換による相互作用からウェルビーイング形成，向上のために，自己の内部にアップリフティングチェンジが起こっていて，スピリチュアルな成長(A. Pandey et al., 2009)がなされている可能性があるということである．そのためには，長く継続的な修練が必要だが，参加者は稽古によって目標が達成されると，また新たな目標に向かう意識が生まれ，それが再び動機となって道場に通い続けて修練する．その

ことで，参加者同士の相互作用の循環が起こっていることが示唆された．道場でのサービス交換は，参加者が道場での修練は人間形成のプロセスであることを理解し，参加者同士の稽古の繰り返しによって，道場はさまざまなウェルビーイングを形成し続けているプロセスと考えられる． 誰もが準拠できる道場のフィロソフィーと修練システムを作ったのは創始者の意識である．創始者からサービス交換が生まれているというよりも，道場という場所と参加者，参加者と参加者がそれぞれサービス交換をしている．修練の場ではそれぞれお互いの潜在意識が発揮されて，全体で大きなダイナミクスが生まれていると考える．

5.3 武道修練を通じたウェルビーイング形成のメカニズム

5.3.1 誠道フロネシス

誠道塾は研究 1 において分析してきた中村忠氏が持つ信念や価値観と，そこから生まれた修練システムに則って，生徒である参加者が修練を実践するというダイナミズムそのものがウェルビーイング形成の要因になっていると考えられる．『中庸』から選んだ「誠」というエウダイモニアに繋がる能力を獲得することを目標とする誠道塾では，そのフィロソフィーに「最高善」の獲得を謳ったアリストテレスのフロネシスとの親和性があった．一方で，文献レヴューにおいて，組織におけるエウダイモニック・ウェルビーイングの形成には真正性，すなわちオーセンティシティを発揮するリーダーシップの形成が重要であるとされたが，中村忠氏が実際にオーセンティック・リーダーシップを発揮していたかどうかついて，改めて研究 2 のデータから，オーセンティック・リーダーシップの 4 つの要素；自己認識，隔たりのない処理，真正行動，真正な関係性志向(Ilies et al., 2005)に当たる経験を抽出することができた（表 5-1）．

表 5-1　中村忠氏のオーセンティック・リーダーシップ

オーセンティック・リーダーシップのファクター	Gioia 法による分析での二次テーマ	Gioia 法による分析の一次コードより
自己認識	カリスマリーダーの認識	私は会長の中に，行動する戦士としての精神集中とコミットメント，自分のやっていることに全力で取り組む姿勢を見ました・・中略・・会長の声，態度，身体的な存在感全てが，その場のコミュニケーションを支配していました．(K)
	強い志/人生の目的	「あなたがいつも通りに過ごすことがテロ

		に屈しない毅然とした態度になるんだよ」と教えられた．(C)
	社会貢献	私は誠道空手を通じて多くの社会貢献できる人材，国のため延いては**世界に貢献出来る人材が我が道場から育ち，またそのような人材を輩出ことが私の役目であり志**である．(M)
	ポジティブ思考/自己受容	**自分の動きが正しい方向にあると感じている**ということ．(J)
	カリスマリーダーの認識	**会長のヴィジョンは常に進化**してきました．(R)
	強い志/人生の目的	人間空手は様々な分野の人達に気づきを与え，**志の重要性を教えてくれた．**(M)
隔たりのない処理	価値共創	会長はこれを変化の時だ，**自分の考え方を変える時だと決心されたのでした．会長は皆の声に耳を傾け，聞いてくださいます．**(J)
	心理的な安全	**自分をさらけ出すっていう場面**は普段はない．ありがたい機会．(C)
	道場のメンタルモデル化	**自分を知り，その思いを他者に伝えることが出来る**と，相手も心を開いてくれて，相互の理解が深まります．これは道場以外でも大変役に立ち，空手を人生に生かしていると感じることの一つです．(Q)
	ポジティブな雰囲気	**社交的で，エゴのない，熱心な弟子たち**との出会がありました．(F)
	レジリエンス	困難に直面した時，「R，やれ！とにかくやってみろ！」．**そのお声は私に必要な強さと集中力を与えてくれます．**(R)
真正行動	カリスマリーダーの認識	中村会長は極真時代の大先輩であり，その空手の強さに加えて，**陶冶された人格，常に物事を人間的に考え，それに基づく正確無比な行動力を持っておられ，**武道空手家で自分の最も尊敬する人でした．(L)
	環境支配	**今後も見えない目を見開き，聞こえない耳を傾け，本当に大切なことを見逃さないよう，**中村会長の書かれた「耕心結実」を胸に心を練磨し続けて参りたいと思います．

		(P)
	強い志/人生の目的	**「あなたがいつも通りに過ごすことがテロに屈しない毅然とした態度になるんだよ」**と教えられた．(C)
	心理的な安全	威張る先輩なんて１人もいません．(B)
	厳粛さと真剣な姿勢	**道場生もいきいきとしていて，みな雰囲気が明るくかつ紳士的で，なによりも武道の礼儀作法をわきまえていることに目を瞠ました．**(N)
真正な関係性志向	カリスマリーダーの認識	**会長は，人に対して常に心を開かれ，耳を傾けられる方**だからです．(F)
	カリスマリーダーの認識	**会長は私に 100%の心配りをしてくださいました．**(R)
	カリスマリーダーの認識	**「あなたは空手家」という言葉は響いた，会長は人をオープンにさせる，そこから自分に変化がきた．**積極性が出た．(C)
	心理的な安全	道場では誰もが安全であると感じられました．何故ならば，**会長は「徹底的に人を敬うこと」を要求された**からです．(R)
	公平性	先輩だから，先生だから，師範だからという関係ではなく，**人と人，人間同士の結びつきを深めていける雰囲気．**(N)
	切磋琢磨	ニューヨーク本部の道場生が**お互いに尊敬し，尊重し，そして助け合う姿は，人間として成熟している証し**と感じました．(N)
	価値共創	**一緒にいる仲間とお互いに感謝を感じて一つの場が成り立っていく．**(A)
	良い人間関係性	**私は誠道の道場で自分自身と他人との関わりについて多くのことを学びました**．(O)

中村忠氏が持つ，オーセンティック・リーダーシップと，それを伝授された参加者である生徒の心情の変化，あるいはその場で感じられた真正性と考えられることが抽出された．自己認識では，中村忠氏の自己認識にブレのない姿勢，自分がやることに全力を尽くす姿が観察され，生徒は世界に貢献できる人材を育成したいという志や，自分の正しい方向性を認識できる感覚を手に入れたと示された．隔たりのない処理では，自分の心に素直に行動し，メンバーの声に耳を傾け自分の考えを修正する姿勢が見られ，生徒は，自分をさらけ出せる場を享受し，エゴがなく熱心が人間になってゆくと示された．真正行動では，中村忠氏は陶冶された人格を持ち，常に物事を人間的に考え，それに基づく正確無比な行動を取るとされ，あなたがいつも通りに

過ごすことがテロに屈しない毅然とした態度になるんだよと，外の環境に影響されない姿勢を示され，生徒は見えない目を見開き，聞こえない耳を傾け，本当に大切なことを見逃さないような心持を伝授されていることが示された．真正な関係性志向では，中村忠氏は他人に常に心を開き，他人を 100%ケアし，人を徹底的に敬うことを教え，人をオープンにさせる存在だと示唆され，生徒は，お互いに尊敬し，助け合う姿が，人間として成熟している証しであると感じ，自分自身と他人との関わりについて多くのことを学んだと語っている．これらのことから，中村忠氏がオーセンティック・リーダーシップを備え持つことと，修練によって参加者である弟子たちに伝授されていることが示唆された．中村忠氏は正にフロネシスを体現するフロニモスであると考えられる．

アリストテレスはフロネシスの中心には感じ方，考え方としての中庸があると説いたが，その発動については言及していない．またフロネシスを獲得できるのはその資質がある人間のみであるとも言っている．社会やコミュニティにおいては，コンテクストに応じて，個人の正義を優先するメンバーと，社会の善を優先するメンバーの対立のバランスを取りながら相互交換を推進する能力が実践知，すなわちそれがフロネシスである(野中 et al., 2014)とされる．一方で，誠道塾のフィロソフィーの元になった中国の儒教における『中庸』には，それを発動するためには修練が必要であると述べられている．この中庸は世界の調和を達成するために必要な人間本性の「誠」の充実であり，修練して獲得するものと位置づけられる．また，それは天与の資質を持つ選ばれた者だけでなく，修練を通じて全ての人が獲得可能であると述べられている．誠道塾の道場は修練の場であり，フロネシスを獲得し発動させる場と考えられる．従って，誠道塾でのフロネシスの定義は，アリストテレスの「フロネシス」の意味に，『中庸』からの「誠」すなわちエウダイモニアを獲得するための中庸な姿勢と実際の修練を加えることによって達成される，「人間の本性，倫理的徳の本質的な属性である誠を充実させて常に発揮でき，いつでも誠を創造することができる状態」とすることができ，さらにオーセンティック・リーダーシップの発揮によってフィロソフィーそのものが息づくことで，この誠道フロネシス自体が発動されると考えられる．

5.3.2 ウェルビーイング形成のメカニズム

本論文では，武道修練は道場というサービススケープで行われるサービス交換であるとして分析を行ってきた．研究 1 として，誠道塾が持つ，フィロソフィーと修練システムが，創立者である中村忠氏のどのような考えや信念あるいは使命感によって成立したのかを分析した．続いて研究 2 として，誠道塾で修練を続けてきた生徒たちが，道場でどのような資源交換をし，どのようなアウトカムを獲得したのかを抽出し，それらを分析することで，サービス交換の流れ

や，そこに働くメカニズムを検討した．そのメカニズムを模式図化したのが図 5-2 である．

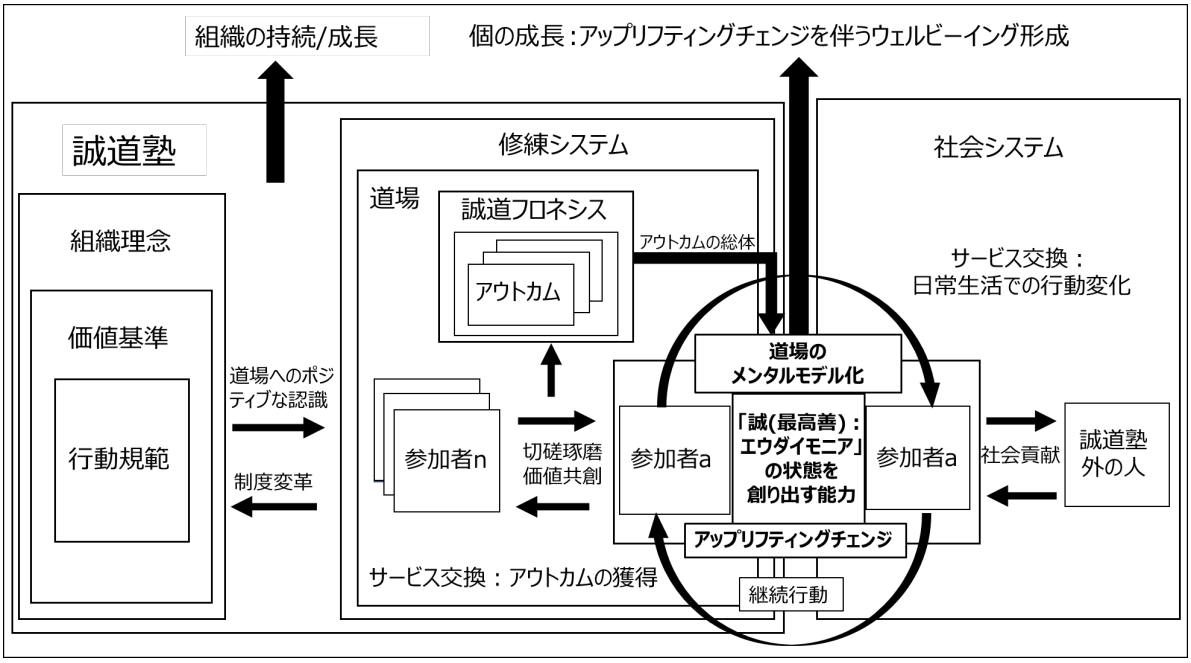

図 5-2　武道修練を通じたウェルビーイング形成のメカニズム

創立の理念となった創始者の信念や使命感によって，組織として寄って立つフィロソフィー，すなわち組織理念，価値基準，行動規範が制定される．それに沿って，実際の修練の教科書，指導書になる修練システムが確立された．このフィロソフィーと修練システムが，この組織において根幹となる制度である．参加者である生徒はこの制度の元，道場と言うサービススケープで修練をする．修練とはすなわちサービス交換である．

サービス交換は，参加者それぞれが自分の目標達成のために，お互いに儀礼的行為を通じて敬意を示しながら切磋琢磨する対等な関係性に基づく価値共創行為として，道場に対してポジティブな認識を持たせるフィロソフィーへの共感と道場での修練によって，主観的及びエウダイモニックなウェルビーイング形成につながる多様なアウトカムを生み，参加者はそれらを獲得してゆく．

フロネシスは物事や状況に個別に具体的に熟慮し対応することで，道徳的な方向へ導く賢明な決定をする知識である(Eisner, 2002)．修練の継続によってアウトカムは繰り返し獲得され，蓄積される．こうしてできたアウトカムの総体はフロネシス（この事例の場合は誠道フロネシス）であると考えられる．

これらのアウトカムは，参加者の内面に落とし込まれ，定着し，その総体は意識となって道

場のメンタルモデル化が起こる．言い換えれば，道場が自分自身の中に取り込まれ，道場が物理的な場所である必要はなくなり，道場が持っているウェルビーイング形成能力が，参加者である個の能力となり，場所を問わずに発揮できるようになる．つまり道場が昇華されて自分自身のマインドセットになるのである．この能力は，徳と言う，人間を善きものにするために潜在能力を発揮させるための状態を得て，それに即して活動を行う最高善であり，誠であるエウダイモニアの実現をもたらせるものである．エウダイモニアは人格形成に関わる深い経験価値という概念が融合した価値としてのアウトカムと考えられる．

先に，サービススケープの段階的認知の分析で，この状態はサービススケープとしての道場の四段階目である，自分自身が自他のウェルビーイングに影響していく使命感や信念に値する認知フェーズで起こることを明らかにした．アップリフティングチェンジは商業的な活動を意味しない心の変容であり「道徳的，精神的，文化的なレベルなどを高めるように，人の気分や精神の向上を促すような形でポジティブになること （Cambridge Dictionary を参照し，著者が定義)」と定義した．こうした使命感や信念を自覚することは，すなわち，アップリフティングチェンジが起こることであり，それによりエウダイモニアの実現をもたらせる能力が獲得され発揮されると考えられる．

従って，誠道塾で形成されるウェルビーイングは，この使命感や信念に裏付けされたアップリフティングチェンジを伴ったエウダイモニアを意味すると考えられる．エウダイモニアが能力として発動されることで，自利としての自己改革や利他としての社会貢献など，修練の場である道場においても，メンタルモデル化した道場を社会システムに持ちだした日常生活の中においても，自己の内外に影響を与えるものとなる．

サービス・ドミナント・ロジックの文脈では，制度や修練のコンテンツはオペランドリソースであり，行動を後押しするフィロソフィーから生まれる意識そのもの，人格形成を促進する知識や教え，それに価値共創をおこす参加者自体がオペラントリソースである．エウダイモニアを実現させる能力こそ最高のオペラントリソースとなる．それを道場の中，あるいは外, 日常生活や社会貢献といった場において行使することで，アップリフティングチェンジと共にエウダイモニアが発動される．これらの動きは一過性のものではなく，常に新たな目標が提示される制度によって，そこで得た経験を携えて，再び物理的な道場に戻り活動が継続されるサイクルとなる．このことによって，道場そのものが相互作用の誘因になっていると考えられる．（図 5-2 における参加者 a を代表的参加者とする．道場の修練システムで他の参加者 n と切磋琢磨，価値共創と言うサービス交換を行い，社会システムでは誠道塾以外の人と共に社会貢献を行い，あるいは自己の役割における精進を通してサービス交換を行い，その双方のシステムに間を循環しながら，どちらにおいてもエウダイモニアであるウェルビーイング形成を行っている. 参加者 n はそれぞれが参加者 a となり，同様に活動している）．研究 1 で明らかにした「相手に対し

て尊敬の念を持つことで愛が生まれ，それは謙虚さとなって人間関係が豊かになる」という循環も同時に起こり続けるという示唆も重なってくる．すなわち修練の実践というサービス交換における基本的な心の内面の動きが誘発されていると考えられる．こうしてサイクルが回る毎に自己成長が加算されていき，参加者個人の成長と共に，各人の成長の総体として道場を持つ組織自体も成長が継続されていくと考えられる．組織自体の成長によって個人の成長も影響される．伝統的な制度が組織の体制を作っている武道の道場が，なぜ長く継続されてきたことへの回答でもある．このことにより，武道修練を通じたウェルビーイング形成のメカニズムであることが示唆された．

5.4 小括

誠道塾のフィロソフィーには，行動の正当化を促す規範となる実践知として,フロネシスがエンベディッドされている．生徒というアクターは，修練というメディアを通じて,そのフィロソフィーを基に具体的に構成された特徴的な修練システム則って，道場というサービススケープで修練を実践することで，多様な経験の価値を共創している．結果として，修練を継続する過程で自利利他を実践することをベースにした豊かな人生観が育くまれ，ウェルビーイング形成ができる能力を身につけ，人生のアップリフティングチェンジが起こっている.すなわち人間形成がなされ，最高善「誠」が獲得され，潜在能力を発揮できる状態であるエウダイモニアが形成されている．

第六章　結論

6.1 結論とリサーチクエスチョンへの回答

誠道塾の道場は，修練によってエウダイモニアが獲得されているサービススケープである可能性が示唆された．これは，その場での価値共創のあり方を自分の生き方のモデルとして一体化し，その効果がエウダイモニアの獲得に繋がるアップリフティングチェンジとして人間形成に寄与していくことである．これは，一過性のポジティブな経験をすることではなく，自分の人生を生き抜く諦めない精神，また社会貢献に目を向けたり，利他的に振舞ったりする心を醸成していく能力を身に着けることである．すなわち，道場という場と修練をメディアとして，いつでもウェルビーイング状態を自らが創り出せる，持続可能な人間的成長を支援する能力を獲得できる可能性を示唆している．スポーツの文脈のような身体的活動を伴うサービス研究では競技性や商業性における優位性を論じるものが多い．さらに武道という対象もスポーツの一部として語られる場面が多く，必ずしも競技性を伴わない本来の武道が行われる場では，どのよ

うなサービス交換がなされ，価値共創が起こっているかはほとんど研究されていない．本論文では 40 年以上持続している空手の修練の場である道場をとり上げることによって，そのサービス活動から生まれる最高善であるウェルビーイング，すなわちエウダイモニアの獲得可能性について示唆することができた．

以上の結論により，以下にリサーチクエスチョンの回答を記す．

SRQ1: 武道修練におけるサービス交換の基盤は何であり，それはいかに持続されているのか？

創始者が体現しているオーセンティック・リーダーシップと，創始者が定めたフィロソフィー（この場合は誠道という概念）に基づく，賢明さを目指す実践能力・知識としての誠道のフロネシスが，修練システムに則った稽古における相互作用を通じて形成されるウェルビーイングの総体として，参加者としての修練者に伝承されていく．これにより，参加者は価値共創の在り方を自分の生き方と一体化させることを動機づけられ，ウェルビーイングを形成できる能力として道場の外でもそれを活用し，常に新たな目標に向かう原動力としている．これらがサービス交換の基盤となり，相互作用の誘因として，参加者間でフロネシスの形成が進み，道場におけるサービス交換が持続されうることが示唆された．

SRQ2:道場では参加者は相互作用からどのようなアウトカムを得ているか？

道場では参加者の相互作用により，ウェルビーイング形成としてのアウトカムを獲得している．ここには主観的ウェルビーイングの側面とエウダイモニック・ウェルビーイング，そして「誠」すなわち最高善であるエウダイモニアの側面がある．主観的ウェルビーイングの側面からは, 様々な人の絆から，自分を鼓舞し朗らかに生きる心の持ちようを学んだり，自分の方向性が正しいと感じられたりするようになった．ここではポジティブ思考のアウトカムの獲得が確認された．また，エウダイモニック・ウェルビーイングの側面からは，内発的動機付けを誘発する次のようなアウトカムが確認できる．自分でどうやったらできるようになるかを考えて行動したり，本当に大切なものを見失わないように練磨を続けたりしている．これらは，人生の目的を持つこと，そして自律性や探求心を示すアウトカムである．また，修練によって人生を豊かにすることができるという有能感を伴う確信や，共に人間的成長をはかりたいという強い心から，継続的な成長というアウトカムが確認される．さらに，他人から変わったと評価されるようになったり，応援してくれる人が増えたりという良い人間関係というアウトカムを得ている． エウダイモニアの側面からは，武道の道場を自らの社会的生活，すなわち道場での修練ではなく，空手から離れた日常生活，仕事，家族や人間関係に関わる諸活動等において自ら投影し，物理的な道場でない空間を道場と見立てて，社会的生活において他者に礼節をもって対

応したり，他者の成長のために貢献をしようとしたり，様々な困難においても自分自身を規律付けて，それを克服しようとする動機づけを図ろうとしている．これらは，レジリエンス，環境支配，強い志，自立心，そして人格形成に関わる深い経験価値という概念が融合した価値としてのアウトカムである．

SRQ3: 武道修練においてどのようなサービス交換が行われているのか？

武道修練の場である道場では一般的な指導者と生徒という上下関係に基づく関係性ではなく，それぞれが参加者として自分の目標達成のために，お互いに儀礼的行為を通じて敬意を示しながら切磋琢磨する対等な関係性に基づくサービス交換が行われている．これを SDL に照らして考えてみれば，技の習得カリキュラム（修練教程），試合や昇段審査，それを習得してゆく修練はオペランドリソースであり，価値共創のメディアである．道場では，指導者と生徒はそれぞれがサービス提供者であり，またサービス受容者でもあり，オペラントリソースとして共同で価値を創造している．サービス交換の対象は，人格形成を促進する知識や教えであり，それを実現するために道場の環境や制度の改良も新しい価値として共創されている．

MRQ：武道修練において参加者に対してウェルビーイングはいかに形成されるのか？

武道修練におけるウェルビーイングの形成は，修練によって価値共創されたウェルビーイングに繋がるアウトカム，その総和を自分の生き方のモデルとして一体化し，その効果が人格形成に寄与していくことである．これは，自分の人生を生き抜く諦めない精神，また社会貢献に目を向けたり，利他的に振舞ったりする心を醸成していく能力を身に着けることである．これはそれらが自分の使命感，信念となっていくプロセスにおいてアップリフティングチェンジが起こり，エウダイモニアを獲得，発動するウェルビーイング形成である．すなわち，道場という場と修練をメディアとして，いつでもウェルビーイング状態を自らが創り出せる，持続可能な人間的成長を支援する能力，すなわちエウダイモニアを獲得し，それを社会的生活の中で行使することが，ウェルビーイングの形成に繋がることが示唆された．

6.2 理論的含意

サービススケープ上でアクターが行う相互作用は，場所への意味付けと共に自分自身への認識を深め，更にそのサービススケープで共有されている制度を変化させる可能性を持っている(Rosenbaum, 2006)．そうしたアクターのダイナミクスは，価値共創プロセスの分析で重要な視点となる．そこでローゼンバウムのサービススケープの段階的認知理論(Rosenbaum, 2006)のレンズを援用した． サービススケープの段階的認知理論は，サービス交換が行われる物理的な場において参加者が相互作用の結果，認知を変化させていくことで，単なる機能的便益を充たすためのサービスの場から，参加者同士で感情的交流を可能にする家のような場にシフトし，サービススケープの存在意義が変化することを指摘した．本研究の事例分析により，相互作用を行うサービス交換の場が，参加者の自らのメンタルモデルに転写され，内面化され，マインドセットとして道場の外に持ち出されることで，日常生活にも変化が起こり，多様なウェルビーイングを自ら獲得できる能力が開発されるサービススケープに変化する可能性を見出した．サードプレイスからの発想から三段階の認知的定義を行ったこれまでのサービススケープは物理空間としてであったが， 道場での参加者の相互作用によって，フィロソフィー，修練システム，獲得したアウトカムを含んだ道場の総体がエウダイモニアというオペラントリソースとなり，サービススケープとして物理的な空間を超えたマインドセットに変化していると考えられる．言い換えれば，サービスを交換する場として，物理的な場所であるかどうかを問わない，遍在性のあるサービススケープの概念としての道場が浮かび上がったと考えられる．具体的にはマインドセットにまで昇華されたサービススケープである．これが参加者のエウダイモニアを獲得する能力として機能している．これを本論文ではエウダイモニック・サービススケープと呼び，サービススケープの認知段階を更に追加した．

また本研究は，サービス・ドミナント・ロジックでは十分に議論されてこなかったエウダイモニア，いわゆる幸福の獲得能力の形成について考えるものである．サービスエコシステムを通じたウェルビーイング形成のメカニズムとして，各アクターの相互作用と道場という場が持つ制度的規範がどのように関係しているのかが示唆された．これは，サービス・ドミナント・ロジックから派生したサービスエコシステム論において，制度的規範がそのサービススケープ特有のものではなく，道場という場を超えて個人の中に根付き，エウダイモニアを形成しているという新たな視点を追加している．

トランスフォーマティブ・サービス・リサーチの文脈では，本研究は，営利組織に対する研究が多い中で，非営利組織におけるウェルビーイング追求方策について追加考察するものである．サービス交換は経済的価値を創造するだけでなく，サービス交換の場で共創され，アクターが享受するウェルビーイングに関わるアウトプットは多様であるが，アクターが受け継いでいく

ことができるウェルビーイングをもたらす能力そのものがアウトプットになっている視点は，営利，非営利に関わらず組織や社会環境の発展，持続可能性に貢献できるものとして新たに追加できるものである．

6.3 実務的含意

武道の道場をサービス交換の場と捉えたとき，本稿で示唆した武道修練を通じたウェルビーイング形成のメカニズムは，新たな道場運営の構築または補強になる可能性がある．加えて，組織活動において，人間のウェルビーイングを向上させる機能がある可能性を提示した．

当該組織の中で，運営を拡大するという考え方は中心にはない．むしろ塾という小さな組織を維持したうえで活動自体を持続可能にしていくことが前提であった．このスケール化を中心的目的としないで持続的運営を実践する組織経営モデルは，営利でも非営利でもその持続的組織経営の視点のひとつとして検討することができるかもしれない．

近年，人々が社会貢献を通じて自ら成長する機会を創出することへの重要性が増している．ボランティア活動等への積極的参加により社会に価値を創造していくことで，組織，組織構成員，社会に成長とウェルビーイングを提供できる可能性がある．これには，ひとりひとりが，自発的に社会的課題に取り組む意識の醸成が大切であると考える．社会への新たな価値の提供を可能とするイノベーションを起こす人材育成のツールとして，本研究で考察してきたモデルが貢献できる期待がある．とりわけ，サービススケープにおいて良質な経験をしたことでウェルビーイングを獲得した結果，他者へのまなざしを成熟させ利他的な行動に結実させたメカニズムを本論文で示した点がこれと関連する．エウダイモニア形成を自律的に可能にする人材育成を検討する点で貢献可能なモデルであると考える．

6.4 将来研究への示唆

今回の研究は，誠道塾という一つの空手指導，普及の組織を取り上げ，そこで起こっているサービス交換について掘り下げてみた．武道には多くの種類があり，組織毎，道場毎に，理念に則って活動を行っている．今回明らかになったメカニズムを一つの類型として，他の武道と比較してみることで，また新たな視点，違ったサービス交換の事例が現れる可能性もあり，武道の世界にも，サービス研究の世界にも貢献できる可能性がある．また，スポーツや武道の文脈を始めとして，他の分野においても，持続可能な人間的成長や人格形成あるいは非商業的な活動においてさらなる研究が積み重なっていけば，エウダイモニアの獲得を目的としたサービス

研究はさらに深まると考える．

道場における修練は，メンタルヘルスの改善とも関連しうると考える．実際に，聞き取りからは研究対象組織のニューヨークの本部において，DV で傷ついた人たちへのケアプログラムを始めとして人間の心を回復するための取り組みが行われている．このような中，メンタルヘルスの研究の中で，道場での修練がどのような効果をもたらすのかは，今後の重要な研究課題の一つになると考える．

本研究の発見事項は学校教育とも関連性を見出すことが可能だ．本研究のモデルを学校教育の中で行うためには何が必要か，学校教育だけでは難しい補完的な人格教育としての課外活動的としての位置づけが妥当なのか等，学校教育研究の文脈においても，今後重要な課題の一つになり得ると考える．

カリスマ性の継承は，事業継承についての議論として，重要なテーマである．本研究で提案したモデルの中にはカリスマリーダーの存在が関与していることを見出した．組織活動の持続性の観点ではそうしたリーダーのカリスマ性を如何に継承できるかが問われていくことになるであろう．

本論文で検討してきたウェルビーイング形成モデルは，参加者とサービス構築者，提供者の間でそれぞれの成長につながる可能性を示している．これまでサードプレイスの概念をもとに，物理的な場の運営方針や環境を変革してきた事例は多くみられる．しかし，本論文で示してきたように，サードプレイスは，物理的な場所への認知から，参加者の内面に場の相互作用のあり方そのものを吸収し，日常生活において道場という場での相互作用を転写することで自らの生き方の変革につながる機会とも考えられる．この，サードプレイスにおける様々な活動で参加者が自らウェルビーイングを獲得する能力を形成することが可能であるという機会を活用することで，物理的なサードプレイス留まらない様々な空間で実践できる可能性がある．身体性を伴う経験が，フィロソフィーを個々人が深化させることを動機づけると仮定した場合，そういった経験は仮想空間でも成立するのか．身体性を中心に置いた物理空間と仮想空間の比較によって，この問いを深耕していくことが可能になろう．

また，これはエンパワメントの文脈にも通じ，本論文では，修練を通じて，参加者はそれぞれが自分自身に対しても，組織に対しても自立してゆく意識や態度を身に着けてゆくと示唆されたが，いわゆる組織や社会における権限移譲との対比は研究課題になり得ると考える．さらに，禅をはじめ，武道とスピリチュアルな要素，あるいは宗教的な意図を含む修行という行為との関連について，その効果的な点あるいは懸念点につき目を向けていくことは重要テーマと考えられる．今後はこの点についてもさらなる研究が必要と考える．

6.5 小括

本論文において提示することができたウェルビーイング形成モデルでは，武道修練を通じて，持続可能な人間的成長を支援する能力を獲得し，エウダイモニアを達成する可能性が示唆された．理論的背景における，サービススケープの段階的認知理論，サービス・ドミナント・ロジック，トランスフォーマティブサービスリサーチに対して，新たな知見を加えられたと考える．そして，実社会における応用，適用の可能性も示唆できた．

引用文献

Ahamed, F., & Hassan, A. (2011). Authentic Leadership, Trust and Work Engagement. *International Journal of Human and Social Sciences* , *6*(3). https://www.researchgate.net/publication/300040844

Akaka, M. A., & Vargo, S. L. (2015). Extending the context of service: from encounters to ecosystems. *Journal of Services Marketing*, *29*(6–7), 453–462. https://doi.org/10.1108/JSM-03-2015-0126

Al Halbusi, H., Estevez, P. J., Eleen, T., Ramayah, T., & Hossain Uzir, M. U. (2020). The roles of the physical environment, social servicescape, co-created value, and customer satisfaction in determining tourists' citizenship behavior: Malaysian cultural and creative industries. *Sustainability (Switzerland)*, *12*(8), 1–23. https://doi.org/10.3390/SU12083229

Anderson, L., & Ostrom, A. L. (2015). Transformative Service Research: Advancing Our Knowledge About Service and Well-Being. *Journal of Service Research*, *18*(3), 243–249. https://doi.org/10.1177/1094670515591316

Anderson, L., Ostrom, A. L., Corus, C., Fisk, R. P., Gallan, A. S., Giraldo, M., Mende, M., Mulder, M., Rayburn, S. W., Rosenbaum, M. S., Shirahada, K., & Williams, J. D. (2013). Transformative service research: An agenda for the future. *Journal of Business Research*, *66*(8), 1203–1210. https://doi.org/10.1016/j.jbusres.2012.08.013

Avolio, B. J., & Gardner, W. L. (2005). Authentic leadership development: Getting to the root of positive forms of leadership. *Leadership Quarterly*, *16*(3), 315–338. https://doi.org/10.1016/j.leaqua.2005.03.001

Baker, J., Grewal, D., & Parasuraman, A. (1994). The influence of store environment on quality inferences and store image. *Journal of the Academy of Marketing Science: Official Publication of the Academy of Marketing Science*, *22*(4), 328–339. https://doi.org/10.1177/0092070394224002

Ballantyne, D., & Nilsson, E. (2017). All that is solid melts into air: the servicescape in digital service space. *Journal of Services Marketing*, *31*(3), 226–235. https://doi.org/10.1108/JSM-03-2016-0115

Barczynski, B., & Maciej Kalina, R. (2009). Budo-a unique keyword of life sciences. *Archives of Budo*, *5*, 117–119. https://www.researchgate.net/publication/298895574

Bardi, A., & Goodwin, R. (2011). The dual route to value change: Individual processes and cultural moderators. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *42*(2), 271–287. https://doi.org/10.1177/0022022110396916

Baron, S., Patterson, A., Maull, R., & Warnaby, G. (2018). Feed People First: A Service Ecosystem Perspective on Innovative Food Waste Reduction. *Journal of Service Research*,

21(1), 135–150. https://doi.org/10.1177/1094670517738372

Bauer, J. J., McAdams, D. P., & Pals, J. L. (2008). Narrative identity and eudaimonic well-being. *Journal of Happiness Studies*, *9*(1), 81–104. https://doi.org/10.1007/s10902-006-9021-6

Belk, R. (1992). Attachment to Possessions. *Place Attachment, January 1992*. https://doi.org/10.1007/978-1-4684-8753-4

Bitner, M. J., Crosby, L., Brown, S., Walker, B., & Kleine, S. (1992). Servicescapes: The Impact of Physical Surroundings on Customers and Employees. *The Journal of Marketing*, *56*(2), 57–71.

Bora, B., Bilgihan, A., Haobin, B., Buonincontri, P., & Okumus, F. (2018). The impact of servicescape on hedonic value and behavioral intentions : The importance of previous experience. *International Journal of Hospitality Management*, *72*(April 2017), 10–20. https://doi.org/10.1016/j.ijhm.2017.12.007

Braithwaite, V. A., & Law, H. G. (1985). Structure of Human Values. Testing the Adequacy of the Rokeach Value Survey. *Journal of Personality and Social Psychology*, *49*(1), 250–263. https://doi.org/10.1037/0022-3514.49.1.250

Bratman, M. E. (1993). Shared Intention. *Ethics*, *104*(1), 97–113. https://about.jstor.org/terms

Brown, K. W., & Ryan, R. M. (2003). The Benefits of Being Present: Mindfulness and Its Role in Psychological Well-Being. *Journal of Personality and Social Psychology*, *84*(4), 822–848. https://doi.org/10.1037/0022-3514.84.4.822

Bu, B., Haijun, H., Yong, L., Chaohui, Z., Xiaoyuan, Y., & Singh, M. F. (2010). Effects of martial arts on health status: A systematic review. *Journal of Evidence-Based Medicine*, *3*(4), 205–219. https://doi.org/10.1111/j.1756-5391.2010.01107.x

Chandler, J. D., & Vargo, S. L. (2011). Contextualization and value-in-context: How context frames exchange. *Marketing Theory*, *11*(1), 35–49. https://doi.org/10.1177/1470593110393713

Chebat, J. C., Chebat, C. G., & Vaillant, D. (2001). Environmental background music and in-store selling. *Journal of Business Research*, *54*(2), 115–123. https://doi.org/10.1016/S0148-2963(99)00089-2

Christie, A. M., Atkins, P. W. B., & Donald, J. N. (2017). The Meaning and Doing of Mindfulness: The Role of Values in the Link Between Mindfulness and Well-Being. *Mindfulness*, *8*(2), 368–378. https://doi.org/10.1007/s12671-016-0606-9

Corbin, J. M., & Strauss, A. (1990). Grounded theory research: Procedures, canons, and evaluative criteria. *Qualitative Sociology*, *13*(1), 3–21. https://doi.org/10.1007/BF00988593

Corley, K. G., & Gioiia, D. A. (2011). Building Theory About Theory Building: What Constitutes A Theoretical Contribution? *Academy of Manaagement Review*, *36*(1), 12–32.

Cova, B. (1997). Community and consumption :Towards a definition of the "linking value" of product or s ervices. *European Journal of Marketing*, *31*(3/4), 297–316.

Creswell, J., & Poth, C. (2016). Second Edition QUALITATIVE INQUIRY& RESEARCH DESIGN Choosing Among Five Approaches. In *SAGE Publications* (Vol. 3).

Cuba, L., & Hummon, D. M. (1993). A Place to Call Home: Identification with Dwelling, Community, and Region. *The Sociological Quarterly*, *34*(1), 111–131. https://doi.org/10.2307/3471054

Cynarski, W. J., & Niewczas, M. (2019). Attitude towards karate among the members of the Polish Cadet representation - Diagnostic survey. *Ido Movement for Culture*, *19*(2), 29–35. https://doi.org/10.14589/ido.19.2.5

Day, D. V. (2000). LEADERSHIP DEVELOPMENT: A REVIEW IN CONTEXT. *The Leadership Quarterly*, *11*(4), 581–613.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2008). Hedonia, eudaimonia, and well-being: An introduction. *Journal of Happiness Studies*, *9*(1), 1–11. https://doi.org/10.1007/s10902-006-9018-1

Dickson, T. J., Darcy, S., Johns, R., & Pentifallo, C. (2016). Inclusive by design: transformative services and sport-event accessibility. *Service Industries Journal*, *36*(11–12), 532–555. https://doi.org/10.1080/02642069.2016.1255728

Diener, E., Oishi, S., & Lucas, R. E. (2003). Personality, Culture, and Subjective Well-being: Emotional and Cognitive Evaluations of Life. *Annual Review of Psychology*, *54*(December 2015), 403–425. https://doi.org/10.1146/annurev.psych.54.101601.145056

Dodd, S., & Brown, D. (2016). Kata-The true essence of Budo martial arts? *Revista de Artes Marciales Asiáticas*, *11*(1), 32–47. https://doi.org/10.18002/rama.v11i1

Downward, P., & Rasciute, S. (2011). Does sport make you happy? An analysis of the well-being derived from sports participation. *International Review of Applied Economics*, *25*(3), 331–348. https://doi.org/10.1080/02692171.2010.511168

Drath, W. H., & Palus, C. J. (1994). MAKING COMMON SENSE Leadership as Meaning-Making in a Community of Practice. *CCL Report No. 156*, *156*.

Dubé, L., & Morin, S. (2001). Background music pleasure and store evaluation: Intensity effects and psychological mechanisms. *Journal of Business Research*, *54*(2), 107–113. https://doi.org/10.1016/S0148-2963(99)00092-2

Eisner, E. W. (2002). From episteme to phronesis to artistry in the study and improvement of teaching. *Teaching and Teacher Education*, *18*(4), 375–385. https://doi.org/10.1016/S0742-051X(02)00004-5

Ekinci, Y., Sirakaya-Turk, E., & Preciado, S. (2013). Symbolic consumption of tourism destination brands. *Journal of Business Research*, *66*(6), 711–718. https://doi.org/10.1016/j.jbusres.2011.09.008

Ekman, P., Raggio, R. D., & Thompson, S. M. (2016). Service network value co-creation: Defining the roles of the generic actor. *Industrial Marketing Management*, *56*, 51–62. https://doi.org/10.1016/j.indmarman.2016.03.002

Elliott, R. (1997). Existential consumption and irrational desire. *European Journal of Marketing*, *31*(3/4), 285–296.

Farcane, N., Deliu, D., & Bureană, E. (2019). A corporate case study: The application of Rokeach's value system to corporate social responsibility (CSR). *Sustainability (Switzerland)*, *11*(23). https://doi.org/10.3390/su11236612

Fleischman, D., Sotiriadou, P., Mulcahy, R., Kean, B., & Cury, R. L. (2021). The impact of "capitalization" social support services on student-athlete well-being. *Journal of Services Marketing*, *November*. https://doi.org/10.1108/JSM-12-2020-0520

Fujita, S., Vaughan, C., & Vargo, S. (2018). Service Ecosystem Emergence from Primitive Actors in Service Dominant Logic: An Exploratory Simulation Study. *Proceedings of the 51st Hawaii International Conference on System Sciences*. https://doi.org/10.24251/HICSS.2018.200

Fukuda, D. H., Stout, J. R., Burris, P. M., & Fukuda, R. S. (2011). Judo for children and adolescents: Benefits of combat sports. *Strength and Conditioning Journal*, *33*(6), 60–63. https://doi.org/10.1519/SSC.0b013e3182389e74

Gardner, W. L., Avolio, B. J., Luthans, F., May, D. R., & Walumbwa, F. (2005). "Can you see the real me?" A self-based model of authentic leader and follower development. *Leadership Quarterly*, *16*(3), 343–372. https://doi.org/10.1016/j.leaqua.2005.03.003

Gehman, J., Glaser, V. L., Eisenhardt, K. M., Gioia, D., Langley, A., & Corley, K. G. (2018). Finding Theory–Method Fit: A Comparison of Three Qualitative Approaches to Theory Building. *Journal of Management Inquiry*, *27*(3), 284–300. https://doi.org/10.1177/1056492617706029

Gill, D. L., Hammond, E. J., Reifsteck, C. M., Williams, R. A., Adams, M. M., Lange, E. H., Becofsky, K., Rodriguez, E., & Shang, Y.-T. (2013). Physical activity and quality of life. *Journal of Preventive Medicine & Public Health*, *46*. https://doi.org/10.1016/S1957-2557(09)70097-5

Gioia, D. A., & Chittipeddi, K. (1991). Sensemaking and sensegiving in strategic change initiation. *Strategic Management Journal*, *12*(6), 433–448. https://doi.org/10.1002/smj.4250120604

Gioia, D. A., Corley, K. G., & Hamilton, A. L. (2013). Seeking Qualitative Rigor in Inductive Research: Notes on the Gioia Methodology. *Organizational Research Methods*, *16*(1), 15–31. https://doi.org/10.1177/1094428112452151

Gratton, C. (2004). Sport , Health and Economic Benefit In Sport England. In *DRIVING UP*

PARTICIPATION: THE CHALLENGE FOR SPORT. Sport England.

Greco, G., Fischetti, F., Cataldi, S., & Latino, F. (2019). Effects of Shotokan Karate on resilience to bullying in adolescents. *Journal of Human Sport and Exercise*, *14*(Proc4), S896–S905. https://doi.org/10.14198/jhse.2019.14.Proc4.52

Ho, B. Q., & Shirahada, K. (2021). Actor transformation in service: a process model for vulnerable consumers. *Journal of Service Theory and Practice*, *31*(4), 534–562. https://doi.org/10.1108/JSTP-04-2020-0083

Huppert, F. A., Marks, N., Clark, A., Siegrist, J., Stutzer, A., Vittersø, J., & Wahrendorf, M. (2009). Measuring Well-being across Europe: Description of the ESS Well-being Module and preliminary findings. *Social Indicators Research*, *91*(3), 301–315. https://doi.org/10.1007/s11205-008-9346-0

Ilies, R., Morgeson, F. P., & Nahrgang, J. D. (2005). Authentic leadership and eudaemonic well-being: Understanding leader–follower outcomes. *The Leadership Quarterly*, *16*(3), 373–394. https://doi.org/10.1016/j.leaqua.2005.03.002

Inoue, Y., Sato, M., & Filo, K. (2020). Transformative sport service research: Linking sport services with well-being. *Journal of Sport Management*, *34*(4), 285–290. https://doi.org/10.1123/JSM.2020-0102

Irwin, T. (1999). *Aristotle Nicomachean Ethics* (2nd ed.). Hackett Publishing Company, Inc.

Kauka, E. O. (2018). A Philosophical Examination of Karate's Plausibility in Moral Education. *International Journal of Social Science and Humanities Research*, *6*(1), 77–86. www.researchpublish.com

Keyes, C. L. M. (2006). Mental health in adolescence: Is America's youth flourishing? *American Journal of Orthopsychiatry*, *76*(3), 395–402. https://doi.org/10.1037/0002-9432.76.3.395

Kjellberg, H., Nenonen, S., & Thomé, K. M. (2018). Analyzing Service Processes at the Micro Level: Actors and Practices. In *THE SAGEHANDBOOK OF SERVICE-DOMINANT LOGIC*.

Kleine, S., & Baker, S. (2004). An Integrative Review of Material Possession Attachment. *Academy of Marketing Science Review*, *1*(1), 1–39.

Koskela-Huotari, K., & Vargo, S. L. (2016). Institutions as resource context. *Journal of Service Theory and Practice*, *26*(2), 163–178. https://doi.org/10.1108/JSTP-09-2014-0190

Kostorz, K., Gniezinska, A., & Nawrocka, M. (2017). The hierarchy of values vs. self-esteem of persons practising martial arts and combat sports. *Ido Movement for Culture*, *17*(1), 15–22. https://doi.org/10.14589/ido.17.1.3

Kouali, D., Hall, C., & Pope, P. (2020). Measuring eudaimonic wellbeing in sport: Validation of the eudaimonic wellbeing in sport scale. *International Journal of Wellbeing*, *10*(1), 93–106. https://doi.org/10.5502/ijw.v10i1.776

Kraut, R. (2015). Aristotle on well-being. In G. Fletcher (Ed.), *The Routledge Handbook Of Philosophy Of Well-Being* (pp. 20–28). https://doi.org/10.4324/9781315682266.ch2

Kuppelwieser, V. G., & Finsterwalder, J. (2016). Transformative service research and service dominant logic: Quo Vaditis? *Journal of Retailing and Consumer Services*, *28*, 91–98. https://doi.org/10.1016/j.jretconser.2015.08.011

Lakes, K. D., & Hoyt, W. T. (2004). Promoting self-regulation through school-based martial arts training. *Journal of Applied Developmental Psychology*, *25*(3), 283–302. https://doi.org/10.1016/j.appdev.2004.04.002

Lee, M. J., Whitehead, J., & Ntoumanis, N. (2008). Relationships Among Values , Achievement Orientations , and Attitudes in Youth Sport. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, *30*, 588–610.

Line, N. D., Hanks, L., & Kim, W. G. (2018). An Expanded Servicescape Framework as the Driver of Place Attachment and Word of Mouth. *Journal of Hospitality and Tourism Research*, *42*(3), 476–499. https://doi.org/10.1177/1096348015597035

Lundqvist, C. (2011). Well-being in competitive sports-The feel-good factor? A review of conceptual considerations of well-being. *International Review of Sport and Exercise Psychology*, *4*(2), 109–127. https://doi.org/10.1080/1750984X.2011.584067

Lusch, R. F., & Nambisan, S. (2015). Service innovation: A service-dominant logic perspective. *MIS Quarterly: Management Information Systems*, *39*(1), 155–175. https://doi.org/10.25300/MISQ/2015/39.1.07

Luthans, F., Luthans, K. W., & Luthans, B. C. (2004). Positive psychological capital: Beyond human and social capital. *Business Horizons*, *47*(1), 45–50. https://doi.org/10.1016/j.bushor.2003.11.007

Macarie, I.-C., & Roberts, R. (2010). Martial Arts and Mental Health. *Contemporary Psychotherapy*, *2*(1). https://doi.org/10.6084/m9.figshare.12363008

Macey, W. H., & Schneider, B. (2008). The Meaning of Employee Engagement. *Industrial and Organizational Psychology*, *1*, 3–30. http://web.b.ebscohost.com.esc-web.lib.cbs.dk/ehost/pdfviewer/pdfviewer?sid=93c9a7d9-10bb-4006-9258-ae22a70ef662@sessionmgr110&vid=1&hid=123

Milligan, M. J. (1998). Interactional Past And Potential: The Social Construction Of Place Attachment. *Symbolic Interaction*, *21*(1), 1–33. https://doi.org/10.1525/si.1998.21.1.1

Mirabito, A. M., & Berry, L. L. (2015). You Say You Want a Revolution? Drawing on Social Movement Theory to Motivate Transformative Change. *Journal of Service Research*, *18*(3), 336–350. https://doi.org/10.1177/1094670515582037

Mitchell, S. L., & Clark, M. (2021). Volunteer choice of nonprofit organisation: an integrated framework. *European Journal of Marketing*, *55*(1), 63–94. https://doi.org/10.1108/EJM-

05-2019-0427

Nag, R., & Gioia, D. A. (2012). From common to uncommon knowledge: Foundations of firm-specific use of knowledge as a resource. *Academy of Management Journal*, *55*(2), 421–457. https://doi.org/10.5465/amj.2008.0352

Nakamura, T. (1992). *ONE DAY ONE LIFETIME*. World Seido Karate Organization.

Nasr, L., Burton, J., & Gruber, T. (2015). When good news is bad news: the negative impact of positive customer feedback on front-line employee well-being. *Journal of Services Marketing*, *29*(6/7), 599–612. https://doi.org/10.1108/JSM-01-2015-0052

Nasr, L., Burton, J., Gruber, T., & Kitshoff, J. (2014). Exploring the impact of customer feedback on the well-being of service entities ATSR perspective. *Journal of Service Management*, *25*(4), 531–555. https://doi.org/10.1108/JOSM-01-2014-0022

OECD. (2013). OECD Guidelines on Measuring Subjective Well-being. In *OECD Guidelines on Measuring Subjective Well-being*. http://www.oecd-ilibrary.org.proxy1-bib.sdu.dk:2048/docserver/download/3013031e.pdf?expires=1374408063&id=id&accname=guest&checksum=410D90E44144222FE92B5736C489F74A

Oishi, S., & Diener, E. (2001). Goals, Culture, and Subjective Well-Being. In *Personality and Social Psychology Bulletin* (Vol. 27, Issue 12). https://doi.org/10.1177/01461672012712004

Oldenburg, R. (1991). *The great good place : cafés, coffee shops, bookstores, bars, hair salons, and other hangouts at the heart of a community* (1st ed.). New York,Marlowe.

Pandey, A., Gupta, R. K., & Arora, A. P. (2009). Spiritual climate of business organizations and its impact on customers' experience. *Journal of Business Ethics*, *88*(2), 313–332. https://doi.org/10.1007/s10551-008-9965-z

Pandey, J., Hassan, Y., Pandey, J., Pereira, V., Behl, A., Fischer, B., & Laker, B. (2022). Leader Signaled Knowledge Hiding and Erosion of Cocreated Value: Microfoundational Evidence From the Test Preparation Industry. *IEEE Transactions on Engineering Management*, 1–21. https://doi.org/10.1109/TEM.2022.3149005

Pelletier, M. J., & Collier, J. E. (2018). Experiential Purchase Quality: Exploring the Dimensions and Outcomes of Highly Memorable Experiential Purchases. *Journal of Service Research*, *21*(4), 456–473. https://doi.org/10.1177/1094670518770042

Pizam, A., & Tasci, A. D. A. (2019). Experienscape: expanding the concept of servicescape with a multi-stakeholder and multi-disciplinary approach. *International Journal of Hospitality Management*, *76*(June 2018), 25–37. https://doi.org/10.1016/j.ijhm.2018.06.010

Rayburn, S. W., & Voss, K. E. (2013). A model of consumer's retail atmosphere perceptions. *Journal of Retailing and Consumer Services*, *20*(4), 400–407. https://doi.org/10.1016/j.jretconser.2013.01.012

Rokeach, M. (1973). *The Nature of Human Values*. Free Press. https://doi.org/10.2307/589601

Rosenbaum, M. S. (2006). Exploring the social supportive role of third places in consumers' lives. *Journal of Service Research*, *9*(1), 59–72. https://doi.org/10.1177/1094670506289530

Rosenbaum, M. S., Friman, M., Ramirez, G. C., & Otterbring, T. (2020). Therapeutic servicescapes: Restorative and relational resources in service settings. *Journal of Retailing and Consumer Services*, *55*(March 2019). https://doi.org/10.1016/j.jretconser.2020.102078

Rosenbaum, M. S., Kelleher, C., Friman, M., Kristensson, P., & Scherer, A. (2017). Re-placing place in marketing: A resource-exchange place perspective. *Journal of Business Research*, *79*, 281–289. https://doi.org/10.1016/j.jbusres.2017.01.009

Rosenbaum, M. S., & Massiah, C. (2011). An expanded servicescape perspective. *Journal of Service Management*, *22*(4), 471–490. https://doi.org/10.1108/09564231111155088

Rosenbaum, M. S., Ramirez, G. C., & Camino, J. R. (2018). A dose of nature and shopping: The restorative potential of biophilic lifestyle center designs. *Journal of Retailing and Consumer Services*, *40*(February 2017), 66–73. https://doi.org/10.1016/j.jretconser.2017.08.018

Russell, J. A., & Mehrabian, A. (1977). Evidence for a three-factor theory of emotions. *Journal of Research in Personality*, *11*(3), 273–294. https://doi.org/10.1016/0092-6566(77)90037-X

Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, *55*(1), 68–78. https://doi.org/10.1037/0003-066X.55.1.68

Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2001). On happiness and human potentials: A review of research on hedonic and eudaimonic well-being. *Annual Review of Psychology*, *52*, 141–166. https://doi.org/10.1146/annurev.psych.52.1.141

Ryff, C. D. (1989). Happiness Is Everything, or Is It? Explorations on the Meaning of Psychological Well-Being. *Journal of Personality and Social Psychology*, *57*(6), 1069–1081.

Ryff, C. D., & Singer, B. (1996). Psychological well-being: Meaning, measurement, and implications for psychotherapy research. *Psychotherapy and Psychosomatics*, *65*(1), 14–23. https://doi.org/10.1159/000289026

Ryff, C. D., & Singer, B. H. (2008). Know thyself and become what you are: A eudaimonic approach to psychological well-being. *Journal of Happiness Studies*, *9*(1), 13–39. https://doi.org/10.1007/s10902-006-9019-0

Salvador, A. (2005). Coping with competitive situations in humans. *Neuroscience and Biobehavioral Reviews*, *29*(1 SPEC. ISS.), 195–205. https://doi.org/10.1016/j.neubiorev.2004.07.004

Sasaki, T. (2006). The meaning and role of budo (the martial arts) in school education in Japan.

Archives of Budo, *2*, 11–14. http://www.archbudo.com/get_pdf.php?IDMAN=9684.pdf

Schwartz, S. H., & Bilsky, W. (1987). Toward A Universal Psychological Structure of Human Values. *Journal of Personality and Social Psychology*, *53*(3), 550–562. https://doi.org/10.1037/0022-3514.53.3.550

Seligman, M. E., & Csikszentmihalyi, M. (2000). Positive psychology. An introduction. *The American Psychologist*, *55*(1), 5–14. https://doi.org/10.1037/0003-066X.55.1.5

Seligman, M. E. P. (2002). Positive Psychology, Positive Prevention, and Positive Therapy. *Handbook of Positive Psychology*, *2*(2002), 3–12.

Sen, A. (1999). *Development as Freedom*. Oxford University Press (OUP).

Sharma, P., Kong, T. T. C., & Kingshott, R. P. J. (2016). Internal service quality as a driver of employee satisfaction, commitment and performance. *Journal of Service Management*, *27*(5), 773–797. https://doi.org/10.1108/JOSM-10-2015-0294

Storbacka, K., & Nenonen, S. (2011). Scripting markets: From value propositions to market propositions. *Industrial Marketing Management*, *40*(2), 255–266. https://doi.org/10.1016/j.indmarman.2010.06.038

Taillard, M., Peters, L. D., Pels, J., & Mele, C. (2016). The role of shared intentions in the emergence of service ecosystems. *Journal of Business Research*, *69*(8), 2972–2980. https://doi.org/10.1016/j.jbusres.2016.02.030

Tikkanen, H. (2020). Characterizing well-being capabilities in services. *Journal of Services Marketing*, *34*(6), 785–795. https://doi.org/10.1108/JSM-11-2019-0453

Trussell, D. E. (2020). Building inclusive communities in youth sport for lesbian-parented families. *Journal of Sport Management*, *34*(4), 367–377. https://doi.org/10.1123/JSM.2019-0395

Vargo, S. L., & Lusch, R. F. (2004). Evolving to a New Dominant Logic for Marketing. In *Journal of Marketing* (Vol. 68).

Vargo, S. L., & Lusch, R. F. (2008). Service-dominant logic: Continuing the evolution. *Journal of the Academy of Marketing Science*, *36*(1), 1–10. https://doi.org/10.1007/s11747-007-0069-6

Vargo, S. L., & Lusch, R. F. (2011). It's all B2B...and beyond: Toward a systems perspective of the market. *Industrial Marketing Management*, *40*(2), 181–187. https://doi.org/10.1016/j.indmarman.2010.06.026

Vargo, S. L., & Lusch, R. F. (2016). Institutions and axioms: an extension and update of service-dominant logic. *Journal of the Academy of Marketing Science*, *44*(1), 5–23. https://doi.org/10.1007/s11747-015-0456-3

Vargo, S. L., Lusch, R. F., Smith, R. H., Hunt, S., Laczniak, G., Malter, A., Morgan, F., & O'brien, M. (2004). Evolving to a New Dominant Logic for Marketing. *Journal of*

Marketing, *68*, 1–17.

Vinet, L., & Zhedanov, A. (2010). A “missing” family of classical orthogonal polynomials. *Journal of Sport Management*, *34*(4), 1–13. https://doi.org/10.1088/1751-8113/44/8/085201

Vink, J., Koskela-Huotari, K., Tronvoll, B., Edvardsson, B., & Wetter-Edman, K. (2021). Service Ecosystem Design: Propositions, Process Model, and Future Research Agenda. *Journal of Service Research*, *24*(2), 168–186. https://doi.org/10.1177/1094670520952537

Vuillemin, A., Boini, S., Bertrais, S., Tessier, S., Oppert, J.-M., Hercberg, S., Guillemin, F., & Brianc¸on, S. (2005). Leisure time physical activity and health-related quality of life. *Preventive Medicine*, *41*, 562–569. https://doi.org/10.1007/978-0-387-78665-0

Waterman, A. S. (1990). Personal Expressiveness: Philosophical and Psychological Foundations. *The Journal of Mind and Behavior*, *11*(1), 47–74.

Waterman, A. S. (1993). Two Conceptions of Happiness: Contrasts of Personal Expressiveness (Eudaimonia) and Hedonic Enjoyment. *Journal of Personality and Social Psychology*, *64*(4), 678–691. https://doi.org/10.1037/0022-3514.64.4.678

Wattanasuwan, K. (2005). The Self and Sysbolic consumption. In *Journal of American Academy of Business* (Vol. 6, Issue 1, pp. 179–184).

Wheatley, D., & Bickerton, C. (2017). Subjective well-being and engagement in arts, culture and sport. *Journal of Cultural Economics*, *41*(1), 23–45. https://doi.org/10.1007/s10824-016-9270-0

Williams, A. (2002). Changing geographies of care: employing the concept of therapeutic landscapes as a framework in examining home space. *Social Science & Medicine*, *55*, 141–154.

Woodruffe-Burton, H., & Wakenshaw, S. (2011). Revisiting experiential values of shopping: Consumers’ self and identity. *Marketing Intelligence and Planning*, *29*(1), 69–85. https://doi.org/10.1108/02634501111102760

Wymer, W. W., & Samu, S. (2002). Volunteer Service as Symbolic Consumption: Gender and Occupational Differences in Volunteering. *Journal of Marketing Management*, *18*(9–10), 971–989. https://doi.org/10.1362/0267257012930358

インローバート K., & 近藤公彦訳. (2022). *『新装版 ケース・スタディの方法』*. 千倉書房.

ヘリゲルオイゲン. (1979). *『弓と禅』*. 福村出版.

中村忠. (1988). *『人間空手』*（1st ed.). 主婦の友社.

中村忠. (2000). *『誠道塾 空手教本』*（1st ed.). 主婦の友社.

中村忠. (2002, August). 人間空手. *『HOYU PROMENADE 第15号』*. 駒場東邦中学校・高等学校同窓会 邦友会.

堀田彰. (1975). *『アリストテレス 人と思想』*（第８刷). 明治書院.

大森曹玄. (1974). *『剣と禅』*（２). 春秋社.

大森曹玄. (1975). *『参禅入門 増補版』*（増補第四刷). 春秋社.

大滝忠夫. (1972). *『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』*. 新人物往来社.

山口周. (2017). *『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか？～経営における「アート」と「サイエンス」』*. 光文社.

岡部光明. (2019). サービスに重点を置く社会観（SDL）：その特徴，そして社会科学を統合させる可能性. 明治学院大学『国際学研究』, *55*, 31–46.

庄司真人. (2017). 地域の価値共創 : サービス-エコシステムの観点から. *Society for Serviceology.*, *4*(3), 18–23.

日和悟. (2018). マインドフルネスと ウェルビーイング. 日本バーチャルリアリティ学会誌, *23*(1), 39–43.

朴一功. (2002). *『アリストテレス ニコマコス倫理学』*（Issue 1）. 京都大学学術出版会.

横田宜憲. (2021, April). 「武道ツーリズムの輪を拡げよう」最終回 武道ツーリズムのあゆみとこれから. 月刊 武道 日本武道館, *652*, 116–120.

永田靖. (2011). 日本におけるスポーツ経営の特殊性. 広島経済大学経済研究論集, *33*(4), 89–99.

池田諭. (1976). *『沢庵 不動智神妙録』*（9th ed.). 徳間書店.

福島慶道. (1998). *『無心のさとり』*（第二刷). 春秋社.

笠井哲. (2010). 沢庵「不動智」における「剣禅一如」 思想の諸相. 印度學仏教學研究, *59*(1), 150–156.

菅豊彦. (2007). アリストテレスのエウダイモニアについて. 九州大学哲学会 哲学論文集, *43*, 21–39. https://doi.org/https://doi.org/10.15017/1448742

赤塚忠. (1976). 「中庸」. In *新釈漢文大系 大学 中庸*（17th ed., Vol. 2). 明治書院.

野中郁次郎. (2007). イノベーションの本質 ―知識創造のリーダーシップ―. 学術の動向, *12*(5), 60–69. https://doi.org/10.5363/tits.12.5_60

野中郁次郎, 廣瀬文乃, & 平田透. (2014). 『実践 ソーシャルイノベーション 知を価値に変えたコミュニティ・企業・NPO』. In *千倉書房*（1st ed., Issue 1). 千倉書房.

野中郁次郎, 遠山亮子, & 平田透. (2010). *『流れを経営する 持続的イノベーション企業の動態理論』*. 東洋経済新聞社.

新村出編. (2018). *『広辞苑 第七版』*. 岩波書店

閲覧 URL

Seido Karate
https://seido.com/（2022 年 11 月 4 日閲覧）
全日本剣道連盟
https://www.kendo.or.jp/knowledge/kendo-concept/（2022 年 11 月 4 日閲覧）
全日本柔道連盟
https://www.judo.or.jp/（2022 年 11 月 4 日閲覧）
講道館
http://kodokanjudoinstitute.org/doctrine/purpose/（2022 年 11 月 4 日閲覧）
全日本弓道連盟
https://www.kyudo.jp/howto/（2022 年 11 月 4 日閲覧）
全日本合気道連盟
https://jafaikido.jp/aikido（2022 年 11 月 4 日閲覧）
全日本空手道連盟
https://www.jkf.ne.jp/（2022 年 11 月 4 日閲覧）
財団法人全日本空手道連盟空手道憲章
https://www.jkf.ne.jp/kensho（2022 年 11 月 4 日閲覧）
日本 WHO 協会仮訳
https://japan-who.or.jp/about/who-what/charter/（2022 年 11 月 4 日閲覧）
Cambridge Dictionary
https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/uplifting（2022 年 12 月 22 日閲覧）
第 3 期スポーツ基本計画：スポーツ庁 - 文部科学省
（https://www.mext.go.jp/sports/content/000021299_20220316_3.pdf）（2022 年 11 月 11 日閲覧）
Merriam-Webster Dictionary
Merriam-Webster Dictionary（2022 年 12 月 24 日閲覧）
押して忍ぶ武の道.club
https://sabaki.club/845.html（2023 年 2 月 5 日閲覧）
在ニューヨーク日本国総領事館
https://www.ny.us.emb-japan.go.jp/jp/h/consulgeneralscommendation/2016/1/Mr-Tadashi-Nakamura-jp.html（2023 年 2 月 5 日閲覧）

業績リスト

◆国内学会口頭発表論文

2017 年 3 月 28 日　サービス学会第五回国内大会　広島市　広島県情報プラザ　pp.74-77

査読あり

論文名：アートコミュニティ活動における価値共創：参加者への生活の張りを高める

CANE 要因-

著者：金山逸郎，白肌邦生

◆国際学会口頭発表論文

2018 年 11 月 13 日　ICSSI2018 & ICServ2018　中華民国（台湾）台中市　Asia University

著者：Itsuro Kaneyama, Kunio Shirahada

論文名：「Value co-creation of service for Hari feeling:The case of art community activity」

Joint International Conference of Service Science and Innovation and Serviceology- ICSSI 2018 & ICServ 2018 Conference Proceedings (3), P.411-414　査読あり

◆学術誌掲載論文

Sustainability 2022, 14(23), 15920; https://doi.org/10.3390/su142315920

Received: 5 November 2022 / Revised: 26 November 2022 / Accepted: 26November2022 /

Published: 29 November 2022

査読あり

論文名：Eudemonic Servicescape: value co-creation in Karate Dojo

著者：Itsuro Kaneyama, Kunio Shirahada

謝辞

北陸先端科学技術大学院大学に修士からお世話になり，いよいよ最後の章の執筆に当たり，実に感慨深いものがあります．入学当初，主指導員である白肌邦生先生の「よい学術論文というものは破壊力があるのです.」というお言葉に触発され，なんとかそれに見合う判断力，学力を身に着けようと，今日までやって参りましたが，そこに向かうゼミ生を「闘牛士」とも呼ばれる白肌先生の意図が，大詰めになりようやくわかりかけてきたところでした．授業やゼミ，合宿における生徒同士の活発なディスカッション，対応される先生方の真剣な眼差しはどれも忘れ難いものです．白肌先生はもちろんのこと，内平直志先生，神田陽治先生，井川康夫先生，小坂満隆先生はじめ，副テーマをみていただいた佐藤那央先生，最終審査でご教示をいただいた，杉山大輔先生，西村拓一先生，敷田麻実先生，枚挙にいとまがありませんが，こうした多くの卓越した，個性豊かな先生方にご教授いただきましたことは本当に幸せであったと思います．ありがとうございました．石川本校，品川サテライトの事務の皆様にも大変お世話になりました．本当に感謝しています．ありがとうございました．また，勤務する会社の，欧州の現地法人の社外取締役だった故チルキー先生には，来日される度に親しくしていただき，懐かしい思い出です．本論文の事例対象として，データ収集において特別にご協力いただいた，世界誠道空手道連盟誠道塾中村忠会長には心より感謝申し上げます.

JAIST に入学を決めてから父の病でそれが一年延び，後期課程に入ってからは母の介護や娘の進学など家庭のことや，自分の仕事のことなど，環境の変化が大きい中，多くの時間が経過し，ようやくどうにか軟着陸いたします．私が大学院生の間に相次いで旅立った両親と，16 年前に一人娘を遺して逝った妻の佐保子に，天からのサポートありがとうございましたと，感謝の気持ちを改めて伝えたいと思います.

最後に，リカレント教育が進む中，そして人生 100 年と言われる中，社会人による学びを通した価値共創は個人にも社会にも大きな意味を持つと思います．私は，アクティブシニアの創造，未来を背負う若手のサポートをはじめ，それぞれの人のため，組織のため，社会のため，そしてお国，世界のためになるように，JAIST での体験を本論文に起こしたモデルを応用して内面化して，JAIST のエバンジェリストとして，いつでもどこでもエウダイモニアを生起し，価値共創を促進させ，体験そのものを伝えていかれるように，これからますます精進して参りたいと思います.

ありがとうございました

感謝と尊敬を込めて